横壁中村遺跡（14）

八ツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第44集

2014

国　土　交　通　省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

横壁中村遺跡（14）
八ツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第44集
二〇一四
国　土　交　通　省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

横壁中村遺跡（14）

八ツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第44集

2014

国　土　交　通　省
公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

10 区調査風景 (平成 17 年度)　中央の岩山が丸岩である

観音堂区調査風景 (平成 17 年度)　観音堂南半や 1 号塚の調査である

序

八ッ場ダムは、首都圏の利水および治水、さらに発電を目的として計画された多目的ダムです。現在、吾妻郡長野原町を中心に工事が進められています。

八ッ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成６年度から実施し、本年度で20年目を迎えます。横壁中村遺跡は平成８年度から発掘調査が開始され、平成18年度に至るまで継続された長期にわたる大規模な発掘調査となりました。また、調査された遺構や遺物は、本遺跡が縄文時代を中心とする、非常に大きく、また長く続いた集落であることを示しております。これらの膨大な資料を整理し報告する作業は平成15年度から開始され、今回は縄文時代から中世・近世に至る集落跡を中心に、遺構外出土遺物を含めて報告を纏めることができました。特に、大量に出土した経石は、本地域で初のまとまった資料提示となるでしょう。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者のみなさまには、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

また本書が吾妻郡内、ひいては群馬県の歴史を解明する上で末永く活用されることを願い序といたします。

平成26年３月

公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　上　原　訓　幸

例　言

1　本書は、八ッ場ダム建設工事に伴う事前調査として、平成８年度から実施されている『横壁中村遺跡』の発掘調査報告書である。横壁中村遺跡の発掘調査報告書は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第319集『久々戸遺跡・中棚遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』を第１冊目として、既に13冊が刊行されている。本書は横壁中村遺跡で検出された縄文時代～近世の集落跡を中心とした遺構・遺物および遺構外出土遺物を掲載しており、横壁中村遺跡の発掘調査報告書の第14冊目である。

2　横壁中村遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂530他に所在し、長野原町教育委員会と協議の結果、本遺跡名が決定された。

3　本発掘調査は、群馬県教育委員会の調整に基づき、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東地方整備局（平成13年１月までは建設省）の委託を受けて実施した。平成14年度からは、八ッ場ダム地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団八ッ場ダム調査事務所が担当している。

4　発掘調査は、平成８年４月１日から平成18年３月31日まで実施しており、今回報告する遺構・遺物の調査年度は、平成17・18年度の調査分を主に掲載している。

5　発掘調査体制は以下のとおりである。

調査担当　飯田陽一（主席専門員）、飯森康広（専門員 主幹）、今井和久（専門員）、小高哲茂（主任調査研究員）、金井　武（専門員）、篠原正洋（専門員）、関　俊明（専門員）、田村邦宏（主任調査研究員）、友廣哲也（専門員）、原　雅信（課長 調査研究担当）、森田真一（調査研究員）、山川剛史（調査研究員）

6　整理期間は平成25年４月１日から平成26年１月31日である。

7　整理体制は以下のとおりである。

整理担当及び本書編集　山口逸弘（上席専門員）

8　本報告書作成の担当

執筆　藤巻幸男（調査研究部長）（第１章及び遺物観察表の一部）
　　黒澤照弘（主任調査研究員）（遺物観察表－中世～近世遺物）
　　山口逸弘（上記以外）

石材同定　渡辺弘幸（甘楽町立新屋小学校教諭）・山口逸弘

遺構写真撮影　各調査担当者

遺物写真撮影　山口逸弘

委託　遺構測量および遺構図デジタル編集　株式会社測研
　　石器実測　技研コンサルタント株式会社
　　人骨鑑定　楠崎修一郎（古生物研究所）
　　炭化材樹種同定　パレオ・ラボ

整理補助　新保純子、石村千恵美、吉田豊子、黒岩扶美枝、足立やよい、富澤友理、篠原了子、安ヵ川京美、
　　川津えみ子、中嶋公江、日野亮子

9　出土遺物及び記録図・写真などの記録類は、すべて群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

10　発掘調査および調査報告書作成には、次の関係機関、諸氏にご助言をいただいた。記して感謝いたします。
国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、長野原町教育委員会、
大竹幸恵（長和町教育委員会）、金子直行（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、唐沢至朗（立正大学）、小池岳史（茅野市教育委員会）、佐藤雅一（津南町教育委員会）、白石光男（長野原町教育委員会）、大工原豊（國學院大學）、寺内隆夫（長野県立歴史館）、富田孝彦（長野原町教育委員会）、能登　健（前橋市教育委員会）、平林　彰（長野県教育委員会）、福島　永（辰野町教育委員会）、松島榮治（元嬬恋村郷土資料館館長）、締田弘美（長野県埋蔵文化財センター）、渡辺清志（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）

凡　例

1．挿図中に使用した方位は、座標北を表している。本書で使用する測量図の座標はすべて、2002年４月改正以前の日本測地系を用いている。真北方向角は、＋０°　41′28.5″である。
2．調査範囲には４×４ｍのグリッド方眼を設定し、各グリッド呼称は南東隅の交点を充てている。
3．遺構図の縮尺は、各挿図に示している。
4．遺構番号は、調査時の番号を用いている。当遺跡では調査中あるいは整理段階で各遺構の再検討を行っており、他の遺構に組み入れられたものや、遺構認定から外されたものもあるため、遺構番号は連続していない。
5．遺構図面中における遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。また●は土器・石器を表し、図示した遺物でこの表示のない遺物、遺構図中に番号の無い遺物は出土位置を記録しなかったものである。
6．遺物図の縮尺は、各挿図に示している。
7．写真図版中の遺物縮尺は、概ね遺物実測図と同縮尺としたが、任意のものもある。
8．遺物観察表及び計測表の計測値単位はcmである。石器等の重量はすべて残存値である。色調については、農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帖に基づいている。

目　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次・図版目次・表目次

第１章　調査の方法と経過等
第１節　調査に至る経過等
第２節　調査の経過等
第３節　調査の方法

第２章　遺跡の環境
第１節　地理的環境
第２節　歴史的環境

第３章　発見された遺構と遺物
第１節　遺跡の概要
第２節　基本土層
第３節　縄文・弥生時代の遺構と出土遺物
第４節　古代・中世・近世の遺構と出土遺物
第５節　遺構外出土遺物

第４章　分析
第１節　横壁中村遺跡出土人骨
第２節　横壁中村遺跡出土炭化材の樹種同定

第５章　総　括
第１節　縄文時代の遺構と遺物
第２節　弥生時代の遺構と遺物
第３節　平安時代の遺構と遺物
第４節　中・近世の遺構と遺物

遺構計測表・遺物観察表
抄録
写真図版
付図１枚

挿 図 目 次

第1図　横堀中村遺跡　位置図・・・

写 真 目 次

PL. 4　6．10区1号配石近接（北東から）
　　7．10区2号配石全景（南から）
　　8．10区3号配石全景（北から）
PL. 5　1．10区4号土坑（西から）
　　2．10区11号土坑土層（西から）
　　3．10区14号土坑検出状況（西から）
　　4．10区15号土坑（北東から）
　　5．10区154号土坑（北から）
　　6．10区158号土坑
　　7．10区159号土坑（東から）
　　8．10区215号土坑（北から）
　　9．10区232号土坑（南から）
　　10．10区250・281号土坑
　　11．10区284号土坑（北から）
　　12．10区327・328号土坑（北東から）
　　13．10区385号土坑（西から）
　　14．10区400号土坑（南から）
　　15．10区401・402号土坑（北から）
PL. 6　1．10区403号土坑（北から）
　　2．10区565・571・573～575号土坑（南から）
　　3．10区580号土坑（南西から）
　　4．10区588号土坑（南から）
　　5．10区622号土坑（南から）
　　6．10区626号土坑（南西から）
　　7．10区627号土坑（南から）
　　8．10区628・629号土坑（東から）
　　9．20区667号土坑（北から）
　　10．20区665号土坑（北から）
　　11．10区1号焼土（南から）
　　12．9区1号土器溜まり（南から）
　　13．9区2号土器溜まり（北から）
　　14．20区1号土器溜まり（東から）
　　15．20区2号土器溜まり（北から）
PL. 7　1．9区2号住居跡全景（西から）
　　2．9区2号住居跡カマド（西から）
　　3．9区3号住居跡全景（西から）
　　4．9区3号住居跡南壁（北から）
　　5．9区3号住居跡床下（西から）
　　6．9区4号住居跡全景（西から）
　　7．9区4号住居跡カマド（西から）
　　8．9区4号住居跡床下（西から）
PL. 8　1．10区5号住居跡全景（南から）
　　2．10区5号住居跡カマド（南から）
　　3．10区5号住居跡床下
　　4．10区6・7号住居跡全景
　　5．10区8号住居跡全景（南西から）
　　6．10区8号住居跡カマド（南から）
　　7．10区8号住居跡北東部遺物出土状況（南西から）
　　8．10区8号住居跡貯蔵穴（南から）
PL. 9　1．10区9号住居跡炭化材出土状況（真上から）
　　2．10区9号住居跡炭化材出土状況
　　3．10区9号住居跡炭化材出土状況
　　4．10区9号住居跡炭化材出土状況
　　5．10区9号住居跡炭化材出土状況
PL. 10　1．10区9号住居跡全景（西から）
　　2．10区9号住居跡カマド（南西から）
　　3．10区9号住居跡床下全景（西から）
　　4．10区9号住居跡遺物出土状態（東から）
　　5．10区12号住居跡全景（南西から）
　　6．10区12号住居跡遺物出土状況
　　7．20区123号住居跡全景（西から）
　　8．20区123号住居跡カマド（西から）
PL. 11　1．10区1号建物跡（南から）
　　2．10区1号建物跡（北から）
　　3．10区2号建物跡全景（南から）
　　4．10区2号建物跡近景（北から）
　　5．10区3号建物跡全景（西から）
　　6．10区3号建物跡全景（北から）
　　7．10区3号建物跡遠景（南から）
　　8．10区3号建物跡周辺ピット群（南から）
PL. 12　1．10区1号掘立柱建物跡全景（南から）
　　2．10区2号掘立柱建物跡全景（南から）
　　3．10区3号掘立柱建物跡全景（南から）
　　4．10区4号掘立柱建物跡全景（南から）
　　5．10区5～7号掘立柱建物跡全景
　　6．10区5号掘立柱建物跡全景（南西から）
　　7．10区6号掘立柱建物跡全景（南西から）
　　8．10区7号掘立柱建物跡全景（南西から）
PL. 13　1．10区8号掘立柱建物跡全景（西から）
　　2．10区1号竪穴状遺構（3号坑）全景
　　3．10区1号棚列全景（東から）
　　4．10区2号棚列全景（西から）
　　5．10区1号溝全景（北から）
　　6．10区3号溝全景（南から）
　　7．10区1号やっくら全景（東から）
　　8．10区2・3号やっくら全景（北から）
PL. 14　1．10区4号やっくら全景（南から）
　　2．10区1号石組全景（南から）
　　3．9区1号集石全景（南から）
　　4．10区1号集石全景（西から）
　　5．9区1号石垣全景
　　6．9区2号石垣全景（北東から）
　　7．9区2号石垣五輪塔出土状況（北東から）
　　8．9区2号石垣五輪塔出土状況（北から）
PL. 15　1．9区3号石垣全景（北東から）
　　2．9区3号石垣内2号集石全景（北から）
　　3．9区3号石垣西側全景（東から）
　　4．10区1号石垣近景（西から）
　　5．10区3号石垣全景（西から）
　　6．20区18号石垣全景（東から）
　　7．10区1号畑跡（北から）
　　8．20区1号畑跡（北東から）
PL. 16　1．10区242号土坑（南から）
　　2．10区243号土坑（南から）
　　3．10区420号土坑（南から）
　　4．10区432号土坑（南から）
　　5．10区432号土坑人骨・古銭出土状況（南から）
　　6．10区485号土坑検出状況（北から）
　　7．10区485号土坑（北から）
　　8．10区541号土坑
PL. 17　1．9区1・2号土坑（西から）
　　2．9区4号土坑（北から）
　　3．9区5号土坑（北から）
　　4．9区6号土坑（北から）
　　5．9区7号土坑（南から）
　　6．9区8号土坑（西から）
　　7．9区9号土坑（東から）
　　8．9区10号土坑（南から）
　　9．9区11号土坑（北から）
　　10．9区12号土坑（西から）
　　11．9区13～17号土坑（北から）
　　12．9区13～21号土坑（北から）
　　13．10区1・2号土坑
　　14．10区5号土坑（南から）
　　15．10区12号土坑（北から）
PL. 18　1．10区18号土坑（西から）
　　2．10区26号土坑（南から）
　　3．10区143号土坑（西から）
　　4．10区144号土坑（南から）
　　5．10区147号土坑（北から）
　　6．10区152号土坑（北から）
　　7．10区155号土坑（北東から）
　　8．10区264号土坑（西から）
　　9．10区405号土坑（西から）
　　10．10区407号土坑（西から）
　　11．10区408号土坑（南から）
　　12．10区409号土坑（西から）
　　13．10区411号土坑（東から）
　　14．10区426～428号土坑（北から）
　　15．10区431号土坑（南から）
PL. 19　1．10区433号土坑（南から）
　　2．10区435・436・443号土坑（西から）
　　3．10区437・442号土坑（南から）
　　4．10区408号土坑（北から）
　　5．10区439・440号土坑（南から）
　　6．10区566号土坑（南西から）
　　7．10区571号土坑（南から）
　　8．10区572号土坑（北から）
　　9．10区599号土坑（東から）
　　10．10区601号土坑（南から）
　　11．10区602号土坑（南から）
　　12．10区613号土坑（南西から）
　　13．11区1号土坑（北から）
　　14．11区2号土坑（南から）
　　15．11区3号土坑（西から）
PL. 20　1．11区4号土坑（南から）
　　2．11区5号土坑（南から）
　　3．11区6号土坑（北東から）

写 真 目 次

PL. 20　4．11区7号土坑（北から）
　　5．11区8号土坑（北から）
　　6．11区9号土坑（南から）
　　7．10区土坑群
　　8．10区東側土坑群（西から）
　　9．10区1号焼土検出状況（南から）
　　10．10区2号焼土（北から）
　　11．10区3号焼土（北から）
　　12．10区4号焼土（北から）
PL. 21　1．縄音堂全景（北東から）
　　2．縄音堂全景（東から）
PL. 22　1．10区9・10号掘立柱建物跡全景（南から）
　　2．10区9号掘立柱建物跡（南から）
　　3．10区9号掘立柱建物跡（東から）
　　4．10区10号掘立柱建物跡（南から）
　　5．10区10号掘立柱建物跡（東から）
　　6．20区2号石垣（北から）
　　7．20区2号石垣（東から）
　　8．20区2号A・B石垣（北から）
PL. 23　1．20区1号石垣（東から）
　　2．20区1号石垣上部　経石出土状況（東から）
　　3．20区1号石垣経石出土状況（西から）
　　4．20区1号石垣経石出土状況（南から）
　　5．20区1号塚経石出土状況（北から）
　　6．20区1号塚経石出土状況（北西から）
　　7．20区1号塚経石出土状況（東から）
　　8．20区1号塚経石出土状況（北から）
PL. 24　1．20区1号塚石垣下部検出状況（北から）
　　2．20区1号塚石垣下経石
　　3．20区1号塚経石出土状況
　　4．20区1号塚全景（西から）
　　5．10区597号土坑（東から）
　　6．10区598号土坑（東から）
　　7．10区600号土坑検出状況（東から）
　　8．10区600号土坑遺石除去（西から）
PL. 25　1．10区600号土坑人骨出土状況（南から）
　　2．10区600号土坑人骨出土状況（西から）
　　3．10区606号土坑（南西から）
　　4．10区611号土坑（南西から）
　　5．10区607号土坑検出状況（北から）
　　6．10区607号土坑（南から）
　　7．10区607号土坑遺物出土状態
　　8．10区607号土坑人骨出土状態（西から）
PL. 26　1．10区636号土坑（西から）
　　2．20区668号土坑（西から）
　　3．20区672号土坑（北から）
　　4．20区675号土坑（西から）
　　5．20区676号土坑検出状況（西から）
　　6．20区676号土坑（南から）
　　7．20区678・681号土坑（西から）
　　8．20区678号土坑（西から）
PL. 27　1．20区2号集石（東から）
　　2．20区3号集石（東から）
　　3．20区4号集石（東から）
　　4．20区5号集石（南から）
　　5．20区6号集石（北から）
　　6．20区6号集石下部土坑
　　7．20区669号土坑（南から）
　　8．20区670号土坑（南から）
　　9．20区671号土坑（南から）
　　10．20区673号土坑（南から）
　　11．20区674号土坑（南から）
　　12．20区680号土坑（西から）
　　13．20区調査風景
　　14．20区調査風景
　　15．20区調査風景
PL. 28　10区1号・10号住居跡出土遺物
PL. 29　10区11号・13号住居跡出土遺物
PL. 30　10区13号・2号住居跡出土遺物
PL. 31　1～4号埋設土器出土遺物
PL. 32　9・20区土器溜まり出土遺物
PL. 33　20区土器溜まり・10区配石・焼土・土坑出土遺物
PL. 34　10区土坑出土遺物
PL. 35　10・20区土坑・9区遺構外出土遺物
PL. 36　10区遺構外出土土器
PL. 37　11・20区遺構外出土土器・遺構外出土石器
PL. 38　9区2号・3号住居跡出土遺物
PL. 39　9区4～6号・8号住居跡出土遺物
PL. 40　10区8号・9号住居跡出土遺物
PL. 41　10区9号・12号住居跡・建物跡・20区123号住居跡出土遺物
PL. 42　10区建物跡・掘立柱建物跡・竪穴状遺構・やっくら・9区焼土・石垣出土遺物
PL. 43　9区2号石垣出土遺物
PL. 44　9・20区石垣・10区畑・土坑出土遺物
PL. 45　10区土坑・20区縄音堂出土遺物
PL. 46　縄音堂区出土遺物
PL. 47～66　縄音堂区出土経石
PL. 67　10・20区土坑・9区遺構外出土遺物
PL. 68　9・10区遺構外出土遺物
PL. 69　10区遺構外出土遺物
PL. 70　10区遺構外出土遺物
PL. 71　10・11・18・19区遺構外出土遺物
PL. 72　19・20区遺構外出土遺物
PL. 73　28～30区遺構外出土遺物・遺構外出土泥面子
PL. 74　18・19区遺構外出土土器
PL. 75　19・20区遺構外出土土器
PL. 76　20・28区遺構外出土土器
PL. 77～79　28区遺構外出土土器
PL. 80　29区遺構外出土土器
PL. 81　29・30区遺構外出土土器
PL. 82　30区遺構外出土土器・遺構外出土石製品
PL. 83　遺構外出土石製品
PL. 84　構外出土石製品・耳飾り・腕輪・土偶・遺構外出土土器

表 目 次

表1　「長野原町の遺跡」掲載の遺跡名称と横壁中村遺跡・・・6
表2　周辺の主な遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
表3－1　横壁中村遺跡　遺構数集計表（平成8～16年度）・・15
表3－2　横壁中村遺跡　主な遺構数集計表（平成17・18年度）15
表4　横壁中村遺跡出土人骨まとめ・・・・・・・・・・・・・・302
表5　横壁中村遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表・・・・・・302
表6　加工状況別の棚種構成・・・・・・・・・・・・・・・・・303
表7　部位別の棚種構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・304
表8～15　横壁中村遺跡9号住居跡出土炭化材の樹種同定結果　307～314
表16　「法華経」に無い経子・・・・・・・・・・・・・・・・・321
表17　遺構計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・324
表18　遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・332

文 中 写 真 目 次

写真1．10区144号土坑出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・・291
写真2．10区147号土坑出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・・292
写真3．10区242号土坑出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・・292
写真4．10区420号土坑出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・・293
写真5．10区541号土坑出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・・293
写真6．10区597号土坑出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・・294
写真7．10区600号土坑出土人骨［頭蓋骨上面観］・・・・・・・・・295
写真8．10区600号土坑出土人骨［頭蓋骨左側面観］・・・・・・・・・295
写真9．10区600号土坑出土人骨［上顎骨下面観：無歯顎］・・・・・・295
写真10．10区600号土坑出土人骨［下顎骨上面観］・・・・・・・・・295
写真11．10区600号土坑出土人骨［遺離歯側面観咬合面観］・・・・・296
写真12．10区607号土坑出土人骨［下顎骨咬合面観］・・・・・・・・296
写真13．10区611号土坑出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・297
写真14．10区636号土坑出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・297
写真15．10区縄音堂A出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・・297
写真16．20区668号土坑出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・298
写真17．20区672号土坑出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・299
写真18．20区675号土坑出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・299
写真19．20区676号土坑出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・300
写真20．20区678号土坑出土人骨［右下顎骨上面観］・・・・・・・・300
写真21．20区678号土坑出土人骨［下顎骨上面観］・・・・・・・・・300
写真22．20区678号土坑出土人骨［右上腕骨］・・・・・・・・・・・300
写真23．20区678号土坑出土人骨［大腿骨］・・・・・・・・・・・・301
写真24．20区678号土坑出土人骨［脛骨・腓骨］・・・・・・・・・・301
写真25．20区681号土坑出土人骨［遺離歯咬合面観］・・・・・・・・301
図版1　横壁中村遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（1）・・・315
図版2　横壁中村遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（2）・・・316
図版3　横壁中村遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（3）・・・317

第１章　調査の方法と経過等

第１節　調査に至る経過等

八ッ場ダム建設工事に係わる埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局（当時。現在は国土交通省関東地方整備局）と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会（当時。現在は東吾妻町）がその実施に関する協議を重ね、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長が、平成６年３月18日に「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の実施に関する協定書」を締結し、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画決定されたことによって、開始されることになった。実施計画書に示された調査組織等の役割は、調査実施機関は群馬県教育委員会で、調査機関は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（当時。現在は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）である。

この協定を踏まえて、平成６年４月１日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受託契約を締結し、八ッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とする、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が開始された。平成６年度から着手された発掘調査は、工事用進入路に関するものが主体となっている。これは、八ッ場ダム建設工事の大規模な工事を円滑に進めるため、機材や重機を搬入・搬出する仮設道路の整備が先行される状況にあったためである。

平成６年度に締結された協定によると、調査対象遺跡は48遺跡であり、そのうち横壁中村遺跡の位置する長野原町横壁地区の遺跡は７遺跡であった。横壁地区でも工事用進入路を原因とする調査が先行され、平成６年度には協定対象遺跡である横壁勝沼遺跡の調査が実施された。本遺跡も平成６年度に実施された協定での対象遺跡であり、平成６・７年度に行われた横壁勝沼遺跡の調査が終了した後、平成８年度から発掘調査が行われることになった。工事用進入路部分の調査は平成11年度に終了し、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分の調査に着手した。詳しくは次節「調査の経過等」にゆずる。

なお、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、平成11年４月１日に「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、平成11年４月以降は調査実施期間を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に変更し、現在の調査体制に至っている。

また、協定書の対象遺跡で、横壁地区に位置する７遺跡のうち上野Ⅳ遺跡と観音堂遺跡は、長野原町教育委員

第１図　横壁中村遺跡　位置図（国土地理院５万分の１地形図「草津」使用）

会との協議の結果、本遺跡に統合されることになった。

第２節　調査の経過等

横壁中村遺跡の調査は平成８年度より行われた。平成８年度から11年度までは工事用進入路部分、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分を中心とした調査であるが、これらの工事は一体のもので、調査は継続して行われてきた。各年度の調査範囲は、図示した通り（２図）であるが、年度はまたいで調査された範囲もあるので、図示した範囲は調査が終了年度を表している。各年度の調査経過等を、調査日誌を元に抜粋する。

平成８年度：調査事務所の設置、調査区への進入路などの造成工事を行ったため、本調査は７月１日開始となった。本年度は担当者３名による１班での調査であり、27地区18・28区を中心とする調査を実施した。進入路が狭く重機を導入できず、人力による掘削を強いられ調査は困難であった。11月23日に現地説明会を開催し、見学者は157名であった。

平成９年度：前年度の継続である18・28区の調査とともに、その西側にあたる19・20・29・30区の表土掘削を実施し、調査に着手した。担当者は４名が配置されたが、７月から９月まで１名は久々戸遺跡の調査にまわっている。調査面積は約５,000㎡である。11月３・４日に当事業団主催の平成９年度出土文化財巡回展示会が八ッ場地区で開催され遺物・パネルを出展した。

平成10年度：平成８・９年度の継続調査である。担当者は年度当初は４名の配置であったが、うち１名は林地区及び西久保Ⅰ遺跡の調査を担当することになったため、実質３名－１班体制による調査となった。本年度の調査面積は約6,200㎡であった。

平成11年度：前年度までの継続調査と20・30区で調査区を拡張した。担当者は５名、２班体制であったが、うち２名が長野原地区の調査を担当することになったため、10月末までは３名１班での調査となった。４月29日に前年度に検出された大型敷石住居跡、環状柱穴列などを現地説明会で公開し、153名の見学者を集めた。さらに本年度は調査区西側の28地区11区でも調査を行ったが、試掘の結果、遺構は確認できなかった。

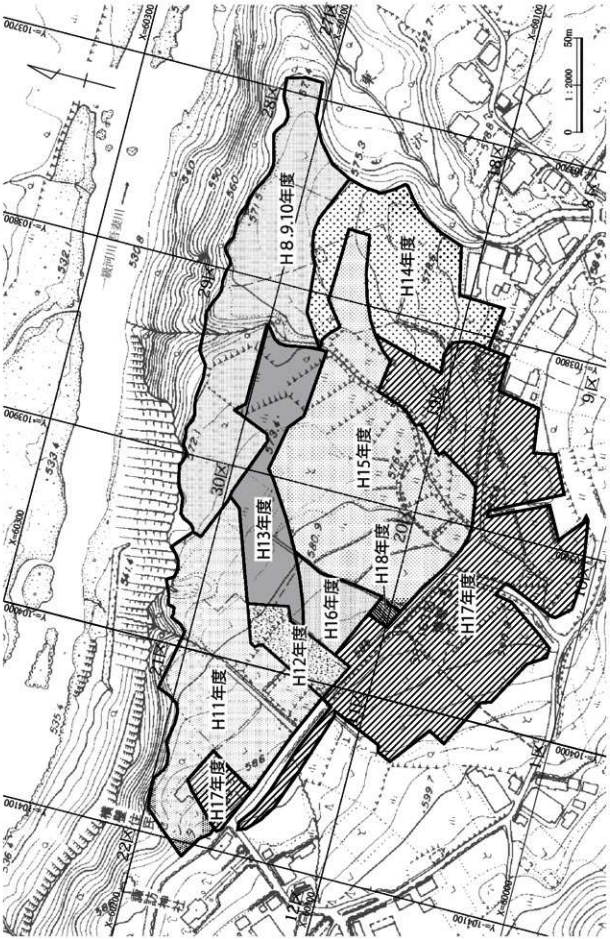
また、平成11年８月13日からの豪雨により横壁地区が被災したため、８月22日まで調査を休止した。本年度で工事用進入路部分の調査はすべて終了した。調査面積は約6,200㎡である。

平成12年度：工事用進入路部分の調査が終了したため、この南側の代替地護岸工事部分の調査を担当者７名による２班体制で開始する予定であったが、１班は林地区の調査に対応することとなり、残る１班も西久保Ⅰ遺跡との掛け持ちとなったため、調査対象面積は当初予定よりも大幅に減少した。本年度の調査は20区の調査が中心となり、一部18区の試掘調査を行った。また、調査区南側にあるゲートボール場の東側にパンザマスト（気象用観測マスト）が設置されるにあたって42㎡を併せて調査し、縄文時代の住居跡、中世の土坑を検出している。調査面積は約1,800㎡であった。

平成13年度：発掘作業員の雇用システムが変更になり、調査開始が６月４日になった。本年度の調査対象地は遺跡中央を流れる山根沢の両側にあり、18・19・20区にあたる。工事が予定されている山根沢の西側は工事行程にあわせて調査が終了した地区を順次、工事側に引き渡しながら進められた。11月に国土交通省より希少猛禽類の保護のため対策を講じてほしいとの要請があり、12月１日から調査体制を縮小したため調査の一部は次年度に継続となり、調査面積は当初の6,200㎡から5,200㎡となった。

平成14年度：本年度より当事業団の八ッ場ダム調査事務所が開所し、八ッ場地区の調査を管轄することになった。担当者は７名の２班体制での調査となり、前年度からの継続である18区を中心に調査を行った。本年度は６月から８月にかけて調査担当者２名が西ノ上遺跡へ、10月から４名の担当者が上郷岡原遺跡へ異動している。また、前年度と同様に11月から希少猛禽類保護のため調査体制を縮小しての調査となった。調査面積5,400㎡であった。

平成15年度：前年度の継続調査である18区と９・10・19・20区の調査を行った。担当者は当初６名の配置であったが、４月から６月は担当者２名が久々戸遺跡の調査にあたり、７月から１名が整理事業への異動となった。また11月からは１名が増員となった。調査は前年度に着手した18区の埋没河道の調査から開始し、その後19・20区の調査を行った。本年度は平成12・13年度の調査区まで終了する予定であったが、用地買収が遅れ、一部次年度に継続となった。本年度の調査面積は約8,000㎡であっ



第２図　年度別調査区全体図

た。

平成16年度：前年度に調査未了となった20区の調査を行った。担当者２名による１班体制である。本年度で代替地護岸工事部分が調査終了の予定であったが、調査区南側の道路沿いの一部が用地買収と墓地移転の遅れにより、調査が未了となり、次年度以降に継続となった。本年度の調査面積は1,400㎡である。

平成17年度：国道145号線バイパス部分の調査を、担当者５名による２班体制で行った。調査区は９・10区である。調査面積は14,000㎡であった。

平成18年度：10・20区の平成17年度調査で経塚が調査された地点を中心に、４月１日から４月13日まで担当者３名による短期間の調査を実施した。調査面積は188㎡である。

なお、本報告書は平成12年度調査のパンザマスト部分と平成17・18年度調査遺構を中心に掲載している。

第３節　調査の方法

１　調査の手順

発掘調査はバックフォーによる表土掘削を行い、順次作業員による遺構確認、遺構調査へと進んでいった。遺跡の現況は畑・水田・道路であった。

確認された遺構は、竪穴遺構の場合は土層記録化のため半截調査あるいはベルト設定をして、写真・土層図の記録を取った。配石遺構や石垣等の竪穴を有しない遺構に関しては、平面図の他に断面図や見通し図を加えるようにした。

遺構から出土した遺物は、その遺構番号を付し、さらに図面上に出土位置を記録したものについては個別番号を付し、標高を測定して取り上げた。遺構外から出土した遺物については、後述するグリッド単位で取り上げた。さらに出土位置を記録したものは遺構出土のものと同様に個別番号を付し取り上げた。遺構測量は作業員によるものと測量会社に委託して測量したものがある。本報告書が扱う主な遺構の殆どが、測量会社にデジタル測量を委託している。遺構図面の縮尺については、各遺構の特性に応じ、縮尺率1/10 ～ 1/200を選択して行っている。例えば、住居跡・土坑・配石等は1/20、炉・埋甕・埋設土器等は1/10、その他の遺構も1/20を原則としたが、溝・石垣・列石等規模の大きい遺構については1/40とした。全体図は1/100、1/200で作成した。また、列石の一部においては、バルーン撮影による空中写真測量も委託して実施した。

遺構の個別写真は、各担当者によるもので、主に35㎜モノクローム及びリバーサル、６×７判モノクロームフィルムを用い、一部６×７判リバーサルフィルムも状況に応じて撮影している。いわゆるデジタルカメラによる写真記録については、横壁中村遺跡においては殆ど行っていない。

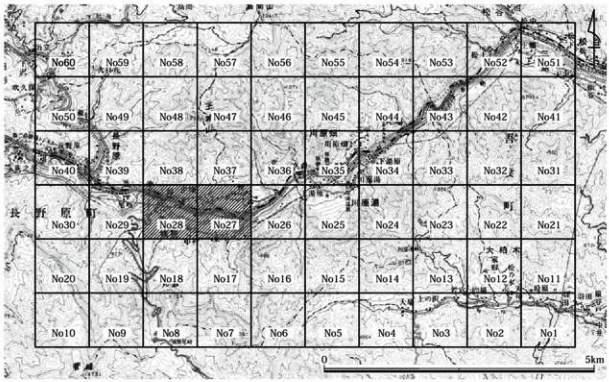
２　遺跡の名称

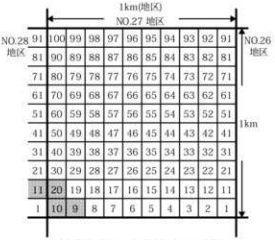
本遺跡は、吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂に位置する。発掘調査時の遺跡名称は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で行っている遺跡命名の慣例に従うと大字名と小字名の併記となり、「横壁観音堂遺跡」となるべきであるが、国土地理院1/25,000地形図「長野原」によると遺跡地には「中村」という小字名が記されているため、平成８年度の発掘調査開始時に「横壁中村遺跡」と命名した。しかしこの「中村」という小字名は行政的には用いられておらず、正確には前述の通り「観音堂」である。また、『長野原町の遺跡－町内遺跡詳細分布調査報告書』（長野原町教育委員会　1990）によると本遺跡は「観音堂」遺跡「上野Ⅳ遺跡」「山根Ⅰ遺跡」等の範囲に入っている。さらに群馬県遺跡台帳には「横壁中村遺跡」が記されているが、記述によるとこれは本遺跡の南西にあたり、位置がやや異なる。このように本遺跡の遺跡名に関しては、若干の混乱があるが、長野原町教育委員会との協議により「横壁中村遺跡」が本遺跡の正式名称として決定されている。このことについては、詳細を後述する。

３　調査区の設定

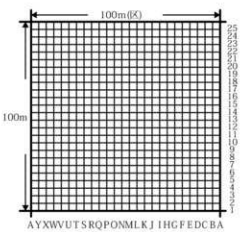
調査区の設定については、1994（平成６）年度から始まったハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査における「ハッ場ダム関係埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき実施されてきた。

ハッ場ダム建設に関連する遺跡には、遺跡名とともにYD（ハッ場ダムの略）番号を設定した。長野原町の調査対象区内における大字５地区（１．川原畑、２．川原湯、





100m方眼　中グリッド:「区」



4m方眼　小グリッド:「グリッド」

第３図　調査区の設定

３．横壁、４．林、５．長野原)、東吾妻町の大字３地区（6．三島、7．大柏木、8．松谷）に番号を付けた。横壁中村遺跡が所在する長野原町横壁はYD3であり、横壁中村遺跡はYD3－03という番号になる。

調査区については、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査対象地内を国家座標（2002年４月改正以前の日本測地系）を使用し、吾妻郡吾妻町（現東吾妻町）大柏木の東部付近を基点（X＝58000.00, Y＝－97000.00）とした。そして、まずこの基点から１km四方の「地区」（大グリッド）を西に10区画、北に６区画の60地区を設定した（3図上)。横壁中村遺跡は「地区」では「27地区」が中心となり、一部「28地区」にかかる。

次に各地区を100m四方の「区」（中グリッド）に区分し、東南隅から西に１～10区、次の列を11～20区のように100区に区分した（3図左下)。横壁中村遺跡27地区では、９・10・17～20区、28～30区が対象となり、本書で主に扱う遺構は、27地区９・10区・20区、28地区11区にあたる。このうち、28地区11区に関して、本書においては、11区と記している。

さらに各区を４m四方の「グリッド」に細分した。グ

リッドは東南を基点に東から西へＡ～Ｙのアルファベット25字、北へ１～25までの数字をそれぞれ割り当て、その交点となる南東隅を起点として、グリッド名を呼称している（3図右下）。

前述のように、遺構外扱いの遺物については、この中・小グリッド名を明記し取上げに努めている。

遺構名称は区ごとに連続する番号を付し、区をまたぐ遺構の場合は遺構の主体となる区の番号を優先している。この名称方法は、１遺跡内に区が跨る場合、例えば１号住居跡が１遺跡に複数存在する可能性もある。本遺跡の場合は、調査段階から必ず、「区」（中グリッド）名を付して、遺構名称を確定するようにしている（例10区１号住居跡）。しかしながら、区を跨ぐとはいえ小規模な遺跡の場合は、区にとらわれず、遺構名に通番を付して記録を取る、調査方法を採用する例もある。留意が必要であろう。

4　遺跡名称と調査範囲について

前々項において述べたように、横壁中村遺跡は複数の字名に跨る大規模な集落遺跡である。その遺跡名称については、いくつかの留意点を確認する必要があり、さらに、今後当地区の埋蔵文化財調査にあたり不必要な混乱を生じさせないためにも、横壁中村遺跡の遺跡名称について触れておきたい。

昭和51年刊行の「長野原町誌」上巻のなかに「町の歴史」と題する項目がある。そのなかで、先史時代の遺物散布地として30箇所の遺跡が上げられ、併せて群馬県遺跡台帳へ登録された町内の遺跡11箇所が紹介されている。そのなかで市町村№一（旧台帳№一三七八）とされたのが「横壁中村遺跡」である。この遺跡の所在地は「大字横壁字山根」と記載されており、時代は縄文時代とされている。掲載されている現況図（略図）では諏訪神社の南東の畑に位置が示されており、本遺跡調査範囲のやや南西部にあたるように見えるが、手書きの略図であり判断は難しい。

その後、八ッ場ダム建設事業の動きに呼応して昭和62年度から３ヵ年をかけて地元長野原町教育委員会と群馬県教育委員会が合同で町内全域の詳細分布調査を実施し、199箇所の遺跡を確認するに至った。この分布調査結果は平成２年に長野原町教育委員会から「長野原の遺跡」として刊行され、八ッ場ダム建設事業に伴う埋蔵文化財調査計画もこの資料を基に策定された。

「長野原町の遺跡」では、当遺跡が立地する横壁地区の北向き斜面に字名を冠した８箇所の遺跡が記載されている（第４図参照）。当遺跡は平成８年度から調査が実施されたが、当初に着手された地点は「長野原町の遺跡」では町遺跡№25「上野Ⅳ遺跡」に該当する。調査着手当初に遺跡名が「横壁中村遺跡」になった事情は定かではないが、地元長野原町教育委員会との協議の結果、当遺跡は町遺跡№24「上野Ⅲ遺跡」、№25「上野Ⅳ遺跡」、№27「観音堂遺跡」の3箇所にまたがる一連の集落遺跡であることから、「横壁中村遺跡」の名称で統合することになった（表１）。

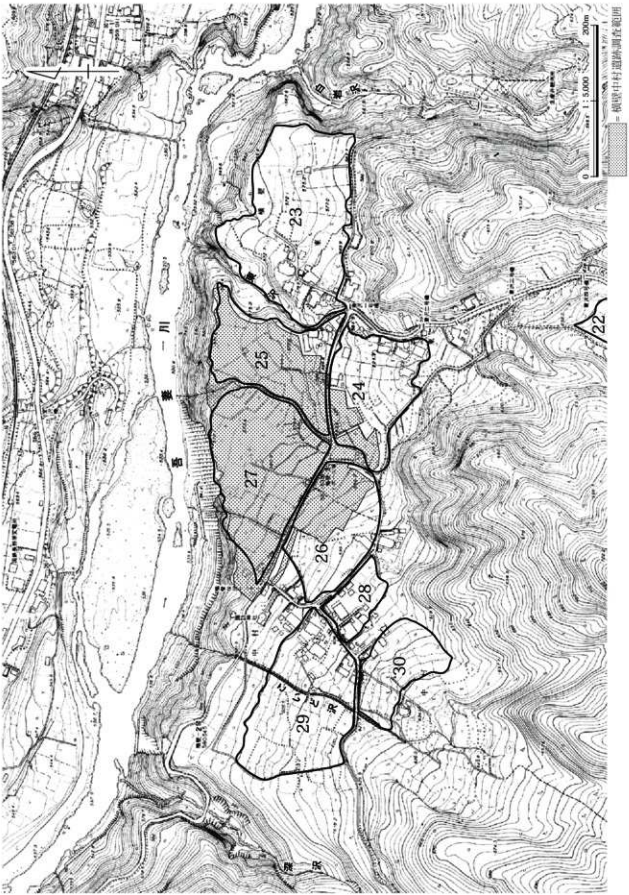
当遺跡の縄文集落主体部がある吾妻川沿いの緩斜面は、古くから「観音堂」と呼ばれていた地区で、発掘調査でも堂宇とみられる遺構と、それとの関連が想定される様々な施設等が確認されている。今回の報告にはその遺構群も含まれている。

ところで、当遺跡の西側地区は字名が「山根」であり、地境を目安に№26「山根Ⅰ遺跡」、№28「山根Ⅱ遺跡」、№29「山根Ⅲ遺跡」、№30「山根Ⅳ遺跡」に分割されている。当遺跡の調査範囲のうち、南西部の一部は№26「山根Ⅰ遺跡」にも及んでいるが、この部分だけを別の遺跡名で報告するのは混乱の元になると判断し、ここではその部分も含めて横壁中村遺跡として報告する。

ここに当遺跡の調査範囲の一部が№26「山根Ⅰ遺跡」の範囲にあることを明記し、今後に備えたい。

表１「長野原町の遺跡」掲載の遺跡名称と横壁中村遺跡

21	上野Ⅰ遺跡	
22	上野Ⅱ遺跡	
23	勝沼遺跡（東平遺跡）	
24	上野Ⅲ遺跡	横壁中村遺跡
25	上野Ⅳ遺跡	横壁中村遺跡
26	山根Ⅰ遺跡（中村遺跡）	
27	観音堂遺跡	横壁中村遺跡
28	山根Ⅱ遺跡	
29	山根Ⅲ遺跡	
30	山根Ⅳ遺跡	



第4図　横荘中村道路調査範囲と周辺道路

第２章　遺跡の環境

八ッ場ダム地域の遺跡の立地する環境については、既報告の『長野原一本松遺跡（１）』（群埋文2007）、『八ッ場ダム発掘調査集成（１）』（群埋文2008）に詳述されているので、そちらを参照していただきたい。ここでは、横壁中村遺跡の立地する地理的環境および歴史的環境について概観するにとどめる。

第１節　地理的環境

１　八ッ場ダム建設予定地と地域特性

八ッ場ダム建設予定地は、吾妻郡長野原町の東端にあたり、景勝地としても有名な国指定名勝「吾妻渓谷」に近い緑豊かな山間部にある。この地区は吾妻川の両岸に急峻な山が迫り、平坦地は川沿いの僅かな段丘面に限られている。ダムサイトの建設が計画されているのは、JR川原湯温泉駅から東へ700m程の地点で、そこから西のJR長野原草津駅付近までの約６kmの間にダム湖ができる予定である。ちなみに「八ッ場」とはダムサイト建設が予定されている地点の小字名に由来している。

長野原町がある西吾妻地域は、群馬県が長野県・新潟県と県境を接する山間部に位置し、新潟県との県境には草津温泉や草津白根山があり、長野県との県境には浅間山がある。いずれも活火山であり、草津白根山はイオウ成分が多く、浅間山は大量の軽石を噴出したことで知られている。

この西吾妻地域を地図でみると、長野・新潟の県境は2,000m規模の峰々を繋いだ分水嶺で分かれており、北側から草津峠・渋峠・万座峠・鳥居峠・地蔵峠・車坂峠を通じて往来をみる。また、東吾妻との境界も1,500mクラスの山峰からなる分水嶺で区分され、暮坂峠・須賀尾峠・二度上げ峠が連なる。ここで唯一低い場所は、吾妻川沿いの吾妻渓谷で、現在はここを国道145号線とJR吾妻線が通っているが、以前はかなりの難所といわれ、江戸時代までは須賀尾峠越えが主要道だったようだ。

こうしてみると、西吾妻地域は周囲を分水嶺で囲まれた、平野部からは見通すことのできない地域であることがわかる。長野原町市街地の標高は630m前後で、長野県側の周辺市町村と較べても大差は無いが、地形や気象条件などを要因とし、水田稲作には不向きな土地柄である。こうした地域特性は、当地域の遺跡の内容にも色濃く認められる。

２　遺跡の位置と地形

横壁中村遺跡がある長野原町は群馬県北西部に位置し、草津町、嬬恋村、旧六合村（現中之条町）、東吾妻町と接するとともに、長野県とも県境をなしている。

この地域の地質形成に大きな影響を与えたものには吾妻川と浅間山がある。吾妻川は長野県上田市境の鳥居峠付近に源を発し、東流して渋川市白井で利根川と合流する全長76.2kmの一級河川である。本遺跡はこの合流点から約43km遡った地点にあり、約６km下流には「関東の耶馬溪」の異名をとる国指定名勝「吾妻渓谷」がある。浅間山は町域の南西部、長野県境に位置し、黒斑・仏岩・前掛山・釜山の４つの火山体からなる標高2,568mの成層火山である。

本遺跡が占地する吾妻川流域の段丘面は、この吾妻川と浅間山の活動の影響を多分に受けて形成されている。本地域の段丘面は最上位・上位・中位・下位の４段丘面に区分されるが（長野原町1993）、このうちの最上位段丘と上位段丘の２面は約21,000年前の黒斑火山の噴火に伴い発生し、当時の吾妻川河床を約10m以上の厚さで埋め尽くした応桑泥流堆積物がその基盤となっている。最上位段丘面は吾妻川からの比高差が約80～90mであり、泥流流下後に殆ど浸食されずに段丘面となったものである。上位段丘面は比高差が約60～65mであり泥流堆積物を浸食し形成されている。これら２面の上には約11,000年前に噴出した浅間－草津黄色軽石（As-YPk）を含む関東ローム層が堆積している。中位段丘面は比高差30m前後で、本遺跡のある横壁地区などこの地域に最も広く分布している。低位段丘面は比高差10～15mである。

本遺跡は、この長野原町の北東に位置し、先述のように吾妻川右岸中位段丘面上に立地する。標高は約570mで、調査区北に接して流れる吾妻川とは比高差40mほどの段丘崖に隔てられている。また南側には山地斜面が迫り、西は深沢、東は東沢という２本の沢によって深く区画され、調査区のほぼ中央にも山根沢という小沢が北

流している。遺跡のある中位段丘面上は、これらの沢からもたらされた堆積物や土砂崩れなどによる崖錐堆積物が、吾妻川によって形成された段丘礫層上を覆い、吾妻川に向かい緩く傾斜している。調査区内の比高差は約15ｍである。調査区内にはこの崖錐堆積物の夥しい数の礫が存在し、調査を困難なものとした一因でもあった。中位段丘面における離水時期は明らかではないが、本遺跡の調査では段丘礫層上に関東ローム層及びAs-YPkの堆積が認められないことから、それ以降の離水と考えられる。

浅間山の活動では、本遺跡の中心となる縄文時代中期から後期にかけて大きな影響は無いと考えられるが、その後も活動は続き、遺跡内にその痕跡をとどめている。平安時代の住居跡内理土には浅間山起源と思われる火山灰の堆積が認められる例もあり、また江戸時代天明３（1783）年には、噴火とともに泥流を発生させ、流域に甚大な被害を及ぼしている。本遺跡においても、この天明泥流で埋没した畑跡が調査されている。

また、本遺跡の景観を語る上で欠かせないのが「丸岩」の存在である。調査区の南南西約1.5㎞に位置する標高1,124ｍを測る岩峰で、100万年ほど前に活動していた管峰火山の溶岩に由来すると考えられている。南側を除いた３方が100ｍにも達する垂直崖に囲まれ、本遺跡から臨むと巨大な円柱状にも見える特徴的な山容を呈している。この崖面には、柱状節理による割れ目が顕著に現れており、山の形状と併せ見た独特の景観は、奇峰と呼ぶに相応しく、当地域に暮らした人々にとって、一種のランドマークとなっていたと推測できよう。

第２節　歴史的環境

吾妻郡長野原町は明治22年町村制実施の際に、川原畑、川原湯、横壁、林、長野原、大津、羽根尾、古森、与喜屋、応桑の旧十ヶ村を合併して成立した。町内での遺跡の調査は、昭和29年に行われた勘場木遺跡の調査を嚆矢とし、昭和38・47・48年には群馬県により分布調査が行われ、昭和53年には石畑Ⅰ岩陰遺跡が発掘調査された。

昭和62年からはハッ場ダム建設に先行して、町教委による埋蔵文化財詳細分布調査が実施され、183箇所の遺跡地が確認された。（その後の調査で、平成17年３月現在で214遺跡に増加している。）これ以降、町教委による発掘調査が行われており、さらに平成６年からは、ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が当事業団によって進められている。これらの調査を元に、横壁中村遺跡の歴史的環境を概観する。

旧石器時代：長野原町内では、これまでの調査において旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は前述したように応桑泥流や浅間－草津黄色軽石（As-YPk）によって厚く覆われており、この下位を調査することは、掘削方法や安全上の問題などから難しいのが現状である。ただし、柳沢城跡（39）から遺構外ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが出土しており、より山間部の遺跡などでこれらの堆積物下位の調査が実施されれば、当該期の遺跡が確認される可能性は否定できない。

縄文時代：長野原町による埋蔵文化財詳細分布調査によれば、現在までに214箇所の遺跡地が確認されており、このうち約半数の105遺跡で縄文時代の遺構・遺物の存在が知られている。

草創期の遺跡としては、石畑Ⅰ岩陰遺跡が上げられる。奥行４ｍ、幅40ｍの大規模な岩陰遺跡であり、草創期から前期、晩期にわたる遺物と獣骨が出土している。旧石器時代の遺跡は未確認であるが草創期に人間の活動痕跡を見出せる遺跡として重要である。

早期の遺跡は、吾妻川左岸に多く見られる、特に山間地の急傾斜地形の中の狭小な緩傾斜地に見られる例が知られる。林地区の楡木Ⅱ遺跡（30）は撚糸文系土器群を中心としたまとまった資料が充実する。当地域を代表する早期遺跡である。同様に林地区に立地する、立馬Ⅰ遺跡（10）でも撚糸文系土器や沈線文系土器を出土する住居跡が調査されている。その他では、長野原一本松遺跡（33）や幸神遺跡（32）、坪井遺跡、三平Ⅰ・Ⅱ遺跡（１・２）、さらに中位段丘面に占地する尾坂遺跡（34）でも当該期の土器資料を見ることができる。いずれにしても、資料数は少なく今後の調査による充実を期待したい。

前期になると遺跡数は増加する兆しは見られるものの、平野部で知られるような大規模集落は確認されていない。数軒単位の小規模な集落あるいは土坑や包含層出土例が報告されている。

前期初頭期の集落遺跡としては、林地区の上原Ⅰ遺跡（17）が挙げられよう。長野原町教委の調査及び隣接した地点を当事業団が調査しているが、前期初頭（中道式

段階）の集落跡が広がりを見せる。詳細は今後の整理・報告に期待したい。

前期前葉～中葉段階では暮坪遺跡、長畝Ⅱ遺跡が小規模な集落跡を報告している。横壁中村遺跡や長野原一本松遺跡でも、該期資料は出土しているが量的には少ない。前期後葉段階でも、平野部の例に反して当地域の集落規模小規模に留まるようだ。

前期後葉の諸磯式期の集落跡としては、三平Ⅰ遺跡や楡木Ⅱ遺跡、川原湯勝沼遺跡（９）等で数軒単位の住居跡、土坑が調査されている。集落規模は小規模ではあるが、長野県域との直接的な交渉が反映される時期でもある。前期終末段階の資料とともに、注意する時期である。

中期は集落規模が飛躍的に大型化する時期である。当地域の縄文時代を代表する時期として位置付けられよう。本遺跡及び長野原一本松遺跡が代表されよう。ただし、両遺跡とも初頭～前葉段階の資料は貧弱である。

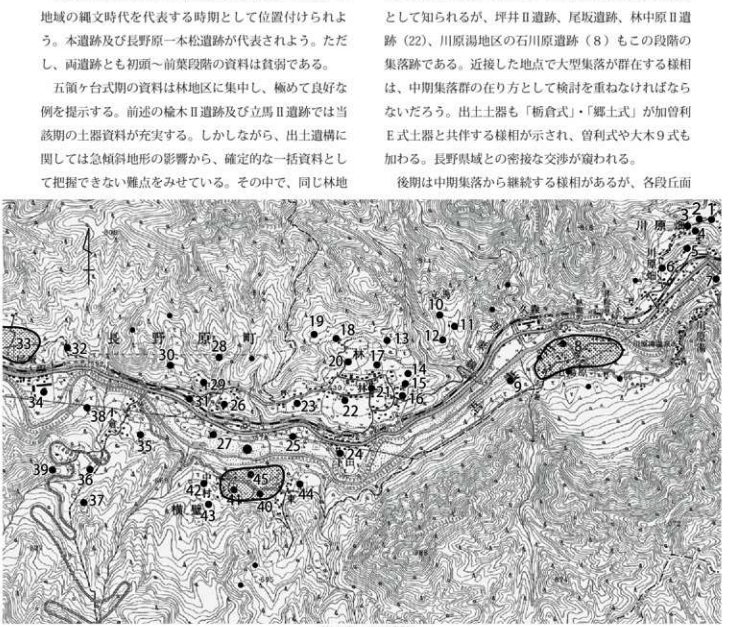
五領ヶ台式期の資料は林地区に集中し、極めて良好な例を提示する。前述の楡木Ⅱ遺跡及び立馬Ⅱ遺跡では当該期の土器資料が充実する。しかしながら、出土遺構に関しては急傾斜地形の影響から、確定的な一括資料として把握できない難点をみせている。その中で、同じ林地区の上原Ⅱ遺跡（18）における概期集落調査は傑出しよう。町教育委員会の調査であるが、中期初頭の遺構・遺物が多数確認されており、当地域の五領ヶ台Ⅱ式の様相を鮮明にする資料として評価されよう。

前葉段階の集落は少ない。前述の楡木Ⅱ遺跡や立馬Ⅱ遺跡で阿玉台式や勝坂式土器がある程度まとまった出土を見せるが、遺構出土ではないのが残念である。

中葉段階では、上ノ平Ⅰ遺跡（３）が挙げられよう。整理途中のため詳細は避けるが、既報告にある31号住居跡出土土器群は良好な一括資料である。横壁中村遺跡でも該期土器群の出土が見られる。

後葉段階になると、大型集落が点在する様相を見せる。横壁中村遺跡・長野原一本松遺跡は大型環状集落跡として知られるが、坪井Ⅱ遺跡、尾坂遺跡、林中原Ⅱ遺跡（22）、川原湯地区の石川原遺跡（８）もこの段階の集落跡である。近接した地点で大型集落が群在する様相は、中期集落群の在り方として検討を重ねなければならないだろう。出土土器も「栃倉式」・「郷土式」が加曽利Ｅ式土器と共伴する様相が示され、曽利式や大木９式も加わる。長野県域との密接な交渉が窺われる。

後期は中期集落から継続する様相があるが、各段丘面



第５図　周辺遺跡

に広がる傾向も見られる。敷石住居跡は横壁中村遺跡・長野原一本松遺跡の他に林中原Ⅰ遺跡（21）林中原Ⅱ遺跡、上原Ⅳ遺跡（20）、向原遺跡、柳Ⅱ遺跡などで調査されている。いずれも、後期初頭から前葉段階の集落跡が中心である。称名寺式土器、堀之内式土器が充実し、「茂沢類型」など長野県域を中心とする土器群も多く見られる。また、町教委調査の林中原Ⅰ遺跡では特徴的な注口土器の出土が充実し、深鉢類にも当地域の独自の様相を示す例が見られる。

後期中～後葉段階になると遺跡数は激減する。本遺跡で少量の遺構・遺物を見るが、他の遺跡では皆無に近い出土・検出数である。

晩期にいたっても、後期後葉と同様に遺跡数は少ない。住居跡の検出はなく、僅かに本遺跡で破片資料がまとまる程度である。佐野式あるいは大洞ＢＣ式段階の資料と考えられるが、今後の検討をさらに重ねたい。

終末段階の氷式段階に至ると、当地域でも少量ながら出土例が見られる。川原湯勝沼遺跡で再葬墓の要素が見られる土坑を見る他、久々戸遺跡、立馬Ⅰ遺跡で概期土器の出土が報告されている。ただ、終末段階の土器の多くが氷Ⅱ式あるいは弥生前期に比定される可能性があり、慎重な研究が必要であろう。

弥生時代：縄文時代後期後葉・晩期に続いて、遺跡数は希薄である。前期～中期段階では、立馬Ⅰ遺跡で住居跡や土器棺墓が、林中原Ⅱ遺跡では土壙墓、尾坂遺跡で土壙を見る。さらに本書に掲載する10区２号住居跡や土器溜まり遺構が挙げられよう。その他では、楡木Ⅲ遺跡（31）や坪井遺跡、外輪原遺跡で概期土器資料が出土している。前期～中期段階では、各遺跡で少量の遺構・遺物が確認されており、他の地域に較べると良好な資料群を提示するといえよう。

後期資料は極少量で、二社平遺跡で樽式土器終末段階の口縁部破片が出土するが、まとまりを持たず、今後の出土例を待ちたい。

古墳時代：現状では、吾妻渓谷上流において古墳そのものの存在が疑われよう。長野原町内では、幾つかの墳丘状の高まりを見るが、いずれも古墳としての確定性に乏しいようだ。集落遺跡にしても、町教委調査の林宮原遺跡（23）、当事業団調査の下原遺跡（25）で単独の住居跡が調査されているが、集落規模も平野部に比して極めて貧弱である。

奈良・平安時代：奈良時代に比定される遺跡は希薄で、現状では調査遺跡は皆無である。町教委の行った分布調査で羽根尾遺跡が相当するが詳細にはいたっていない。

平安時代になると、遺跡数は増える。本遺跡、楡木Ⅰ遺跡（29）、楡木Ⅱ遺跡、中棚Ⅰ遺跡（26）、上原Ⅰ遺跡、上原Ⅲ遺跡（19）、花畑遺跡（13）、林宮原遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡、三平Ⅰ遺跡、長野原一本松遺跡などが挙げられる。いずれも９世紀後半段階から10世紀前半段階に限られた集落遺跡で、特徴的な在り方を示している。また本遺跡以外の平安時代集落跡は、吾妻川左岸側に集中する傾向があり、集落立地上の偏在傾向も注意を要しよう。これらの集落遺跡の出土遺物としては、羽口や鉄砕、鎌・刀子などの鉄製品、砥石が目を引く。生産遺構としての鍛冶関連施設が各遺跡に点在していたようだ。併せて小型鎌や苧引き状金具の出土は、麻・苧などの生産・加工に係わる製品と考えられよう。

当地域の特徴的な該期調査遺構として、「陥穴状土坑」が挙げられよう。イノシシ・シカなどの動物を捕獲する罠猟遺構であるが、縄文時代の所産として見られていた例から、一転して平安時代～中世に比定されている。花畑遺跡の調査では、陥穴状土坑掘削の伴う工具痕を検出している。この陥穴状土坑も該期集落遺跡と同様に、吾妻川左岸側に偏在する傾向は興味深い。

中世：城館跡を挙げると柳沢城跡・長野原城跡・丸岩城跡・羽根尾城跡が挙げられよう。また、林中原Ⅰ遺跡においては、未周知の城跡が調査され、大きな成果を上げている。また近年の発掘調査では、城跡以外の遺構・遺物が各遺跡で確認されている。本遺跡でも石垣を伴う館跡と思われる遺構が調査・報告され、三平Ⅰ遺跡、三平Ⅱ遺跡、東原Ⅰ遺跡（14）、東原Ⅱ遺跡（15）、東原Ⅲ遺跡（16）、林中原Ⅰ遺跡、林中原Ⅱ遺跡、林宮原遺跡、下原遺跡、二反沢遺跡（28）、楡木Ⅱ遺跡、尾坂遺跡などで掘立柱建物跡や土坑、畑跡などを見ている。今後の調査研究によって、当地域の平安時代から近世に至る空白期間を埋めるべき良好な遺跡群と位置付けられよう。

近世：当地域の江戸時代遺跡の殆どが、天明三年（1783）における、浅間山噴火に伴う泥流堆積物下の遺跡群と位置付けられよう。民家跡としては東宮遺跡（５）、西宮遺跡（６）、石川原遺跡、下田遺跡、尾坂遺跡、町遺跡、

小林家住宅跡が挙げられよう。このうち、東宮遺跡と小林家住宅跡では、民家の規模のみならず生業・性格までを窺う資料が出土しており、極めて重要な在り方を示している。

当地域の泥流堆積物下の遺構としては、畑跡が著名である。泥流堆積直前に降下した軽石（As-A）が畑サクに堆積し、調査区全面に畑跡が調査された遺跡が多い。西久保Ⅳ遺跡(38)、久々戸遺跡、尾坂遺跡、中棚Ⅱ遺跡(27)、下原遺跡、下田遺跡などが挙げられる。中位段丘面及び下位段丘面に立地する遺跡であり、生産遺構としての畑跡研究には欠かせない遺跡群といえよう。本遺跡でも泥流堆積物下の畑跡が調査されている。

墓壙も各遺跡で多く調査されている。例えば、上ノ平Ⅰ遺跡では人骨を伴う墓壙多数が調査・報告され、当時の埋葬事例を窺う資料となっている。

天明三年以前の遺構・遺物も当地域の近世史研究では重要な要素である。例えば中棚Ⅱ遺跡では安永期とされる畑跡、町遺跡では泥流下畑跡下層面より製鉄関連遺構が調査されている。

当地域の歴史的環境は、縄文時代草創期より近世に至るまで、幾つかの断続期を経ながらも、その生活痕跡を連綿と窺い知る資料群として位置付けられる。特に縄文時代と江戸時代（天明三年）の調査資料は、他の地域に比しても劣ることなく秀でるべき資料である。今後も調査研究を重ねるべき遺跡群である。

主な参考文献

1．長野原町教育委員会（以下長野原町教委）1990『長野原町の遺跡―町内遺跡詳細分布調査―』長野原町埋蔵文化財調査報告第１集
2．長野原町教委　1995『柳沢城』長野原町埋蔵文化財調査報告第４集
3．長野原町教委　2004『町内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集林宮原遺跡Ⅱ・林中原Ⅰ遺跡Ⅳ・外輪原Ⅰ遺跡・長畝Ⅰ遺跡Ⅱなど
4．長野原町教委　2002『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
5．長野原町教委　2005『町内遺跡Ⅴ』長野原町埋蔵文化財調査報告第15集蟹本Ⅰ遺跡・立石遺跡・林宮原遺跡など
6．長野原町教委　2006『町内遺跡Ⅵ』長野原町埋蔵文化財調査報告第16集林中原Ⅱ遺跡Ⅵ・東原Ⅰ遺跡・林中原Ⅰ遺跡Ⅷなど
7．長野原町教委　2007『町内遺跡Ⅶ』長野原町埋蔵文化財調査報告第17集林中原Ⅰ遺跡Ⅸ・林宮原遺跡Ⅵ・東原Ⅰ遺跡Ⅱ・上原Ⅰ遺跡Ⅱ・上原Ⅳ遺跡・林中原遺跡Ⅺ・林中原Ⅱ遺跡Ⅹ・中棚Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・上原Ⅱ遺跡など
8．長野原町教委　2009『町内遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第18集林中原Ⅰ遺跡Ⅶ・久々戸遺跡など
9．長野原町教委　2010『町内遺跡Ⅸ』長野原町埋蔵文化財調査報告第19集草本原遺跡Ⅱ・三平Ⅰ遺跡・古屋敷遺跡・林宮原遺跡Ⅶ・林中原Ⅰ遺跡XV・上原Ⅳ遺跡ほか
10．長野原町教委　2010『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第20集
11．長野原町教委　2010『町内遺跡Ⅹ』長野原町埋蔵文化財調査報告第21集林中原Ⅱ遺跡XII
長野原町教委　2011『林宮原遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第23集
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下群埋文）1998『長野原久々戸遺跡』
12．群埋文　2002『長野原一本松遺跡（１）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告第１集（以下八ッ場ニ集）
13．群埋文2002　『八ッ場ダム発掘調査集成（１）』八ッ場２集　東宮遺跡・石畑遺跡・川原湯勝沼遺跡・横壁勝沼遺跡・西久保Ⅰ遺跡・山根Ⅲ遺跡・下田遺跡・花畑遺跡・檜木Ⅲ遺跡・尾坂遺跡など
14．群埋文2003　『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』八ッ場３集
15．群埋文2004　『久々戸遺跡（２）・中棚Ⅱ遺跡（２）・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』八ッ場４集
16．群埋文2005　『横壁中村遺跡（２）』八ッ場５集
17．群埋文2005　『川原湯勝沼遺跡』八ッ場６集
18．群埋文2006　『横壁中村遺跡（３）』八ッ場７集
19．群埋文2006　『立馬Ⅱ遺跡』八ッ場８集
20．群埋文2006　『上郷Ⅱ遺跡・廣石A遺跡・二反沢遺跡』八ッ場９集
21．群埋文2006　『横壁中村遺跡（４）』八ッ場10集
22．群埋文2006　『立馬Ⅰ遺跡』八ッ場11集
23．群埋文2007　『下原遺跡Ⅱ』八ッ場12集
24．群埋文2007　『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』八ッ場13集
25．群埋文2007　『横壁中村遺跡（５）』八ッ場14集
26．群埋文2007　『長野原一本松遺跡（２）』八ッ場15集
27．群埋文2007　『上郷岡原遺跡（１）』八ッ場16集
28．群埋文2008　『幸神遺跡・上原Ⅳ遺跡・山根Ⅲ遺跡（２）』八ッ場17集
29．群埋文2008　『檜木Ⅱ遺跡（１）』八ッ場18集
29．群埋文2008　『長野原一本松遺跡（３）』八ッ場19集
30．群埋文2008　『横壁中村遺跡（６）』八ッ場20集
31．群埋文2008　『上郷岡原遺跡（２）』八ッ場21集
32．群埋文2008　『横壁中村遺跡（７）』八ッ場22集
33．群埋文2008　『上ノ平遺跡（１）』八ッ場23集
34．群埋文2008　『長野原一本松遺跡（４）』八ッ場24集
35．群埋文2008　『上郷西遺跡』八ッ場25集
36．群埋文2009　『立馬Ⅲ遺跡』八ッ場26集
37．群埋文2009　『檜木Ⅱ遺跡（２）』八ッ場27集
38．群埋文2009　『長野原一本松遺跡（５）』八ッ場28集
39．群埋文2009　『横壁中村遺跡（８）』八ッ場29集
40．群埋文2009　『横壁中村遺跡（９）』八ッ場30集
41．群埋文2009　『上郷岡原遺跡（３）』八ッ場31集
42．群埋文2009　『上郷A遺跡（２）』八ッ場32集
43．群埋文2010　『横壁中村遺跡（10）』八ッ場33集
44．群埋文2010　『横壁中村遺跡（11）』八ッ場34集
45．群埋文2010　『東原Ⅰ遺跡・東原Ⅱ遺跡・東原Ⅲ遺跡』八ッ場35集
46．群埋文2011　『東宮遺跡（１）』八ッ場36集
47．群埋文2012　『横壁中村遺跡（12）』八ッ場37集
48．群埋文2012　『東宮遺跡（２）』八ッ場38集
49．群埋文2012　『檜木Ⅰ遺跡・上原Ⅳ遺跡（２）・西久保Ⅳ遺跡』八ッ場39集
50．群埋文2013　『長野原一本松遺跡（６）』八ッ場40集
51．群埋文2013　『横壁中村遺跡（13）』八ッ場41集
52．群埋文2011　『年報30』尾坂

表２　周辺の主な遺跡一覧

No.	遺　跡　名	所在大字	段丘面	概　　要	文献など
1	三平Ⅰ遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文時代早期～前期集落跡、住居跡２軒。弥生時代前期～中期土坑。平安時代以降の掘立柱建物跡３・焼土10基など	9・24
2	三平Ⅱ遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文時代包含層（草創期～前期）。掘立柱建物跡７棟などの中世屋敷跡	24
3	上ノ平Ⅰ遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文時代中期中葉集落跡、住居跡16軒。平安時代集落跡、住居跡20軒など	33
4	上ノ平Ⅱ遺跡	川原畑	最上位段丘面	縄文・平安の散布地とされる	
5	東宮遺跡	川原畑	中位段丘面	天明泥流下屋敷跡７棟、建物の構造と性格が把握できる良好な遺存状態であり、礎石と供に束・土台・大引・床板が出土している。酒蔵、槽場跡も検出されている	13・46・48
6	西宮遺跡	川原畑	中位段丘面	天明泥流下の屋敷跡・小屋・畑跡。畑跡には復旧調を含む	
7	西ノ上遺跡	川原畑	中位段丘面	天明泥流下畑跡	15
8	石川原遺跡	川原畑	中位段丘面	縄文時代中期・後期集落跡、配石遺構など。近世畑・屋敷跡など	
9	川原湯勝沼遺跡	川原畑	中位段丘面	縄文晩期埋甕２基。平安時代集落跡、住居跡３軒。天明泥流下畑跡など	17
10	立馬Ⅰ遺跡	林	山地斜面	小規模な縄文時代早期集落跡、晩期集落跡、弥生時代中期集落跡・貴重意、平安時代集落跡、陥穴状土坑など	22
11	立馬Ⅱ遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期包含層、中期前葉～後葉集落跡、住居跡11軒。陥穴状土坑など	19
12	立馬Ⅲ遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期集落跡、住居跡３軒。中期住居跡１軒。良好な早期包含層。陥穴など	36
13	花畑遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代中期初頭包含層。平安時代集落跡、住居跡３軒。陥穴など	13
14	東原Ⅰ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代土坑及び包含層。平安時代以降の陥穴状土坑。中・近世の掘立柱建物跡２棟など	45
15	東原Ⅱ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代包含層。陥穴状土坑９基。中・近世での掘立柱建物跡１棟など	45
16	東原Ⅲ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代早期～後期包含層。中・近世の掘立柱建物跡４棟、内耳鍋や古瀬戸など出土。江戸後期礎石建物跡１棟	45
17	上原Ⅰ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代前期初頭集落跡、中期後葉住居跡１軒。平安時代集落跡、陥穴状土坑を調査	
18	上原Ⅱ遺跡	林	最上位段丘面	2011年度、町教委調査。縄文時代中期初頭の集落跡など	
19	上原Ⅲ遺跡	林	最上位段丘面	2011年度、町教委調査。平安時代集落跡など	
20	上原Ⅳ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代包含層、中・近世土坑など	
21	林中原Ⅰ遺跡	林	最上位段丘面	町教委調査では、縄文時代後期前葉集落跡。住居跡１軒、配石遺構など。注口土器などの良好な出土遺物を見る。 事業団調査では、縄文時代前期～中期集落跡、中・近世掘立柱建物などを調査	3・7・8・9・10
22	林中原Ⅱ遺跡	林	最上位段丘面	縄文時代中期～後期の大規模集落跡。弥生中期墓壙、住居跡４軒。中・近世掘立柱建物群を調査している	6・11
23	林宮原遺跡	林	最上位段丘面	西吾妻地域で初出の古墳時代後期住居跡を見る。平安時代集落跡、住居跡14軒など。学引金具の出土	3・7・9・11
24	下田遺跡	林	中位段丘面	天明泥流下の民家１軒、畑跡。鏃を出土する	13
25	下原遺跡	林	下位段丘面	古墳時代中期・平安時代集落跡。住居跡各１軒。中世屋敷跡、中～近世畑跡など	14
26	中棚Ⅰ遺跡	林	上位段丘面	縄文時代早期包含層、平安時代住居跡１軒など。2011年度　町教委調査	
27	中棚Ⅱ遺跡	林	下位段丘面	天明泥流下の畑跡及び安永９年埋没と推定される畑跡など	14
28	二反沢遺跡	林	山地斜面	石垣を付設する中世山城。鍛冶関連遺物出土。近世畑跡	20
29	楡木Ⅰ遺跡	林	上位段丘面	縄文時代中期土坑、平安時代集落跡、近世屋敷跡など	49
30	楡木Ⅱ遺跡	林	山地斜面	縄文時代早期～中期前葉集落跡、住居跡36軒。平安時代集落跡、住居跡38軒。中世掘立柱建物群など	28・37
31	楡木Ⅲ遺跡	林	上位段丘面	縄文時代前期～後期包含層。弥生時代中期包含層	13
32	宗神遺跡	長野原	上位段丘面	縄文時代中期集落跡。住居跡２軒。早期～後期包含層。近世以前の畑跡など	28
33	長野原一本松遺跡	長野原	上位段丘面	縄文時代中期～後期の環状集落。その他に平安時代集落、陥穴状土坑など	12・26・29・34・38・50
34	尾坂遺跡	長野原	中位段丘面	縄文時代中期集落跡、早期～後期包含層。中世掘立柱建物跡。天明泥流下の畑跡など	13・52
35	西久保Ⅰ遺跡	横堀	中位段丘面	縄文時代中期末葉集落跡、住居跡１軒、水場遺構など	13
36	西久保Ⅱ遺跡	横堀	山地斜面	平安時代の散布地とされる	
37	西久保Ⅲ遺跡	横堀	山地斜面	散布地	
38	西久保Ⅳ遺跡	横堀	中位段丘面	縄文時代建物跡、平安時代住居跡・焼土、近世畑など	49
39	柳沢城跡	横堀	山地斜面	中世城郭。郎切・土居・礎石・腰曲輪・石組遺構。陶磁器・鉄製品・銅製品。	2
40	山根Ⅰ遺跡	横堀	中位段丘面	平安時代散布地とされる	
41	山根Ⅱ遺跡	横堀	中位段丘面	散布地	
42	山根Ⅲ遺跡	横堀	中位段丘面	縄文時代中期後葉集落跡。住居跡３軒、土坑39基。中・近世溝１条など	13・28
43	山根Ⅳ遺跡	横堀	中位段丘面	縄文・平安の散布地とされる	
44	横堀勝沼遺跡	横堀	中位段丘面	槍先形尖頭器の出土（表採）。縄文時代土坑。平安時代住居跡１軒	13
45	横堀中村遺跡	横堀	中位段丘面	縄文時代中期～後期の大規模集落跡。平安時代集落跡。中・近世の掘立柱建物群、礎石建物跡・土坑墓など	14・16・18・21・25・30・32・39・40・43・44・47・51

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

横壁中村遺跡は、縄文時代中期後半から後期後半を中心とする集落遺跡で、平成18年度までの調査で竪穴住居230軒以上が調査されており、県内でも有数の大規模集落跡であることが判明しつつある。

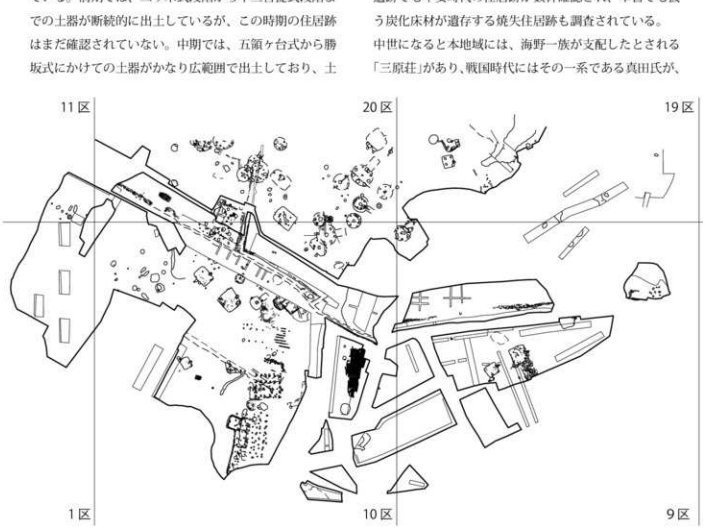
遺跡は、その中央を流下する通称「山根沢」の両側に展開しており、東側は「丸岩」の足下から流れる「東沢」までを範囲としている。北側及び西側の範囲は今後の調査に負うところとなるが、冬には午後３時で陽が山に入る北向きの台地に、これほどの大規模集落が維持されたのは、間近にこれらの沢があったからであろう。

この地で人々の生活が始まるのは、縄文時代早期からで、18区１号河道沿いで鵜ヶ島台式土器等が少量出土している。前期では、二ッ木式段階から十三菷提式段階までの土器が断続的に出土しているが、この時期の住居跡はまだ確認されていない。中期では、五領ヶ台式から勝坂式にかけての土器がかなり広範囲で出土しており、土坑は幾つか確認されている。住居が出現するのは勝坂式後半からである。中期後半は集落が最大規模となり、その後も集落はやや規模を縮小しながら継続し、列石遺構や配石遺構、掘立柱建物等が伴う集落が後期前半まで認められる。後期後半になると山根沢の西側に配石墓群が形成されるが、この時期の集落の構成ははっきりしない。晩期では、遺構が明瞭なものが見当たらないが、遺物は前半期のものから終末期まで多量に出土しており、本地域の主要遺跡の一つといって良いだろう。

弥生時代初頭の遺物も比較的多く出土しているが、県内で稲作農耕が始まる中期後半期になると活動の痕跡は途絶えてしまう。この状況は、本遺跡で限らず、西吾妻地域全体に認められる傾向である。

その後、本地域に集落が戻るのは９世紀代からで、本遺跡でも平安時代の住居跡が数軒確認され、本書でも扱う炭化床材が遺存する焼失住居跡も調査されている。

中世になると本地域には、海野一族が支配したとされる「三原荘」があり、戦国時代にはその一系である真田氏が、



第６図　９・10・20区全体図

甲斐武田氏の指示で本地域を掌握するようになる。本遺跡の南西には柳沢城と丸岩城があり、遺跡内では20区を中心に鍛冶場を伴う中世館が確認されている。また、その他に中世から江戸期の墓や経塚、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した畑跡も調査され、本書にもその一部を掲載している。

以上が発掘調査成果をもとにした本遺跡の概要である。今回は、平成17年・18年度で調査された遺構・遺物を中心にし、縄文時代・弥生時代・平安時代集落跡、中世建物群、中～近世土坑群、経塚、石垣、さらに遺構外出土遺物を掲載する。

これまでの横壁中村遺跡報告書は、各冊が時代・時期別、遺構別といった性格・属性毎の報告を重ねてきたが、本書に限り、時代・時期・遺構種を取り混ぜて報告することになる。

表３－１　横壁中村遺跡　遺構数集計表（平成８～16年度）

遺構種別	時代	調査区								合計
		9区	10区	18区	19区	20区	28区	29区	30区	
竪穴住居		1	3	27	52	104	19	18	13	237
土坑	縄文			86	110	272	11	21	28	528
	弥生					4				4
	平安				1	1				2
	中世以降			161	134	170	2	1	4	472
掘立柱建物跡	縄文			4		6		1		11
	中世				3	7				10
埋設土器	縄文		2	23	9	27	4		2	67
配石遺構				42	17	28	17	53	15	172
列石遺構				7	4	5	12	4		32
集石遺構				1		4				5
環状柱穴列	縄文				2				1	3
柱穴列	縄文				1			1		2
	中世					1				1
焼土	縄文			1	2	2		2	1	8
	中近世			12	6	16				34
埋没河道				1	5					6

表３－２　横壁中村遺跡　主な遺構数集計表（平成17・18年度）

遺構種別	時代	調査区				合計
		9区	10区	11区	20区	
竪穴住居	縄文		4			4
	弥生		1			1
	平安	3	6		1	10
土坑	縄文		23		2	25
	弥生		4		1	5
	平安	5	2			7
	中世以降	17	600	9	5	631
墓壙	中世以降		13		6	19
建物・掘立柱建物跡	中世		10			10
	近世		3			3
埋設土器	縄文		2			2
	弥生		2			2
配石遺構	縄文		3			3
集石遺構		1	2		4	7
柱穴列	中世以降		2			2
焼土	弥生		1			1
	中近世	1	3			4

第２節　基本土層

本遺跡が乗る段丘面は、岩盤の上に吾妻川が運んだ段丘礫層を基盤としており、その上に南側の岩塊を核とする山地からの崩落土と礫が繰り返し堆積して形成された、北向きの緩傾斜地に遺跡は立地している。台地上の基本土層は図に示したⅠ～Ⅹ層まで確認しているが、この10層が１箇所で全て描う断面は今のところ認められない。また、各土層の層厚は地区によって異なっているため、あえて記入していない。縄文時代の遺物は概ねⅤ層からⅦ層にわたって包含されるが、縄文時代晩期終末から弥生時代の遺物はⅣ層の下半分に包含される傾向がある。また、古代の遺物はⅣ層上層に、中世の遺物はⅢ層で出土する。

11区３トレンチ土層
1 黒褐色土　表土。締まり弱い均質土
2 にぶい黄褐色土　砂礫層。大型の角礫含
3 黒色土　締まり弱い粘質土
4 褐色土　小型の亜角礫を含む砂壌土

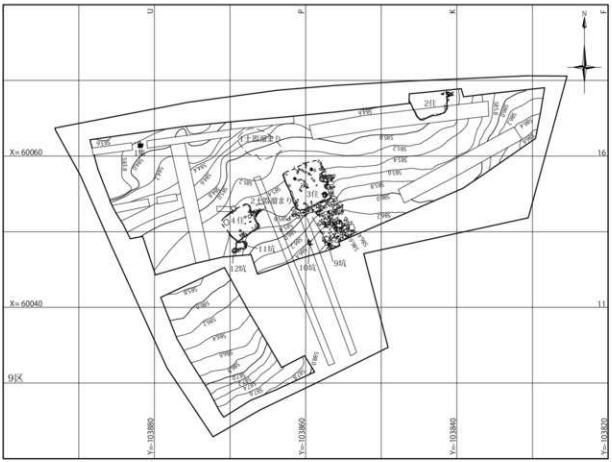
10区２トレンチ土層
1 黒褐色土　表土。締まり弱い均質土
2 褐色土　角礫を含む。赤色・黄色・白色粒子少量混
3 黒褐色土　礫粒多く含む。赤色・黄色・白色粒子少量混
4 暗褐色土　礫粒多く含む。黄色粒子多量混。褐色土塊混
5 褐色土　礫粒・砂礫含む。粘性強い
6 にぶい黄褐色土　粘質土。礫粒少量含む。
7 暗褐色土　粘質土。砂礫少量含む。黄褐色土塊混
8 暗褐色土　角礫・礫粒多量混。赤色・黄色粒子少量混。粘性強い
9 にぶい黄褐色土　砂層。角礫・赤色・黄色粒子少量混
10 暗褐色土　粘土層。均質。粘性強い
11 灰黄褐色土　砂礫層。川砂多く洪水層かも。角礫多量混

基本土層(縮尺不同)

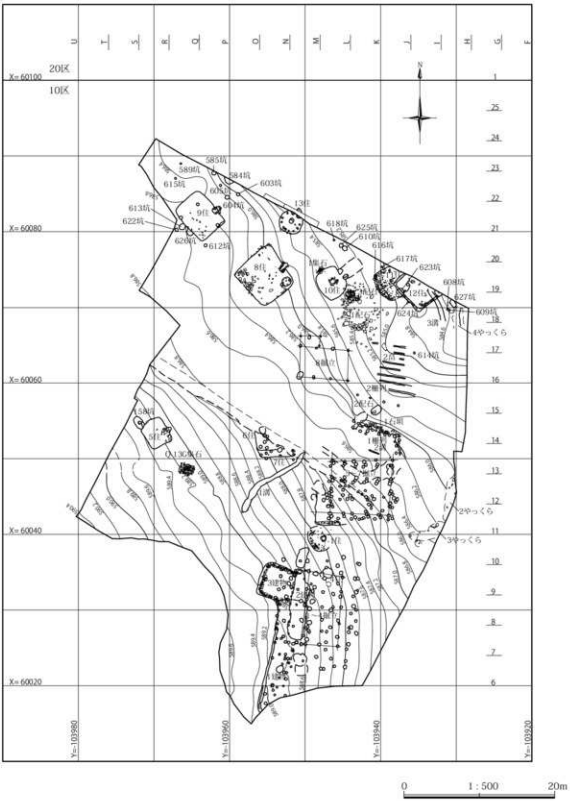
Ⅰ	Ⅰ	表土（耕作土）
Ⅱa	Ⅱa	浅間Ａ泥流
Ⅱb	Ⅱb	浅間Ａ軽石
Ⅱc	Ⅱc	浅間Ａ軽石下畑の耕作土
Ⅲ	Ⅲ	淡褐色土　軟質で炭化物を含む。中世に比定される土壌で、20区１号館付近では炭化物を多量に含み、黒土化していた
Ⅳ	Ⅳ	灰黒褐色土　やや軟質で均質。古代に比定される土壌であるが、本遺跡では大半が混土化されて、層はほとんど残っていない
Ⅴ	Ⅴ	黄褐色土　やや軟質。縄文時代後期後半頃の土壌で、加曽利Ｂ式期の遺構と関連する。今のところ、山根沢周囲に認められることから、Ⅶ層ないしはローム層の２次堆積の可能性が高い
Ⅵ	Ⅵ層	灰褐色土　締まりのある土壌で、黄色軽石や白色粒子を多く含む。縄文時代に比定される土壌で、中期から後期前半の遺構・遺物はこの土層中に含まれる。なお、下半部を中心に多量の礫を含む
Ⅶ	Ⅶ層	西側縁辺に特有の土壌で、層位はⅧ層と同じであり、沢沿いに流れたものかもしれない。この土層の上層部には縄文時代前期前半の土器が包含され、この土層で埋没した土坑も確認されている
Ⅷ	Ⅷ層	黄褐色粘質土　崩落したローム層の二次堆積土で、多量の礫・砂礫を含む部分が多い。本遺跡で20区の西半部でのみ確認されており、現在の山根地区集落はこの土層の高まりの上に立地していると考える。供給源は山根集落南側の沢上流部、つまり丸岩山の北麓で、崩落時期は縄文時代早期後半頃と思われる
Ⅸ	Ⅸ層	黒褐色粘質土　硬質で粘性が強く、黄色軽石と白色粒子を多量に含む
Ⅹ	Ⅹ層	黄色砂礫層　吾妻川が運んだ段丘砂礫層で、本遺跡北側の崖面では15m以上の堆積が確認できる。この下層は基盤の岩塊となる

第７図　調査区内の土層柱状図と基本土層

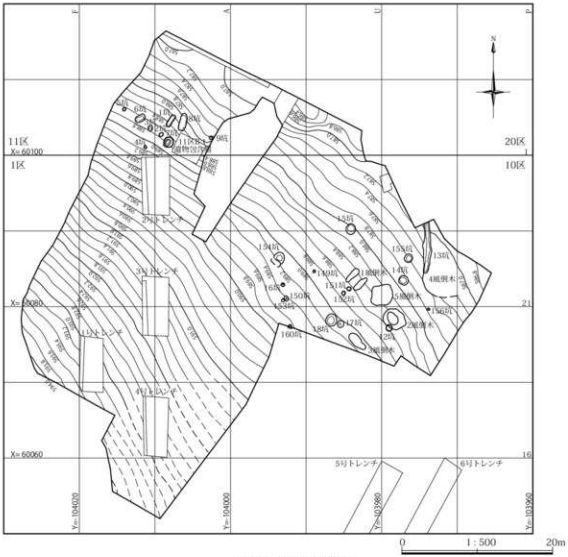
第８図　横壁中村遺跡全体図（網掛け部分は既報告）


9区
X=60060
X=60040
X=60090
X=60080
X=60070
Y=103880
Y=103860
Y=103840
Y=103820
Y=103810
Y=103800
N
0 1:250 10m
0 1:500 20m

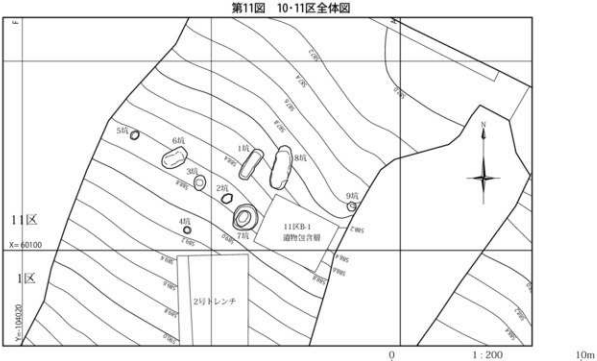
第９図　９区全体図


20区
10区
X=60100
X=60080
X=60060
X=60040
X=60020
Y=103980
Y=103960
Y=103940
Y=103920
N
0
1:500
20m

第10図　10区全体図



第11図　10･11区全体図



第12図　11区遺構配置図

第13図　10区遺構配置図

第３節　縄文・弥生時代の遺構と出土遺物

ここでは、平成12年度、平成17・18年度に調査された縄文時代と弥生時代の遺構・遺物を報告する。掲載にあたっては、縄文時代～江戸時代の間、時代毎の編集を心がけたが、縄文時代と弥生時代の遺構（特に土坑）の区別が困難な例があり、両時代を同じ節で報告する。また土坑に関しては、出土遺物が見られない土坑など時期判別に苦慮する例が多く、ここでは、両時代の遺物が出土した遺構を中心に掲載する。

縄文時代は、住居跡４軒、埋設土器２基、配石遺構、土坑を報告する。主な時期は後期初頭～前葉に比定され、称名寺式・堀之内１式土器が出土している。従来の横壁中村遺跡の後期住居跡の分布状況からは、やや希薄な遺構量であるが、10区南側は斜面地形が強くなり、居住に適さない地形である。あるいは後期集落の南限にあたる住居跡と捉えられよう。中期住居跡は確認されていない。おそらく環状集落の範囲外にあたる可能性がある。ただし、20区土器溜まり、10区配石遺構や土坑から中期後葉の土器が出土している。居住の中心地点ではないが、中期集落跡の範囲内と窺えよう。

弥生時代は前期～中期に比定される土器が出土している。住居跡としては２号住居跡１軒や土坑、土器溜まりが調査されている。２号住居跡周辺には焼土、埋設土器があり地点的ではあるが、積極的な居住痕跡と捉えられた。当概期資料は群馬県内でも類例が少なく、良好な資料群として位置付けられよう。

１　住居跡

今回報告する縄文時代・弥生時代に比定される住居跡は全て10区に集まる。１号住居跡を除き、10区北側に偏る傾向があるが、横壁中村遺跡の集落跡中心地区は、10区北側の20区や19区でもあるため、10区は集落跡の南縁辺にあたる地区でもある。大規模集落の範囲を確定した10区調査と位置付けられよう。

10区１号住居跡（第14図/PL ２）

調査年度：平成12年度

位　置：10区Ｌ・Ｍ－10・11グリッド

経過等：平成12年度にパンザマスト（気象用観測マスト）が設置されるにあたって42㎡が先行調査された地点で調査されている。周辺は中世土坑や掘立柱建物跡が群在し、また北側への斜面地形のため、本住居跡の北～西半は逸失されており遺存度は悪い。

平面形は、南西壁と柱穴配置から約380×330㎝を測る不整五角形で、北東へ出入口部が推定される敷石住居跡である。主軸方位は南西を向く。深さは最深部の南西壁周辺で50㎝を測るが、遺存状態は全体的に不良である。南西壁際周辺に敷石を見ることができるが、全容は把握できない。柱穴P1 ～ P3を繋ぐ小規模な敷石は壁際下端の敷石と捉えられる。

重　複：北側に中世遺構である1号竪穴状遺構（３号土坑）、北東側に１・２号土坑が近接する。

床　面：南側が残存するため、平坦面は南側のみに限られる。北～東側の出入口部にかけては、傾斜状態で判断せざるを得なかった。

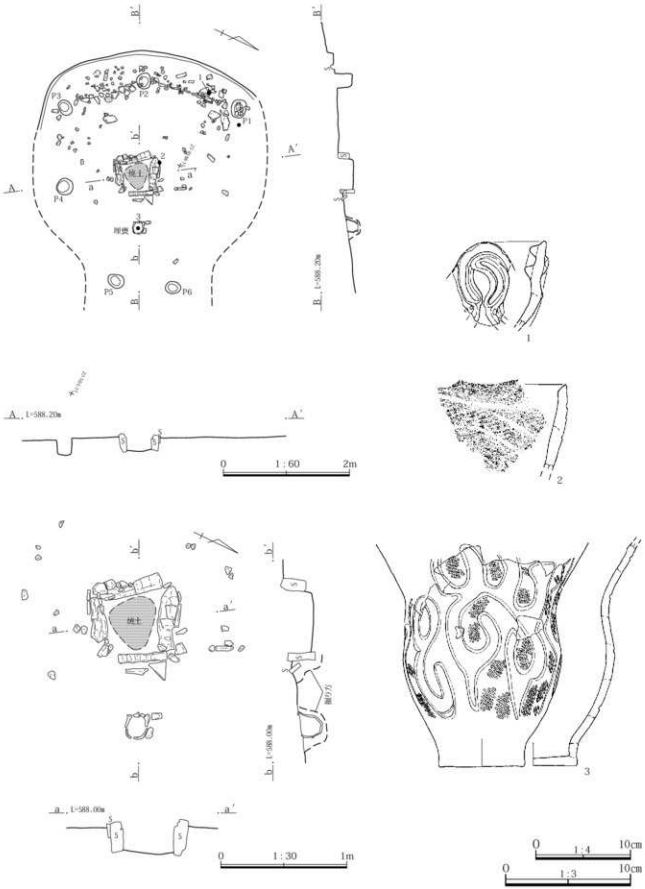
炉：床面ほぼ中央に石囲い炉が設けられる。平面形は軸長70㎝程の正方形を呈す。径約80㎝、深さ約18㎝の不整円形の掘り込みを持ち、少量の焼土粒が確認されている。炉石の被熱は内側が強かった。

埋　甕：石囲い炉北東約70㎝に出入口部埋甕（14図３）を見る。口縁部～体部上半を欠損した称名寺式の深鉢で、正位で南西にやや傾く状態で埋置されていた。

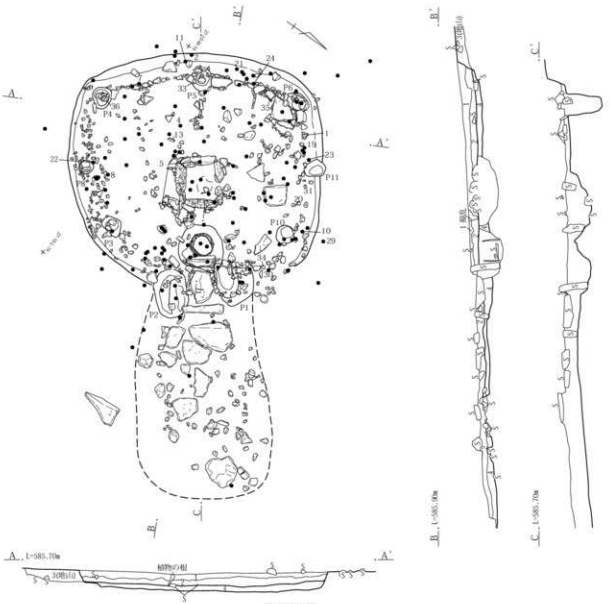
柱　穴：P1 ～ P6を柱穴として考えた。P2は奥壁の柱穴と位置付けられ、P5・P6は出入口部の対ピットであろう。いずれも径25㎝前後で深さが20 ～ 27㎝を測る。なお、確認できなかったが、P4に対応する東側壁際にも柱穴が配置されるはずである。斜面地形のため逸失したものと見られる。

遺　物：少量の遺物が出土したが、図示に堪え得る土器片３点を提示した。１・２とも埋甕（３）と同様の称名寺式であろう。１は北西隅の敷石部から、２は炉脇から床面からやや浮いた状態で出土した。

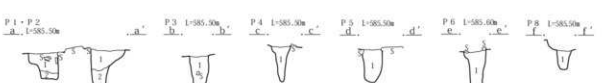
所　見：時期は称名寺式の埋甕から、後期初頭と考える。横壁中村遺跡のこれまでの調査では、最南端、最標高部に位置する敷石住居跡である。10区調査区内の後期住居跡とも距離を置いており単独の立地である。後期集落の南限にあたる占地状況といえる。

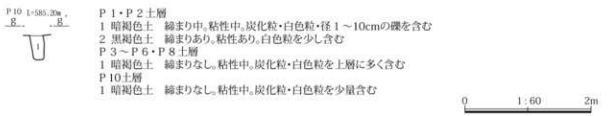


第14図　10区１号住居跡・出土遺物



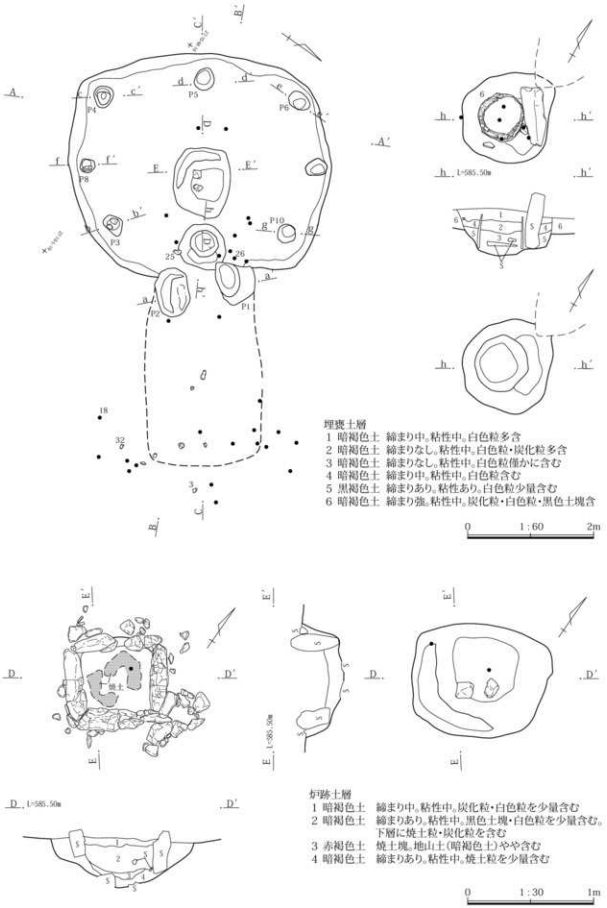
住居跡土層
1 黒褐色土　やや締まっている。白色粒子30%。焼土・炭化物を少量含む
2 黒褐色土　粘性乏しくやや砂質。白色粒子・焼土を少量含む
3 黒褐色土　締まっており硬質。白色粒子50%程度含む。地山
4 暗褐色土　締まり強。粘性中。炭化粒・白色粒・黒色土塊を含む。地山近似
5 暗褐色土　締まり中。粘性中。白色粒・礫(径１～10cm)を多く含む



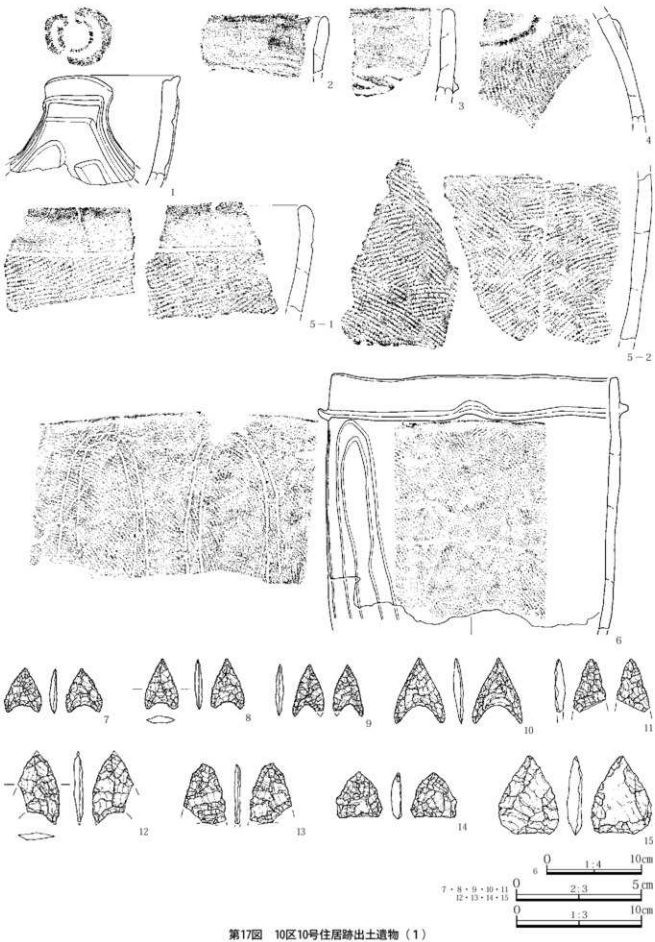


P１・Ｐ２土層
1 暗褐色土　締まり中。粘性中。炭化粒・白色粒・径１～10cmの礫を含む
2 黒褐色土　締まりあり。粘性あり。白色粒を少し含む
Ｐ３～Ｐ６・Ｐ８土層
1 暗褐色土　締まりなし。粘性中。炭化粒・白色粒を上層に多く含む
Ｐ10土層
1 暗褐色土　締まりなし。粘性中。炭化粒・白色粒を少量含む

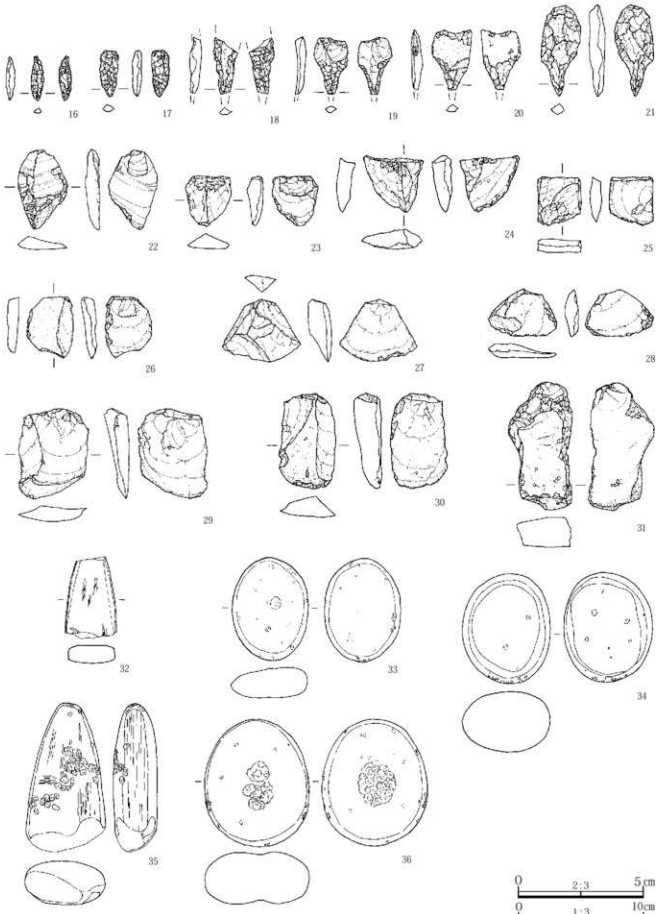
第15図　10区10号住居跡（１）



第16図　10区10号住居跡（２）



第17図　10区10号住居跡出土遺物（1）



第18図　10区10号住居跡出土遺物（２）

10区10号住居跡（第15 ～ 18図/PL ２）

調査年度　平成17年度

位　置：10区K ～ M－18 ～ 20グリッド

経過等：10区調査区北側で確認された。敷石住居跡である。周辺は北側への傾斜が強く。そのため出入口部の壁は逸失した状態で調査された。出入口部を含めた長軸長は７ｍを超え、住居部規模は400×350cm、出入口部規模は350×220cmである。住居部平面形は内湾気味の方形を呈す。深さは南西壁際で35cmを測りやや浅い検出となった。

重　複：西側壁に１号集石遺構が重なる。新旧は１号集石が中世に比定され新しい。また南西側に３号配石遺構が重複する。３号配石遺構出土土器は希薄で１点のみの判断だが、新旧は本住居跡の方を新しく見た。また、北東には11号住居跡が、北西には13号住居跡が近接する。いずれも敷石住居跡で、１号住居跡に比して住居群を形成している。

床　面：壁際及び出入口部に敷石する。北側の壁際敷石はやや希薄だが、他の敷石は小型礫を中心に明瞭に置かれる。特に、奥壁のP4 ～ P6を結ぶ間は列状に小型礫が置かれる。P6周辺は扁平な板石状敷石がなされ、何らかの間取りを想起させよう。連結部の框石南西、対ピット間に大型の敷石があるが、埋甕蓋石ではなく、埋甕はさらに南西に接して設けられていた。出入口部の敷石はやや乱れた印象である。斜面地形のため原位置が僅かに動いた可能性もある。ただ敷石上面のレベルはほぼ水平に近く、平坦面を意識した構築といえよう。

炉：床面ほぼ中央、主軸が乗る位置に方形の石囲い炉を設ける。規模は87×77cmで大型自然礫を四方に囲む形態である。北片の炉石に乱れがあり、一部が抜き取られた可能性もある。深さは40cm程で下層に焼土塊が堆積する。炉掘り込みは約110×90cmを測る不整方形を呈す。

埋　甕：連結部の框石南西約90cmに大型深鉢（17図６）が逆位に埋置されていた。ほぼ直立気味に伏せられ、埋甕内部下層に板状の自然石が置かれていた。

柱　穴：９基のピットを検出し、柱穴として位置付けた。P1・P2は出入口部の対ピットである。P1は径約66×38cm・深さ約60cm、P2は径約77×52cm・深さ約41cmを測り、対ピットとして妥当な配置と規模を示す。奥壁の柱穴としてP5を位置付ける。規模は径約33cm、深さ約52cmである。その他のピットも壁際の良好な位置に配され、概ね径30 ～ 35cm、深さ30 ～ 70cmを測る。なお、ピット番号は調査時の番号を踏襲したため、P7とP9を欠番としている。

遺　物：出土量は少ない。特に出土土器については、埋甕（６）以外は破片出土であり、良好な一括資料とは言えないだろう。いずれも、称名寺式と捉えられる土器であるが、粗製ともいえる深鉢が主体であり、詳細な時期特定には至らない。６の埋甕は体部意匠が４単位ではなく、対称性を崩している。あるいは施文の省略行為が行われていたとも考えられる。貧弱な出土土器量に比して、石器出土量は充実する。石鏃（７ ～ 15）・石錐（18図16 ～ 21）・スクレイパー・加工痕ある剥片石器（22 ～ 30）、石核（31）、磨製石斧（32・35）、礫器である磨り石類（33・34・36）を図示した。

所　見：後述する11号住居跡や13号住居跡と一群をなす住居跡である。ただし、他の住居跡とは時期に隔たりも若干見られ、同時期併存ではない。

北斜面地形がやや強く、出入口部の詳細な輪郭は把握できないが、連結部の埋甕や框石とその周辺の敷石様相、さらに奥壁部周辺の柱穴や壁際敷石は良好な残存状態を示している。さらに、柱穴配置も妥当な位置関係にあり、住居跡規模・上屋を考えるに良好な例となろう。

10区11号住居跡（第19 ～ 21図/PL ３）

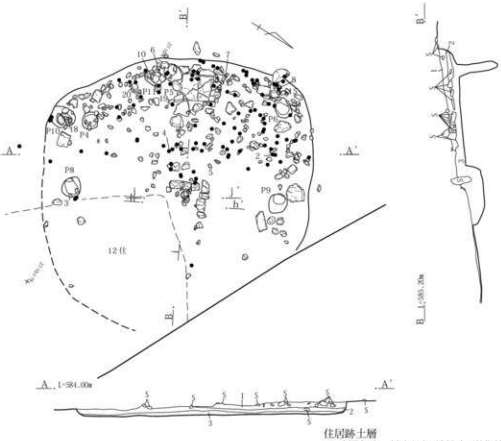
調査年度：平成17年度

位　置：10区J・K－18・19グリッド

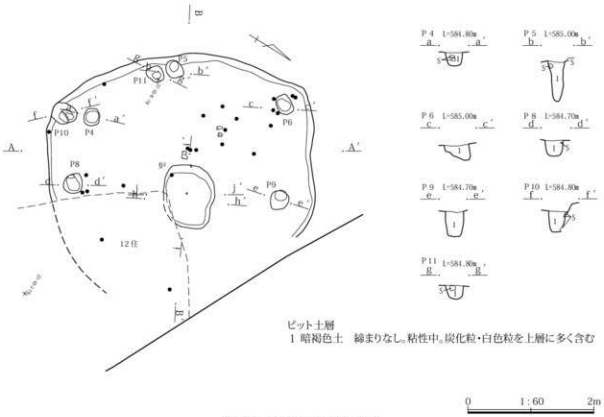
経過等：10区調査区の北端で調査された。北西側が斜面地形と、遺跡を横断する現道のため大きく逸失する。確認面も浅く、12号住居跡調査の際に周辺より遺物や敷石の一部が露出していたため、住居跡と確定し調査に至った。住居跡本体は軸長420 ～ 430cm程の不整五角形を呈す小型の例である。おそらく北西側へ出入口部が延長すると思われるが、大きく逸失する。深さは最深部でも30cm程度で浅く、残存状態は良くない。

重　複：平安時代住居跡である12号住居跡が北東側に重なる。さらに616号土坑や623号土坑が重複する。また前述の10号住居跡が南西に近接する。１号配石遺構、３号配石遺構も南西に近距離にある。

床　面：北西側へ傾斜する形態での検出となった。中央

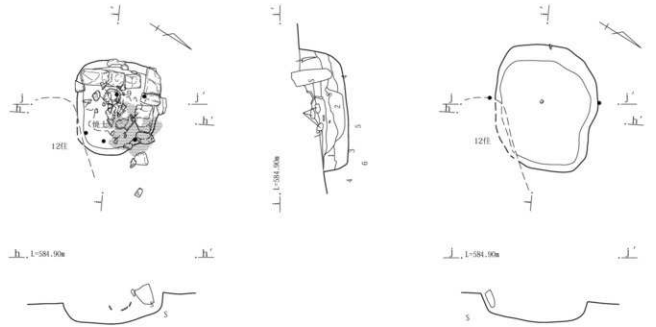


住居跡土層
1 暗褐色土　締まり中。粘性中。炭化粒・白色粒・小礫を含む
2 暗褐色土　締まり中。粘性あり。白色粒を含む
3 暗褐色土　締まり有り。粘性有り。白色粒・小礫を多く含む

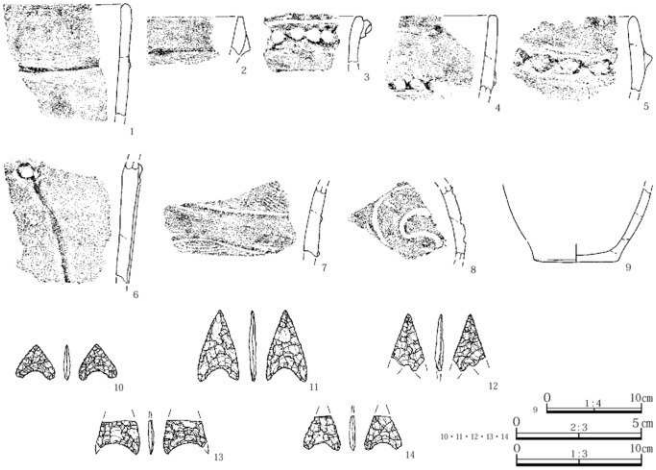


ピット土層
1 暗褐色土　締まりなし。粘性中。炭化粒・白色粒を上層に多く含む

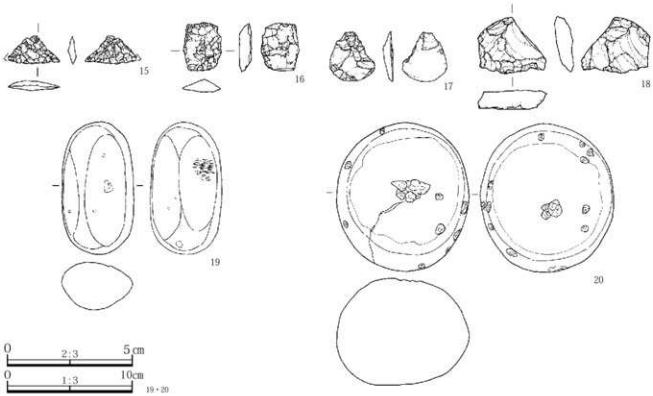
第19図　10区11号住居跡（1）



竪穴住居跡土層
1 暗褐色土　締まりなし。粘性中。炭化粒・焼土粒を少し含む
2 暗褐色土　締まり中。粘性あり。焼土粒を含む
3 暗褐色土　締まり中。粘性あり。焼土粒を多く含む
4 暗褐色土　締まり中。粘性あり。焼土粒を少し含む
5 赤褐色土　焼土塊
6 黒褐色土　締まりあり。粘性あり。白色粒を少し含む



第20図　10区11号住居跡（2）・出土遺物（1）



第21図　10区11号住居跡出土遺物（２）

の炉石周辺の敷石がほぼ平坦なレベルを維持していることから、床面本来は平坦面を築いていたと捉えられる。敷石は南西部の奥壁周辺に良好に残る。板石状の自然石を並べており、奥壁周辺の間取りを示唆する例である。

炉：床面中央で検出した。方形の石囲い炉であるが、北東側と北西側の炉石は見られなかった。傾斜地形及び12号住重複を原因とする逸失と判断した。炉内中層より深鉢底部（９）が出土している。炉体土器ではあるが、埋甕炉ではなく、炉内に置かれた土器としておきたい。

柱　穴：７基のピットを柱穴として位置付けた。P4～P6、P8～P11が相当する。各ピットは壁際に良好に配置され、特にP5が奥壁の柱穴として位置付けられ、径約25～30cm、深さ65cmを測り、他のピットより深く、しっかりした掘り込みである。他のピットは径20～30cm・深さ22～45cmである。P10とP11がP5・P4に近接しており、建て替えに伴う例と考えたい。対ピットは傾斜地形と12号住・現道によって逸失したものと判断した。

遺　物　出土遺物量は少ない。住居跡南西側に分布の偏りが見られるのは遺存度の影響である。土器個体として図示し得た遺物は炉内土器の深鉢底部（９）のみである。その他の破片類は、称名寺式が出土している。おそらく炉内土器も後期初頭の所産と判断したい。石器は11点を図示し得た。石鏃（10～14）・石匙（15）・スクレイパー類（16～18）、磨り石類（19・20）を挙げた。

所　見：出土土器片からの判断になるが、後期初頭の敷石住居跡として位置付けたい。北半の対ピットや出入口部を失うが、南半の炉・奥壁・柱穴は遺存しており、良好な配置を示している。

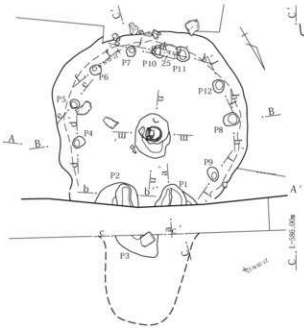
10区13号住居跡（第22～25図/PL３）

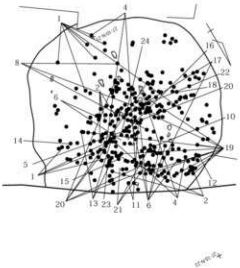
調査年度：平成17年度

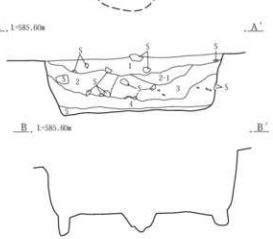
位　置：10区Ⅱ･N－20･21グリッド

経過等：10・11号住居跡と同様に10区調査区北側で調査された敷石住居跡である。北西側が遺跡を横断する現道のため大きく破壊されていた。11号住居跡も同様な破壊を受けており、両住居も大変残念な検出状況といえよう。出入口部の殆どを見る事ができない本住居跡であるが、住居部は掘り込みもしっかりした残存状態の良好な例である。規模は360×310cm程の不整円形を呈し、深さは１m近くに達する。小型の住居跡ながら、深い住居跡である。主軸方位は南西を向き、他の１・10・11号住居跡と同様に北東方向に出入口部を向ける

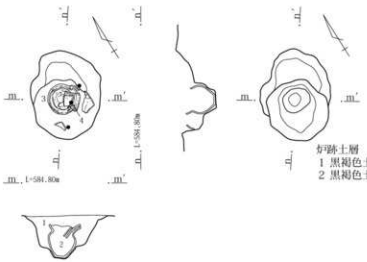
重　複：単独の検出となった。周辺に近接する縄文時代遺構としては、10号住居跡が南東に位置する。







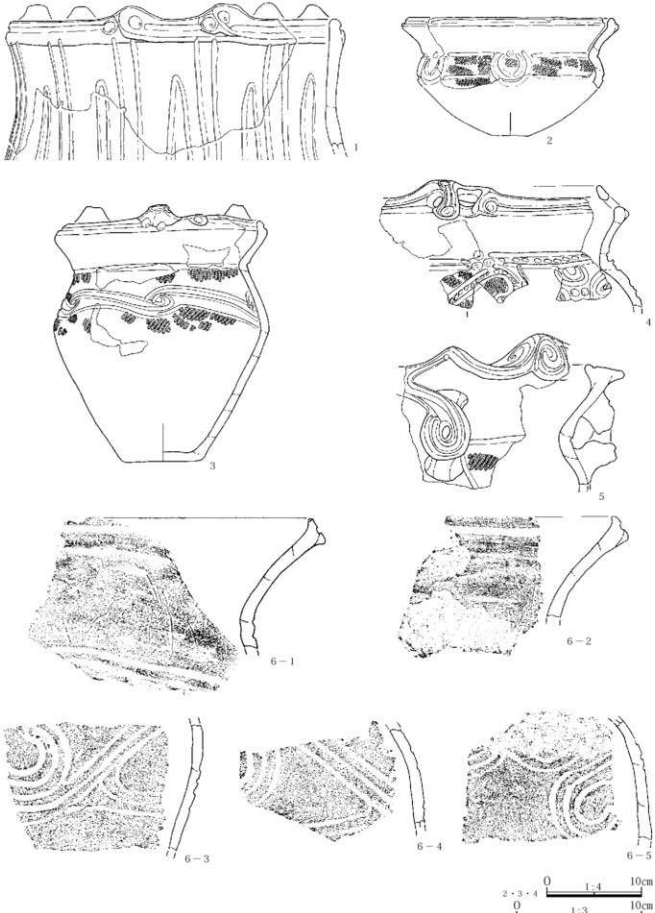
住居跡土層
1 黒褐色土　礫片・礫粒多量混。粘性弱い
2 暗褐色土　礫片・礫粒多量混。炭化物やや多く含む
　2－1　2層に比べると礫の混じりが少ない
3 黒褐色土　礫片・礫粒多量混。炭化物多く含む
4 黒褐色土　礫片・礫粒多量混。炭化物少量混
5 黒褐色土　礫片・礫粒多量混。砂礫多く混ざる



炉跡土層
1 黒褐色土　角礫・礫片・礫粒多量混。炭化物・焼土粒少量混
2 黒褐色土　礫片・礫粒少量混。焼土粒子やや多い。炭化物少量混

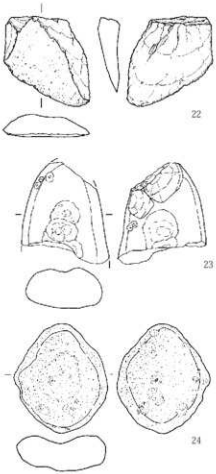
0　1:30　1m

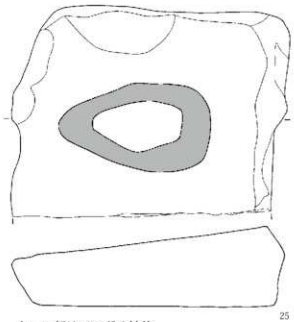
第22図　10区13号住居跡



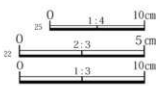
第23図　10区13号住居跡出土遺物（１）

第24図　10区13号住居跡出土遺物（２）





トーン部はベンガラ付着



第25図　10区13号住居跡出土遺物（３）

床　面：埋土下位より扁平礫は出土しているが、床面に伴う敷石は見られなかった。黄褐色粘質土を地床としており、ほぼ平坦面を築く。特に顕著な硬化面は見られなかった。

炉：床面中央に埋甕炉（23図３）を見る。口縁部の一部を欠損した状態で、正位で出土した。掘り込みの規模・平面形は70.0×56.0cmの不整楕円形を呈し、深さは33.0cmを測る。焼土粒を散見するが、土壌そのものの焼土化は見られなかった。一方、炉体土器口縁部や下半は被熱を受けた痕跡が顕著だった。

柱　穴：P3を除くP1～P12を柱穴として位置付け、壁際の柱穴を捉えた。いわゆる壁柱穴である。主軸上に乗るP10を奥壁柱穴と捉え、P1・P2を出入口部の対ピットとした。P1・P2の北半は現道によって破壊されているが、規模・配置とも対ピットとして妥当である。その他の９基のピットも壁柱穴として良好な配置を示しており、当概期の壁際柱穴の様相を具体化する例と評価されよう。

遺　物：土器片の出土量が顕著であり、対して石器の出土が少ない。その中で、ベンガラの付着が著しい台石(25図25）は、作業台として捉えられ、極めて興味深い資料である。出土遺物はほとんどが埋土中の出土である。床面出土例は無かった。４は炉体土器（３）上位に接して出土している。炉体土器（３）を含めて堀之内１式土器が主体を占める。

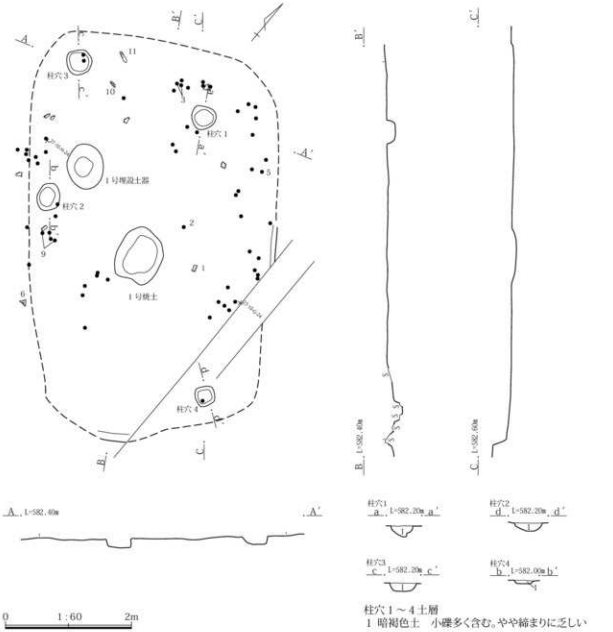
所　見：顕著な敷石は見られないが、対ピットの存在から、敷石住居跡として位置付けて良いだろう。壁際の柱穴も良好な配列を示す。炉体土器は堀之内１式ながら横位連結文様構成を示しており、特異な在り方を示す。出土土器の殆どが堀之内１式に比定され、小型の住居跡ながら良好な遺物組成を示している。

10区２号住居跡（第26･27図/PL ２）

調査年度：平成12年度

位　置：10区F～H－23・24グリッド

経過等：調査区を横断する現道南で確認された住居跡である。遺構確認中、周辺に土器片の散布が見られ、焼土・



第26図　10区２号住居跡

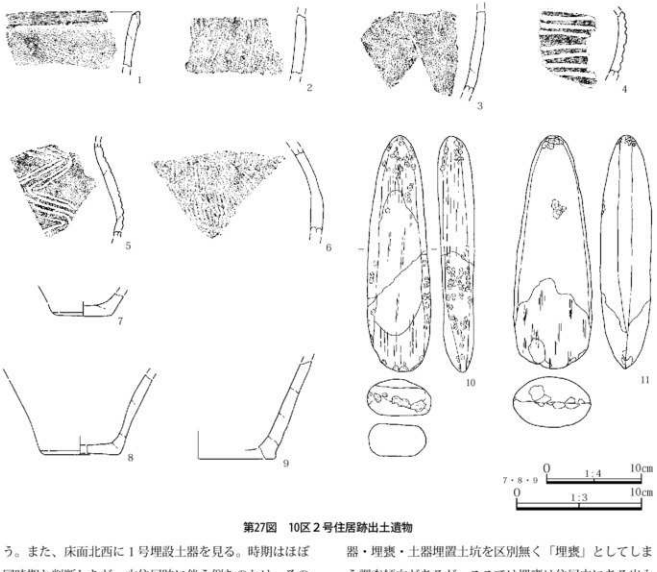
完形土器の出土を見たことから、住居跡として調査を進めた。遺物の出土範囲と不規則ながらピットの配列、さらに東壁と南壁をトレンチ調査で得たことから、主軸を北西に向ける不整長方形の平面形を呈した住居跡を確定した。規模は長軸長約650×短軸長390cm、深さ10cm未満で極めて遺存状態の悪い住居跡である。平面形や床面など推定を重ねた住居跡である。

重　複：縄文時代後期住居跡10区３号住居跡と重複関係にある。３号住は既報告であり、新旧関係は本住居跡が新しいものと判断できる。１号埋設土器や１号焼土遺構が重複・近接する位置関係にあるが、いずれも本住居跡とほぼ同時期の出土土器を示しているため、あるいは住居に帰属する施設としても考えられる。

床　面：住居跡として確認する調査行程でおいて、明瞭な床面は確認されなかった。わずかな硬化面や土色の変化によって床面として捉えたが、確定性に乏しい。ただ、調査において捉えた面は水平面を維持し、床面としての妥当性はある。また、柱穴などの確認面も当該面であるため、発掘調査時の判断を踏襲したい。

炉：確定的な炉は確認できなかったが、後述する10区1号焼土が規模・位置とも相当する。

遺　物：破片状態で散漫な出土状況ながら、出土土器の時期幅は短い。弥生時代前期に比定されよう。すべて、床面および床面直上からの出土として判断して良いだろ



第27図　10区２号住居跡出土遺物

う。また、床面北西に１号埋設土器を見る。時期はほぼ同時期と判断したが、本住居跡に伴う例なのかは、その性格を考慮すると断定はできない。また、磨製石斧（27図10・11）の出土も住居跡北側へ偏り示唆的である。

所　見：遺存状態の悪い住居跡ながら、出土土器はほぼ弥生時代前期に比定されよう。ただし、土器の一括性そのものには疑問が持たれ、ある程度の時間幅は設けておきたい。そのため１号埋設土器や１号焼土との共時性には慎重にならざるを得ない。しかしながら、１号焼土は炉址としての位置づけが妥当であろう。

当地域の弥生前期資料は、量的には少ないながらも、他地域と比較すると、その様相が窺い知れる出土量である。本住居跡出土土器も、当地域の弥生時代前期資料として、今後の資料活用を願いたい。

２　埋設土器（第28･29図/PL ４）

埋設土器も10区に集まる。発掘調査において、埋設土器・埋甕・土器埋置土坑を区別無く「埋甕」としてしまう調査傾向があるが、ここでは埋甕は住居内にある出入口部埋甕に限り、住居跡外の単独で検出された埋設土器を扱いたい。10区3号埋設土器は、発掘調査における遺物取り上げでは３号埋甕とされていたが、本書では埋設土器とする。また、10区６号土坑も、土坑内に弥生時代の鉢が埋置されていた状態であったため、本項に含めて報告する。

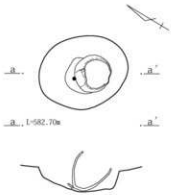
10区１号埋設土器

調査年度：平成12年度

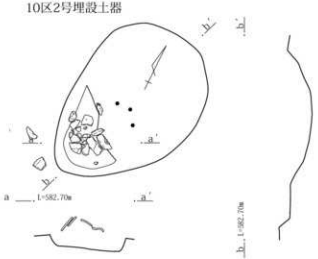
位　置：10区Ｇ－23・24グリッド

経過等：10区２号住居跡検出時に同時に調査された。２号住居跡の確定前に埋設土器として位置付け、住居跡とは別個の遺構として調査した。共伴資料は無く、単独の出土である。72×58cmを測る不整楕円状の土坑を掘り込み、底面に接して埋置されていた。掘り込みの深さは20

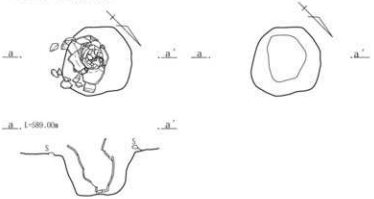
10区1号埋設土器



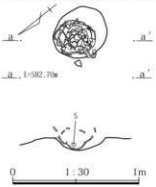
10区2号埋設土器



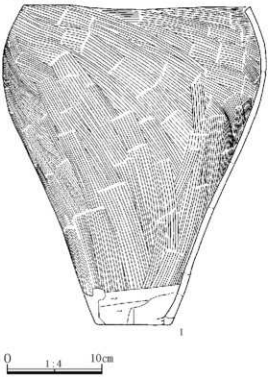
10区3号埋設土器

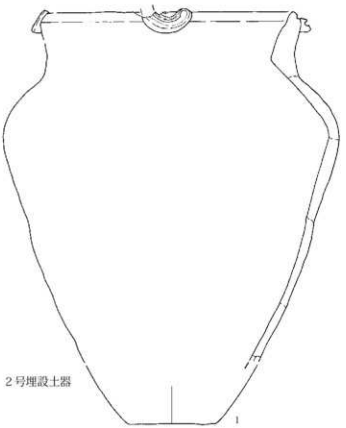


10区４号埋設土器(6号土坑)

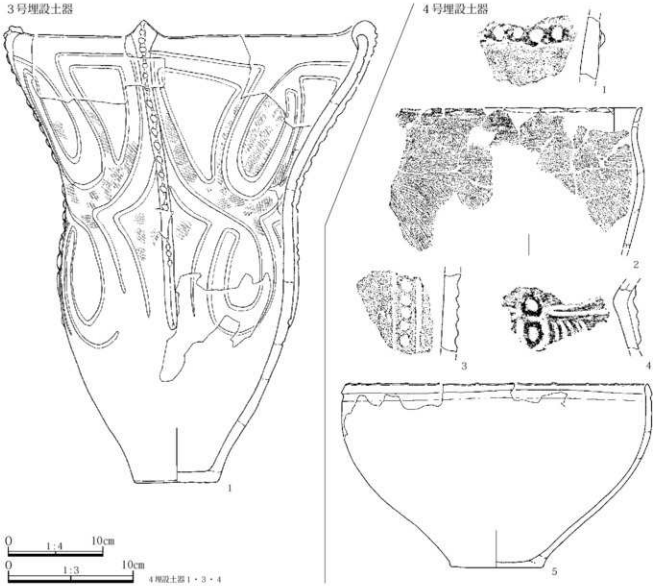


1号埋設土器





第28図　10区１～４号埋設土器・出土遺物（１）



第29図　10区１～４号埋設土器出土遺物（２）

cmを測る。

重　複：２号住居跡との重複という状況であるが、新旧は不明である。

遺　物：弥生時代前期甕１個体が単独で埋置される。正位の埋置でやや南東に傾く。

所　見：２号住居跡との関係を考えなければならない。２号住出土土器も弥生時代前期に比定され、別遺構としても関連性は深いと思われる。ただ、弥生時代前期の住居内に埋設土器を設ける例を見ないため、発掘調査・本書でも別遺構として扱った。性格は不明である。底部の欠損など祭祀的な埋置行為を想定したい。

10区２号埋設土器

調査年度：平成12年度

位　置：10区Ｈ－24グリッド

経過等：不整形の土坑から大型深鉢がまとまって出土したため、埋設土器として位置付けた。土坑の規模は長軸長約143×短軸長96cmで深さは約27cmを測る。坑底面は有段となっており、土器は南側上段部分で浮いた状態で出土している。横位で埋設された深鉢で、破片も土坑内上層のほぼ同一レベルで出土している。共伴資料は無く、単独の出土である。

重　複：重複遺構は見られない。

遺　物：埋設土器は口縁部突起を付すのみの無文の大型深鉢で称名寺式と判断した。

所　見：深鉢が横位で出土したこと、土坑上層にまとまる様相から、あるいは墓壙としての位置付けも考えておきたい。

10区３号埋設土器

調査年度：平成17年度

位　置：10区P－12グリッド。調査区南側の急傾斜地形の地点である。

経過等：遺構確認中に深鉢口縁部がまとまって出土し、１個体分の土器と判断されたため、埋設土器（埋甕）として調査した。掘り込みは径約50cmの不整円形を呈する土坑で深さは約50cmを測る。

重　複：単独の検出である。周辺に同時期の遺構は無く、距離を置いて東に10区１号住居跡がある。

遺　物：大型の称名寺式土器１個体が出土している。共伴資料は無い。

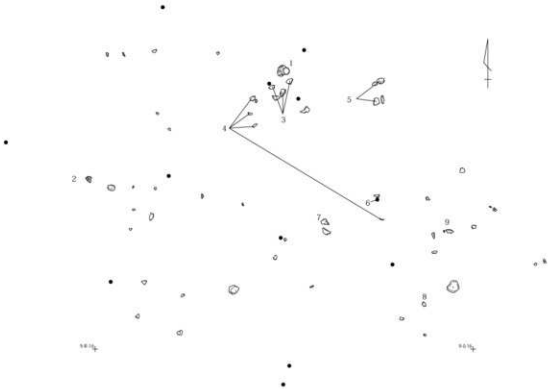
所　見：集落域から南へ離れた箇所に位置する埋設土器である。居住痕跡も見られず、単独で占地する状況は特異な例であろう。

10区４号埋設土器（６号土坑）

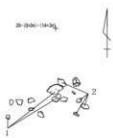
調査年度：平成12年度

第30図　９区１・２号土器溜まり（１）

９区１号土器溜まり



９区２号土器溜まり



第31図　９区１・２号土器溜まり（２）

位　置：10区Ｅ－22グリッド

経過等：発掘調査では６号土坑として資料化しているが、整理段階で土器の出土状況を考慮して、４号埋設土器として名称を変更した。土坑の規模は径約43×39㎝の不整円形を呈し、深さは約10㎝を測る。

重　複：単独の検出である。

遺　物：弥生時代前期の鉢１個体（29図５）が正位でまとまった状態で出土している。埋土中より同時期の土器片数点が出土し２点（１・２）を図示した。なお、堀之内１式土器深鉢破片（３・４）も同時に図示したが、これらは流入であろう。

所　見：埋設土器・土坑としての性格は不確定だが、弥生時代前期の一括性が保証された資料と位置付ける。

３　土器溜まり（第30～34図/PL ６）

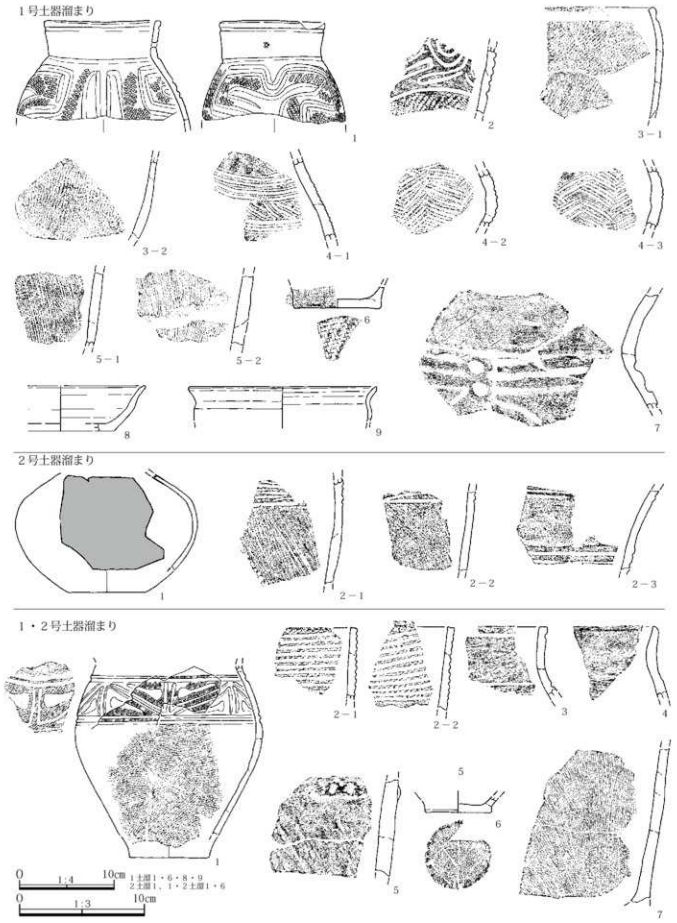
９区と20区、各２箇所で土器集中地点を調査した。10区においては土器の集中が見られなかったのは、中世以降の土地開発を要因とする考えもあるが、縄文時代や弥生時代の生活痕跡が集中する10区北側にあたる20区や９区に土器捨て場あるいは斜面に沿う土器流入箇所が見られたためと考えられよう。

９区１号土器溜まり

調査年度：平成17年度

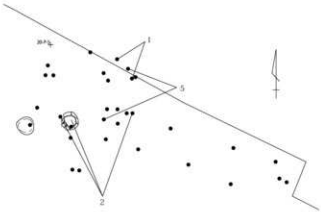
位　置：９区P～R－15・16グリッド

経過等：９区調査区北端で確認した。南北470×東西500㎝の範囲で土器が集中して出土し、住居跡・土坑などの

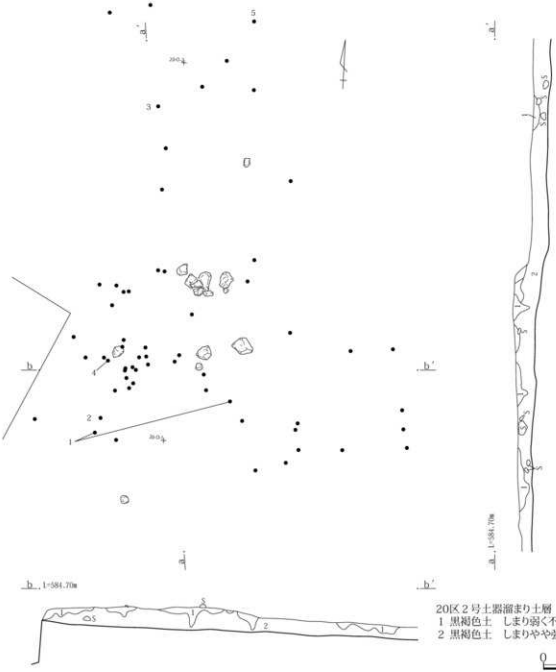


第32図　９区１・２号土器溜まり出土遺物

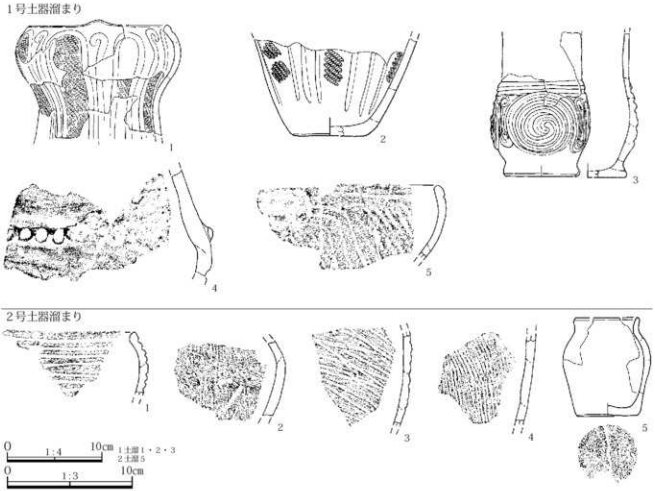
20区１号土器溜まり



20区２号土器溜まり



第33図　20区１・２号土器溜まり



第34図　20区１・２号土器溜まり出土遺物

掘り込みが見られなかったため、土器溜まり遺構として位置付けた。

遺物・所見：出土土器は縄文後期・弥生前期・平安時代にわたる。このうち平安時代の土器片は周辺の住居跡からの流入と判断できよう。また、縄文時代後期の例は少量であり、そのため本遺構の主体は弥生時代前期と判断できる。

9区２号土器溜まり

調査年度：平成17年度

位　置：９区P－14グリッド

経過等：１号土器溜まりの南へ8.2mほど距離を置いて、小規模な土器のまとまりを調査した。１号土器溜まりと２号土器溜まりの間も土器片の散布が見られ、これらも両遺構に関連する遺物として。１・２号土器溜まり出土遺物として、同時に掲載した。２号土器溜まりは、東西約105×南北50㎝の範囲にまとまる。

遺物・所見：まとまった出土状態とはいえ、10数点の出土である。おもに弥生時代前期に比定される土器片で４点を図示した。本遺構の主体も１号土器溜まりと同様に弥生時代前期と判断できる。なお、１号土器溜まりと２号土器溜まりの間に出土した土器片も同時期であり、両遺構はほぼ同様の性格のものと捉えられる。前述のように、土坑・住居跡など掘り込みを伴う遺構は見られず、例えば、土器廃棄遺構としての位置付けが妥当と思われる。

20区１号土器溜まり

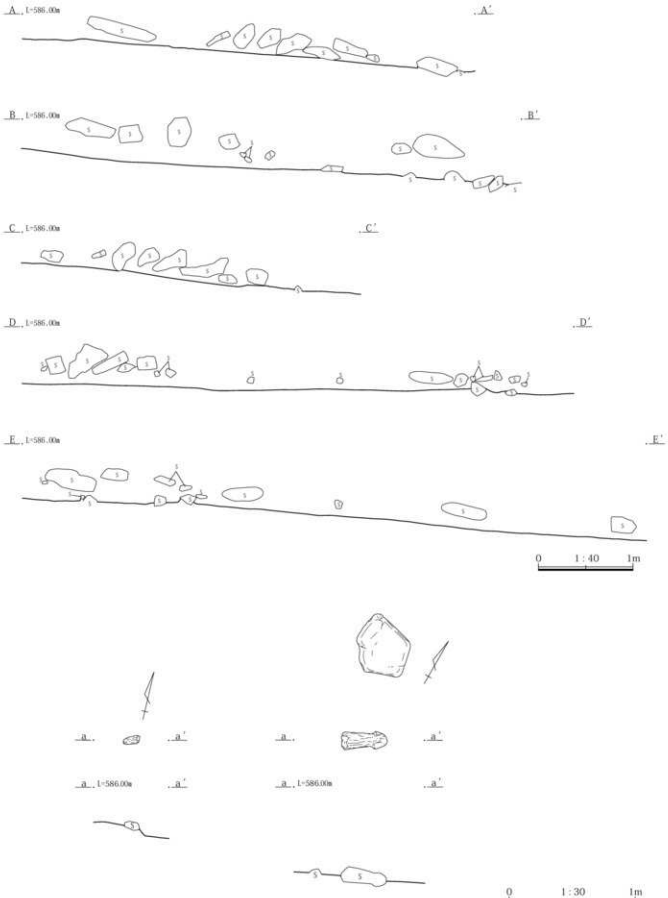
調査年度：平成18年度

位　置：20区0・P－４グリッド

経過等：観音堂区とした中世～近世遺構群の北側で、調査された。東西約320×南北150㎝程の小規模な範囲土器がまとまる。北側は平成17年度の調査区域外に伸びるため、詳細は不明である。

遺物・所見：縄文時代中期後葉の土器がまとまる。横壁中村遺跡の集落跡中核の時期である。掘り込みを伴う遺

第35図　10区１号配石（１）



第36図　10区１号配石（２）

構が見られなかったことから、土器廃棄遺構あるいは包含層としての扱いではあるが、時期は加曽利ＥⅢ式段階に偏り、集中的な活動痕跡と見られる。

20区２号土器溜まり

調査年度：平成18年度

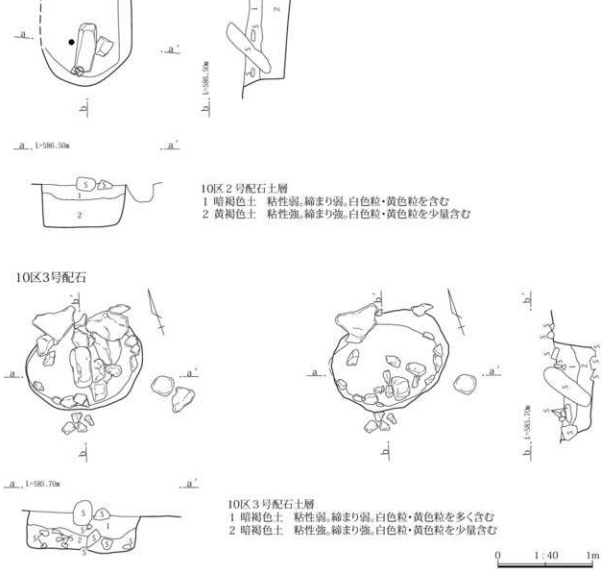
位　置：20区N・0－１・２グリッド

経過等：観音堂区内の中世～近世遺構群内で検出された。南北約560×東西360cmの範囲に土器片の散布を見た。南側に若干ながら集中する傾向があるが、大型の破片はなく、小片が主体である。

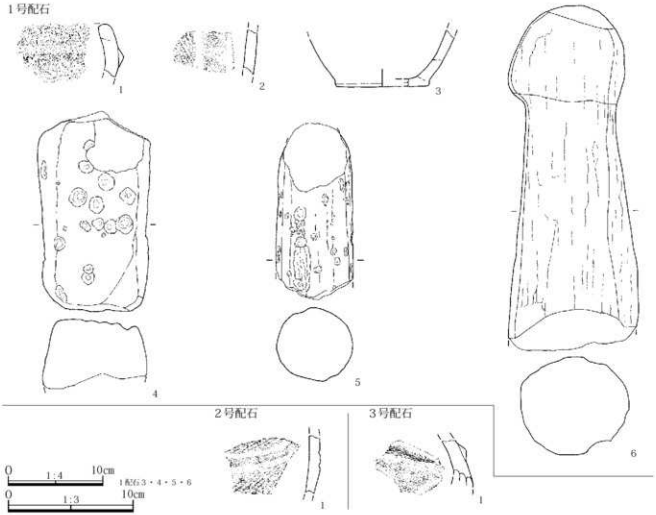
遺物・所見：出土した破片点数は多いが図示し得る破片は少なかった。５点を図示したが、いずれも弥生時代前期に比定される資料である。出土分布は散漫な出土で、遺構を示唆する例ではない。限られた時期に偏るとはいえ、包含層的な性格を考えておきたい。

４　配石遺構（第35～38図/PL ４）

横壁中村遺跡は中期後葉～後期前葉にかけての様々な構築物が検出されている。掘立柱建物跡や列石遺構ある



第37図　10区２・３号配石



第38図　10区１～３号配石跡出土遺物

いは環状柱穴列などが見られ、各遺構は、縄文時代の精神生活を窺う資料として、集落内の重要な宗教施設として捉えられている。ここで扱う配石遺構も、自然石を中心とした、当時のモニュメントの一つで、宗教儀式に伴う施設として位置付けられている。当時の礼拝方向や山岳・山頂を分析対象とした研究方向など、様々な観察項目が用意されている。本書では３基の配石遺構を報告するが、既報告の配石遺構や列石遺構等と併せて、横壁中村遺跡縄文集落内の宗教的な位置を明らかにしなければならないだろう。また、周辺遺跡の例えば長野原一本松遺跡における配石遺構の在り方との比較など詳細な分析項目は多い。将来的な研究に期待したい。

10区1号配石

調査年度：平成17年度

位　置：10区J ～ L－17 ～ 19グリッド

経過等・規模：10区調査区北側で検出された。周辺には縄文時代後期に比定される10号住居跡や11号住居跡が北側に近接する。また、重複遺構として３号配石が西に接する位置である。

小型の環状配石遺構である。大型の円礫や角礫で構成されており、板石状の礫は見られなかった。配石置かれたレベルは、僅かに浮く礫も見られたが、ほぼ一定といえ、おそらく同一時期に構築された施設と捉えられる。規模は径約450 ～ 530cm程の不整円形を呈するが、北東側の配石が希薄で空白部となる。配石の顕著な箇所は南側と北側に分かれ、２箇所の小群に分かれる。南西側には大型の自然石が配され、あるいは立石を想起させる大きさの例も見られた。下部遺構は検出に努めたが、土坑など掘り込みは検出されなかった。

遺物・所見：出土遺物として、石棒（38図５・６）・多孔石（４）が挙げられる。多孔石は配石北西部に組み合って出土し、石棒は東側の空白部ややや距離を置いて出土している。出土土器は、細片や底部が出土しており、時

期の特定には至らない。中期後葉から後期初頭と時間幅を見る。深鉢底部（３）の様相から、称名寺式と捉えられるが確定的ではない。本書では、中期終末～後期初頭と位置付けたい。

２号配石

調査年度：平成17年度

位　置：10区J・K－14・15グリッド

経過等：調査区中央やや北東寄りで調査された。縄文時代遺構としては独立した印象を得る遺構である。１号配石遺構とは13m北に距離を置く。

北東に主軸を持ち、長軸長約150×短軸長100cmの不整方形を呈する土坑を下部施設として持つ。また、南西側に偏った箇所に立石を伴う。配石遺構とするよりも立石遺構という性格が相応しいかも知れない。

遺物・所見：立石は大型の川原石を使用している。出土土器は小片で確定性に乏しいが、加曽利ＥⅣ式と判断した。土層は人為的な堆積で埋土として捉えられることから、墓壙としての性格も妥当性を帯びる。中期終末～後期初頭段階の祭祀遺構として位置付けたい。

３号配石

調査年度：平成17年度

位　置：10区K・L－18・19グリッド

経過等：１号配石の西側で同時に調査された立石を伴う配石遺構である。１号配石との新旧は判然としないが、１号配石に帰属する石が３号配石上部に重なることから、１号配石を新しく捉えた。下部遺構に土坑も伴う。規模は約130×110cmの不整円形を呈し、深さは50cmを超える。埋土中も中型礫を含み、おそらく埋土として判断できる。立石は土坑ほぼ中央に設けられ、北東に傾いた状態で調査された。

遺物・所見：出土土器は乏しく、加曽利ＥⅣ式～称名寺式の深鉢体部破片を図示し得たのみである。故に時期の確定には至らない。あるいは中期終末として位置付けられよう。本配石遺構も２号配石と同様に、立石を伴う祭祀遺構としての性格が捉えられよう。

５　焼土跡

本遺跡でも数多くの焼土跡が検出されている。多くが縄文時代の所産であるが、古代・中世に比定される例も点在する。本項で扱う焼土跡も弥生時代に帰属するものと考えられ、当時の生活痕跡として重要な要素を示す。また、検出された位置が10区２号住居跡に近接しており、住居に密接な関連を窺わせる在り方を示している。

10区１号焼土（第39図/PL ６）

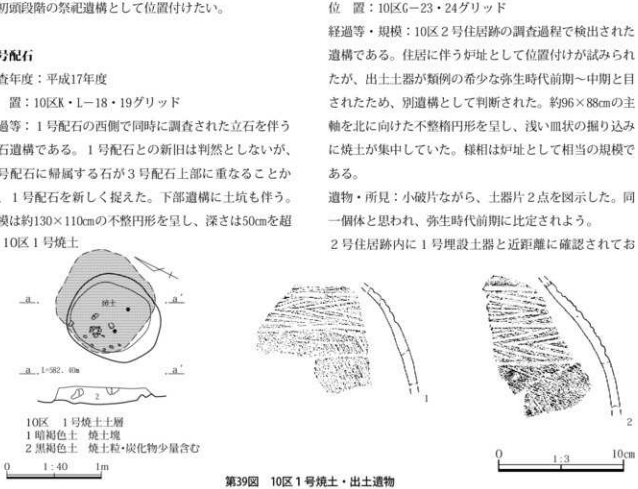
調査年度：平成12年度

位　置：10区G－23・24グリッド

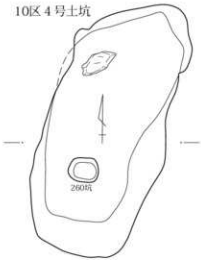
経過等・規模：10区２号住居跡の調査過程で検出された遺構である。住居に伴う炉址として位置付けが試みられたが、出土土器が類例の希少な弥生時代前期～中期と目されたため、別遺構として判断された。約96×88cmの主軸を北に向けた不整楕円形を呈し、浅い皿状の掘り込みに焼土が集中していた。様相は炉址として相当の規模である。

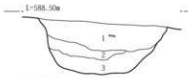
遺物・所見：小破片ながら、土器片２点を図示した。同一個体と思われ、弥生時代前期に比定されよう。

２号住居跡内に１号理設土器と近距離に確認されてお

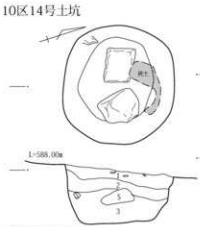


第39図　10区１号焼土・出土遺物

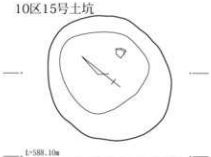




10区4号土坑土層
1 黒褐色土　角礫・微量の炭化物を含む
2 黒褐色土　角礫・炭化物を少量含む
3 暗褐色土　黄褐色土塊含む。角礫少量含む

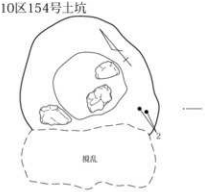


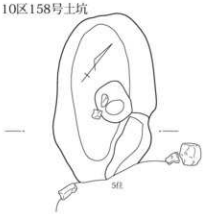
10区14号土坑土層
1 黒褐色土　微量の焼土粒。遺物集中を見る。小礫含む
2 黒褐色土　角礫・炭化物少量含む
3 黒褐色土　暗褐色土塊含む。角礫少量含む



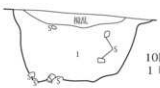
10区15号土坑土層
1 黒褐色土　遺物を少量含む。小礫多く含む

10区11号土坑土層
1 黒褐色土　遺物を少量含む。小礫含む
2 黒褐色土　炭化物を少量含む





10区158号土坑土層
1 黒褐色土　しまり弱い
2 黒褐色土　大型の角礫を多く含む



10区159号土坑土層
1 暗褐色土　黄褐色土塊を多く含む

0　1:40　1m

第40図　10区土坑（縄文・弥生）（１）

り、また時期も近接することから、有機的な関連を持つ遺構群と捉えられる。２号住炉跡とした位置付けが妥当である。

6　土坑（第40～47図/PL ５・６）

本項は縄文時代･弥生時代に帰属し得る土坑を集める。しかしながら、時期判断の目安は出土遺物に重きを置いたため、無遺物の該期土坑は、古代・中近世の土坑で掲載した恐れもある。詳細には分別できず、ご容赦願いたい。また個々の土坑説明も冗長とならないよう、特徴的な一部の土坑の説明を優先する。併せてご容赦を願う。

10区４号土坑

調査年度：平成12・17年度

位　置：10区M－９・10グリッド

経過等・規模：不整楕円状の土坑である。規模は約271×132cmで北東に長軸を持つ。深さは59cmを測る。坑底面は凹凸があり、立ち上がりは緩やかである。260坑と重複するが新旧は不明である。

遺物・所見：称名寺式土器を数点出土する。土坑形態から墓壙の可能性もあるが、共伴遺物に乏しく、積極性を持たない。

10区11号土坑

調査年度：平成12年度

位　置：10区G－23グリッド

経過等・規模：大型の自然石が伴出する土坑である。小型の不整円形を呈し規模は約69×76cm、深さ約42cmを測る。掘り込みはしっかりしており、壁は直立状に立ち上がる。

遺物・所見：土器小片が数点出土し、1点を図示した。弥生時代前期に比定されよう。

10区14号土坑

調査年度：平成17年度

位　置：10区T－21・22グリッド

経過等・規模：径120cm程の円形を呈する土坑である。深さは56cmを測り、深くしっかりした掘り込みである。大型の自然石と焼土を伴出する。

遺物・所見：出土遺物は破片状態ながら弥生時代前期に限られる。平・断面形から貯蔵穴としての位置付けも可能である。

10区15号土坑

調査年度：平成17年度

位　置：10区U・V－23グリッド

経過等・規模：10区北東隅の急傾斜地形で調査した。径120×130cm程の不整円形を呈する。深さは約33cmを測り坑底面は凹凸が目立つ。

遺物・所見：弥生時代前期の土器片数点が出土し、１点を図示した。平面形状からは墓壙・貯蔵穴として、有機的な遺構として捉えられるが、断面形が皿状で掘り込みも弱い。位置付けの判断は控えたい。

10区154号土坑

調査年度：平成17年度

位　置：10区X－22グリッド

経過等・規模：10区北西隅で斜面地形の中で調査された土坑である。南西側を現代の攪乱坑に破壊され全容は判然としないが、規模は径約150cmの不整円形を呈し、深さ33cmを測る。坑底面には基盤礫が露出し、凹凸が見られる。断面形はやや深い皿状を示す。

遺物・所見：上層からであるが、南側から土器片がまとまって出土する。小型の深鉢と破片１点を図示した。弥生時代前期に比定されよう。土坑の位置付けは確定的ではないが、集落域からやや距離を置くことから、墓壙の可能性を指摘したい。

10区158号土坑

調査年度：平成17年度

位　置：10区R・S－14グリッド

経過等・規模：平安時代の５号住居跡に切られて調査された。不整楕円状の平面形を呈し、長軸長は約175cm、短軸長は約108cmを測る。

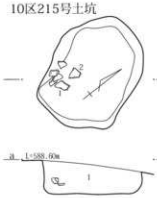
遺物・所見：遺物の出土は見ないが、埋土の様相から縄文時代の土坑と判断した。性格は不明である。

10区159号土坑

調査年度：平成17年度

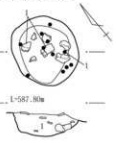
位　置：10区L－９グリッド

10区215号土坑



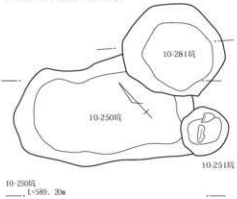
10区215号土坑土層
1 暗褐色土　焼土粒・炭化物・小礫含む

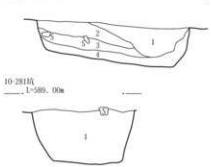
10区232号土坑



10区232号土坑土層
1 黒褐色土　小型礫を多く含む。
炭化物を少量含む

10区250・281号土坑



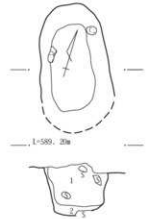


10区250号土坑土層
1 暗褐色土　締まり弱い。少量の炭化物含む
2 黒褐色土　小礫・炭化物を少量含む
3 暗褐色土　炭化物を少量含む
4 暗褐色土　小礫を少量含む。しまりやや強い

10区281号土坑土層
1 暗褐色土　締まり弱い。少量の炭化物含む

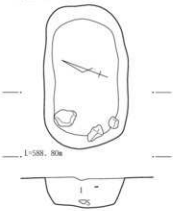
10区284号土坑土層
1 暗褐色土　小礫・炭化物を少量含む

10区264号土坑

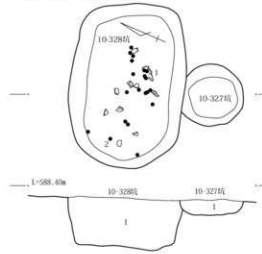


10区264号土坑土層
1 黒褐色土　大型礫を含む。黄褐色土塊を含む
2 暗褐色土　黄褐色土塊を多く含む

10区284号土坑



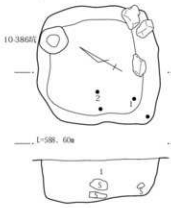
10区327・328号土坑



10区327号土坑土層
1 黒褐色土　小礫・暗褐色土塊・炭化物を少量含む

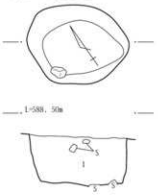
10区328号土坑土層
1 黒褐色土　小礫を含まない。炭化物少量含む

10区385号土坑



10区385号土坑土層
1 黒色土　小礫少量含む。締まり弱い

10区400号土坑



10区400号土坑土層
1 黒色土　小礫多く含む。締まり弱い

0　1:40　1m

第41図　10区土坑（縄文・弥生）（２）

経過等・規模：10区１号住居跡南で検出された大型の円形土坑である。径約157×125cmの不整円形を呈し、小規模な攪乱坑に破壊されるが、ほぼ全容は把握できる。深さも76cmを測り、深くしっかりした掘り込みである。
遺物・所見：遺物は出土していないが、埋土の様相から縄文時代の土坑と判断した。性格は不明である。

10区215号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区N・0－11・12グリッド
経過等・規模：長軸を北西に持つ不整長方形を呈する土坑である。規模は約126×94cm、深さは36cmである。坑底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりも直立気味でしっかりした掘り込みである。
遺物・所見：埋土中位より土器片数点を出土し、３点を図示した。称名寺式土器に比定できるように、土坑は縄文時代後期の所産と考えるが、土坑の性格はやや判然としない。平面形状から墓壙とも捉えられるだろう。

10区232号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区M－12グリッド
経過等・規模：径約75×69cmの小型の円形土坑である。深さは25cmを測る。単独の検出で周辺は中世遺構が群在する箇所である。
遺物・所見：比較的大型の破片が埋土中層より下層にかけて出土する。すべて同一個体破片ながら、個体には図示し得ず２片を掲載した。称名寺式である。土坑の形態・規模から墓壙としては小型で、検討を要する。また、貯蔵穴とすると上半部を逸失した様相であろうか。

10区250号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区P－11・12グリッド
経過等・規模：251号土坑・281号土坑と重複して調査された。281号土坑が切る新旧関係にあるが251号土坑との新旧は不明である。平面形は約192×112cmの不整方形を呈し、深さ約50cmを測り、しっかりした掘り込みで壁の立ち上がりも明瞭である。
遺物・所見：出土遺物は少なく、口縁部破片１点を図示したのみである。称名寺式であろう。土坑の形態から墓壙としての性格に可能性が求められるが、出土遺物の希薄さから断定はできない。

10区281号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区0・P－11・12グリッド
経過等・規模：250号土坑を切る新旧で調査された円形の土坑である。規模は径約110×96cm、深さ約59cmを測るようにしっかりした掘り込みである。
遺物・所見：出土遺物は少ない。深鉢体部破片とスクレイパー１点を図示した。深鉢破片は称名寺式と判断できよう。土坑の性格としては確定的ではないが、形態から、貯蔵穴としての位置付けが相応しいだろう。

10区264号土坑

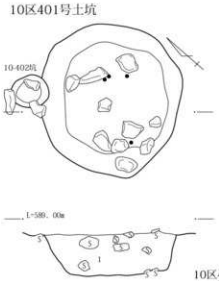
調査年度：平成17年度
位　置：10区P－11グリッド
経過等・規模：前述の250・251・281号土坑の南に近接して調査された、長軸を北北西に向ける楕円形状の土坑である。規模は約135×78cm、深さ55cmを測る。
遺物・所見：出土遺物は見られず、時期の特定は見られない。埋土の様相から、古代～近世ではなく縄文・弥生時代の所産と判断した。平面形状から墓壙の可能性が高いが確定性に乏しい

10区284号土坑

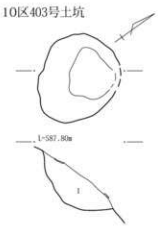
調査年度：平成17年度
位　置：10区0－11グリッド
経過等・規模：単独の検出である。平面形は長軸を東北東に向けた不整長方形を呈し、径約152×88cmの平面規模である。深さは約34cmながら、しっかりした掘り込みを示す。
遺物・所見：出土遺物は希薄で、僅かに土器片１点、使用痕ある剥片石器１点を図示した。出土土器から弥生時代前期の所産と考えた。土坑の性格は平面形から墓壙であろうか。

10区327・328号土坑

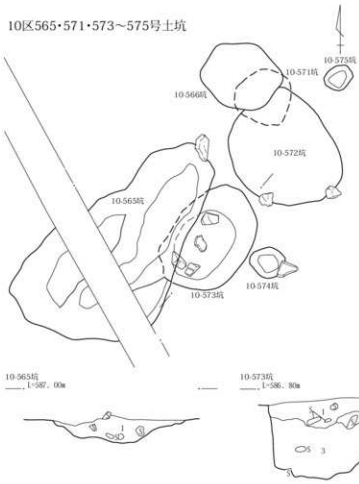
調査年度：平成17年度



10区401号土坑土層
1 黒褐色土　角礫多く含む。締まり弱い

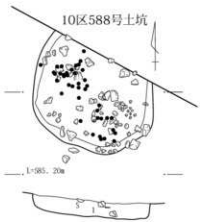


10区403号土坑土層
1 黒色土　黄褐色土粒少量含む。締まり弱い



10区565号土坑土層
1 黒色土　小礫多く含む。締まり弱い

10区573号土坑土層
1 黒褐色土　大型礫・黄褐色土塊を含む
2 暗褐色土　黄褐色土塊を多く含む。締り強い
3 黒褐色土　黄褐色土粒を少量含む。締り弱い



10区588号土坑土層
1 黒褐色土　角礫を少量含む。締まり弱い

0　1:40　1m

第42図　10区土坑（縄文・弥生）（３）

位　置：10区M・N－10・11グリッド
経過等・規模：２基の土坑重複であるが、328号土坑底面に286号土坑も重複する。327号土坑が328号土坑を切る重複関係である。327号土坑は径68㎝程の小型の円形土坑で、328号土坑は約174×123mの不整長方形を呈し、深さ58㎝を測る。286号土坑は小ピットである。
遺物・所見：328号土坑から数点の深鉢小破片を出土し、２点を図示した。いずれも称名寺式と考えた。土坑の性格としては、伴出資料に乏しく確定できないが、平面形や規模から墓壙の可能性を指摘しておきたい。

10区385号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区P－14グリッド
経過等・規模：10区調査区中央やや南西よりで調査された。386号土坑と重複し、382号土坑が南西に近接する。いずれも新旧は不明だが、386号土坑は本土坑と同時期存在の可能性もある。規模は約132×124㎝程の不整正方形を呈し、深さは約48㎝を測り、壁も直立気味にしっかりと立ち上がる。坑底面も凹凸・傾斜は見られるが水平を意識した構築と判断した。東壁隅周辺に自然礫が集中する。意図的な所産かは不明だが、明らかに土坑平面形に沿う形態で、本土坑構築に伴う例とみたい。
遺物・所見：出土遺物は希薄で、２点を図示し得た。称名寺式である。土坑の性格としては墓壙としての位置付けを示唆したい。東壁隅の自然礫や386号土坑の存在は標柱の存在を想定できる。検討を要するが、縄文時代後期初頭の所産の墓壙と考えておきたい。

10区400号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区P－14グリッド
経過等・規模：385号土坑北に近接して検出された。平面形は不正円形を呈し、規模は約108×82㎝、深さは約56㎝を測る。良好な掘り込みで、壁の掘り込みも直立気味でしっかりしていた。
遺物・所見：遺物の出土は見られなかったが、埋土の様相から縄文～弥生時代の所産と捉えた。土坑の性格は不明だが、形態から貯蔵穴の可能性が高い。

10区401号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区R－15グリッド
経過等・規模：10区西側で402号土坑と重複して調査された。径168×152㎝程の円形の土坑で、深さも47㎝を測るしっかりした掘り込みを呈していた。中～大型の自然礫を多く出土するが意図的な埋置ではなく流入・埋土に伴う例と見た。
遺物・所見：出土土器は小破片資料を主としており、これらも流入の可能性が高い。時期は弥生時代前期に比定される。土坑の性格は、平・断面形の様相から貯蔵穴の可能性が高い。

10区403号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区N・O－14グリッド
経過等・規模：６号住居跡と重複して検出された。現代小規模土地改良に伴う段差にあたる箇所で、そのため上層が大きく逸失していた。規模は傾斜地形のため判然としないが、約94×82㎝、深さ62㎝を測るものの、東側から北側が削平されているため、遺存度は不良である。
遺物・所見：大型の土器片など数点が出土し、１点のみを図示した。称名寺式である。土坑の性格は不明である。

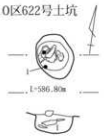
10区565･571・573 ～ 575号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区P・Q－19・20グリッド
経過等・規模：10区調査区北西側で一群となって検出された土坑群である。周辺には平安時代住居跡である８号住居跡・９号住住居跡が北側に近接するが、縄文時代の所産と判断した。
遺物・所見：群在する土坑群である。主に後期初頭の土器片を出土しているため、当該期に時期を求めるが、性格を想起できる例は少ない。573号土坑は貯蔵穴の可能性がある。なお、近接する566号土坑は９世紀後半に比定される土坑であるが、称名寺式破片１点が出土している。本項に併せて掲載した。

10区580号土坑

調査年度：平成17年度

10区622号土坑



10区622号土坑土層
1 黒褐色土　大型礫多く含む。
炭化物少量含む

10区626号土坑

10区626号土坑土層
1 黒褐色土　角礫多く含む。
炭化物少量含む
2 黒褐色土　小礫少量含む。
炭化物多く含む

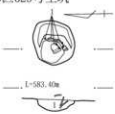
10区627号土坑

10区627号土坑土層
1 暗褐色土　炭化物少量含む
2 暗褐色土　白色粒少量含む

10区628号土坑

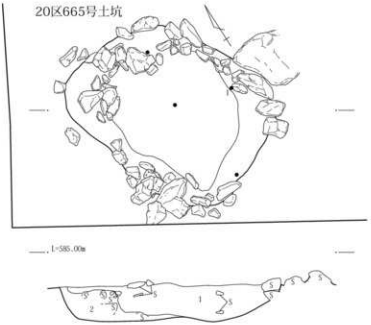
10区628号土坑土層
1 黒褐色土　白色粒少量含む。締まり弱い

10区629号土坑



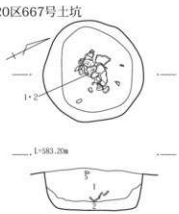
10区629号土坑土層
1 黒褐色土　白色粒少量含む。炭化物多く含む

20区665号土坑



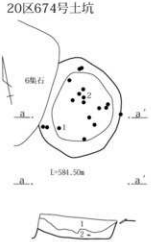
20区　665号土坑土層
1 黒褐色土　粘質土。大型の礫を少量含む
2 黒褐色土　大型礫を主体とする。地山近似

20区667号土坑



20区　667号土坑土層
1 暗褐色土　やや砂質。小礫を多く含む。
遺物出土層
2 黒褐色土　粘質土。地山近似ながら、底
面基盤は山砂

20区674号土坑



20区　674号土坑土層
1 暗褐色土　小礫を多く含む
2 暗褐色土　黒色土塊を含む

0　1:40　1m

第43図　10区土坑（縄文・弥生）（４）

位　置：10区Q－20グリッド
経過等・規模：小型の土坑で単独の検出である。長軸72×短軸62cm程の不整円形を呈する。坑底面は平坦ながら凹凸がある。深さは18cm程で浅いが壁の立ち上がりはしっかりしていた。
遺物・所見：加曽利ＥⅣ式の深鉢口縁部破片が出土するが、時期判断としては確定的ではない。土坑時期は中期終末～後期初頭段階の所産と考えるが、性格などは不明である。

10区588号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区L－20グリッド
経過等・規模：10区調査区の北側の調査区境で調査された。そのため、土坑北端は調査区域外となる。単独の検出である。規模は約145×104cmの不整円形を呈し、深さは28cmを測り、やや浅い。
遺物・所見：出土遺物は多くの小型の礫とともに、底面より浮いた状態で土器片の出土を見る。4点を図示した。三十稲場式と称名寺式の共伴であるが、個体の共伴ではなく破片資料の共伴として制約はある。土坑の性格は判然としないが、貯蔵穴としての位置付けが妥当であろうか。

10区622号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区Q－21グリッド
経過等・規模：径40cm程の小型の土坑である。深さは22cmを測る。ピット状の土坑ではあるが柱痕は確認されなかった。
遺物・所見：称名寺式の体部破片が出土する。時期は後期初頭に比定されるが、土坑の性格は不明である。

10区626号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区Q－20・21グリッド
経過等・規模：９号住南壁に切られて調査された。土坑北半を大きく切られた規模の詳細は不明である。深さは現存部で約30cmを測る。
遺物・所見：上層に集中して数点の土器片の出土を見る。46図１は堀之内１式の破片であるが、２は加曽利ＥⅣ式であろうか。時間幅があり時期の特定はできず、土坑性格も判然としない。

10区627号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区H－18グリッド
経過等・規模：小型の不整楕円状を平面形とする土坑である。規模は約110×72cmで深さは約28cmを測る。
遺物・所見：遺物は極少量が出土し、後期土器細片が出土している。また、埋土の様相から縄文時代の土坑と判断した。性格は不明である。

10区628号土坑

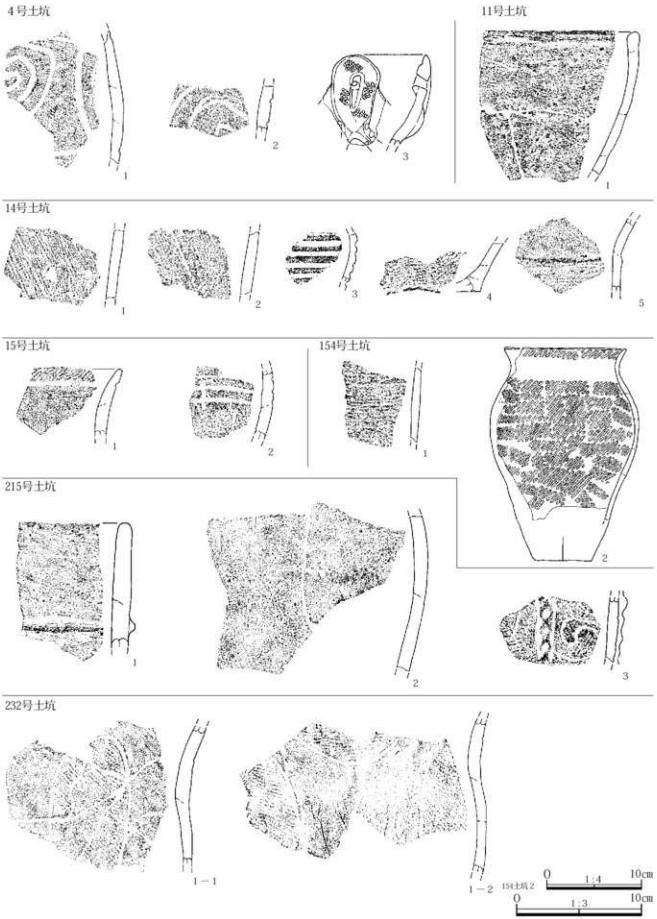
調査年度：平成17年度
位　置：10区H－20グリッド
経過等・規模：長軸を北東に向ける小型の不整楕円状の平面形を示す。規模は約54×36cm、深さは約９cmを測るように、掘り込みも浅く、小ピット状の土坑である。
遺物・所見：遺物は後期土器小破片が数点出土するが、無文で図示に堪える例ではなかった。土坑の性格も不明である。

10区629号土坑

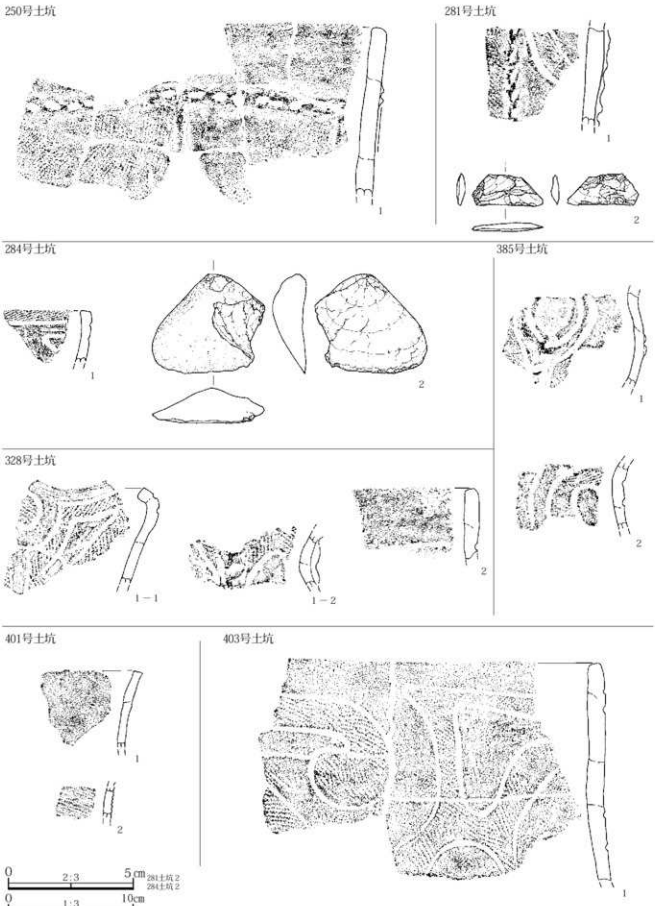
調査年度：平成17年度
位　置：10区H－20グリッド
経過等・規模：これも小ピット状の土坑である。径約50cmの小型円形を呈し、深さは約12cmを測り浅い。
遺物・所見：遺物は埋土中より、深鉢破片が出土し、接合作業の結果、半完形の深鉢を図示し得た。堀之内１式に比定されよう。土坑の性格は不明である。

20区665号土坑

調査年度：平成18年度
位　置：20区S－３・４グリッド
経過等・規模：20区調査区の北西端で検出した。大型の不整方形状を呈する土坑である。規模は約206×176cmで、深さは38cmと比較的深く掘り込みもしっかりしていた。長軸方位を北北西に向ける。土坑は大型礫も伴出しており、特に土坑縁辺に配された自然礫が顕著だったが、意

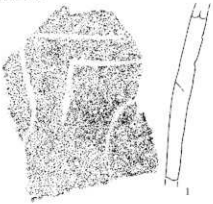


第44図　10区土坑（縄文・弥生）出土遺物（１）



第45図　10区土坑（縄文・弥生）出土遺物（２）

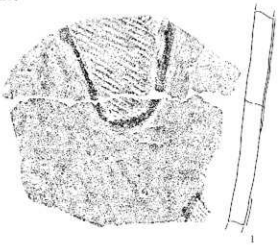
568号土坑

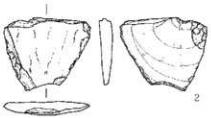


570号土坑

580号土坑

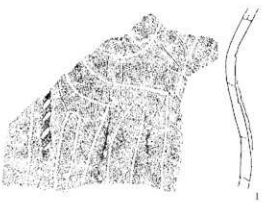
573号土坑





588号土坑

622号土坑



626号土坑

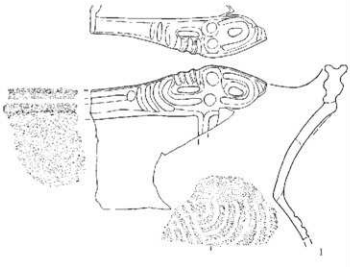
626土坑 1　0　1:4　10cm

573土坑 2　0　2:3　5cm

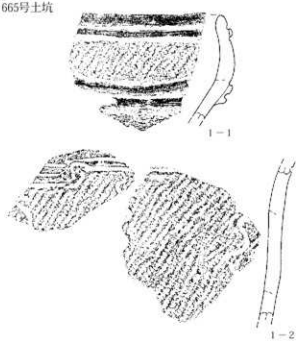
0　1:3　10cm

第46図　10区土坑（縄文・弥生）出土遺物（３）

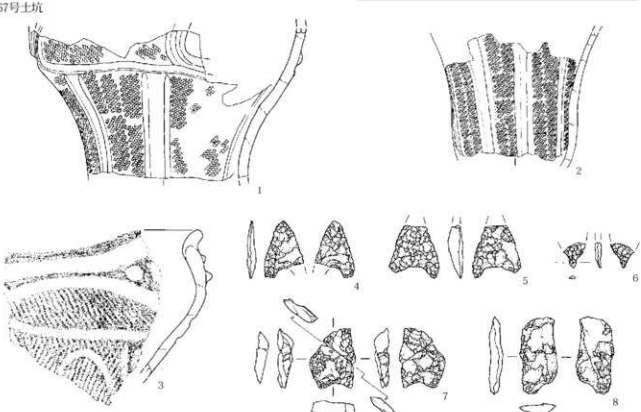
10区
629号土坑



20区
665号土坑



667号土坑



674号土坑

第47図　10区（４）・20区土坑（縄文・弥生）出土遺物

図的な配置として、積極的には確定できない。

遺物・所見：出土遺物は加曽利ＥⅡ式土器である。2片を図示したが、同一個体と判断した。土坑の性格は平面形や埋土の様相から墓壙と考えたい。土坑縁辺の自然礫は基盤礫の露出とも捉えられ、墓壙に伴う囲繞施設とは判断できない。

20区667号土坑

調査年度：平成18年度

位　置：20区N－２グリッド

経過等・規模：径約107×98cm、深さ約43cmを測る円形土坑で、掘り込みもしっかりしている。やや小型の土坑ながら単独の検出で残存度も良好といえよう。

遺物・所見：加曽利ＥⅢ式土器が土坑中位より、まとまって出土している。土坑の帰属時期は中期後葉と判断できよう。同時に石鏃・石錘・削器及び石鏃未製品の石器出土を見る。黒曜石製品が主で、石鏃未製品の存在から、石鏃など押圧剥離を技法とする石器製作址の存在を想起させる。土坑の性格は確定できないが、貯蔵穴としても周辺に予想される石器製作址との関連も念頭におきたい。

20区674号土坑

調査年度：平成18年度

位　置：10区N－１グリッド

経過等・規模：20区観音堂区にある６号集石遺構調査後に調査した。平面形は不正円形を呈し、規模は約106×77×25cmを図る。やや浅いが掘り込みはしっかりしていた。

遺物・所見：弥生時代前期土器片を出土している。周辺には、同時期の20区土器溜まりが検出されており、本土坑との関連性も想起されよう。性格は不明ながら、形態などから貯蔵穴としての位置付けが妥当であろう。

7　遺構外出土遺物（縄文時代～弥生時代）（第48～52図/PL35～37）

ここでは、平成17年度および18年度に調査した地区における遺構外出土遺物を掲載する。すなわち、９区～11区・20区の一部が対象であり、各区に検出された遺構の時期を反映する結果となっている。概略を記し、詳細は巻末の観察表を参照していただきたい。

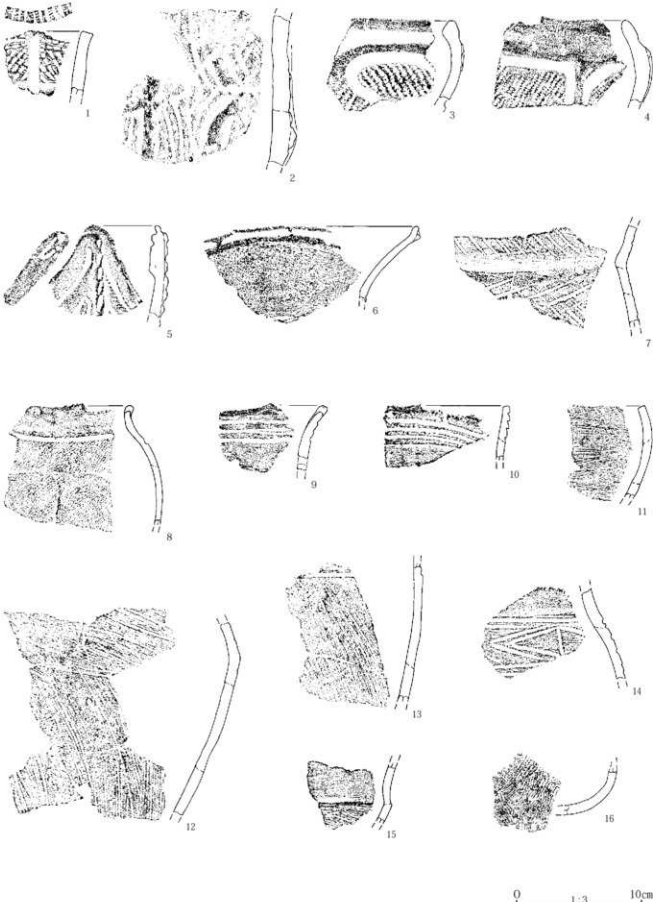
９区：茅山下層式の口縁部破片（48図１）が１点出土するが、他は縄文中期（２～４）～後期（５～７）、弥生前期（８～15）の破片資料である。９区で調査された土器溜り遺構も弥生前期～中期に比定されており、補填資料として位置付けられよう。

10区：縄文早期・前期の資料は見られず、中期後葉以降の土器（49図１・２）を並べる。後期初頭～前葉の資料が多い（３～15）。10区は1号住居跡や10号住居跡、11号住居跡、13号住居跡が敷石住居跡であり、また縄文時代の土坑資料も後期に傾くように、遺構外資料もこの時期の充実ぶりが伺われる。50図16～26は弥生前期～中期の資料である。10区２号住居跡や１号埋設土器、４号埋設土器が当該期に比定される遺構である。

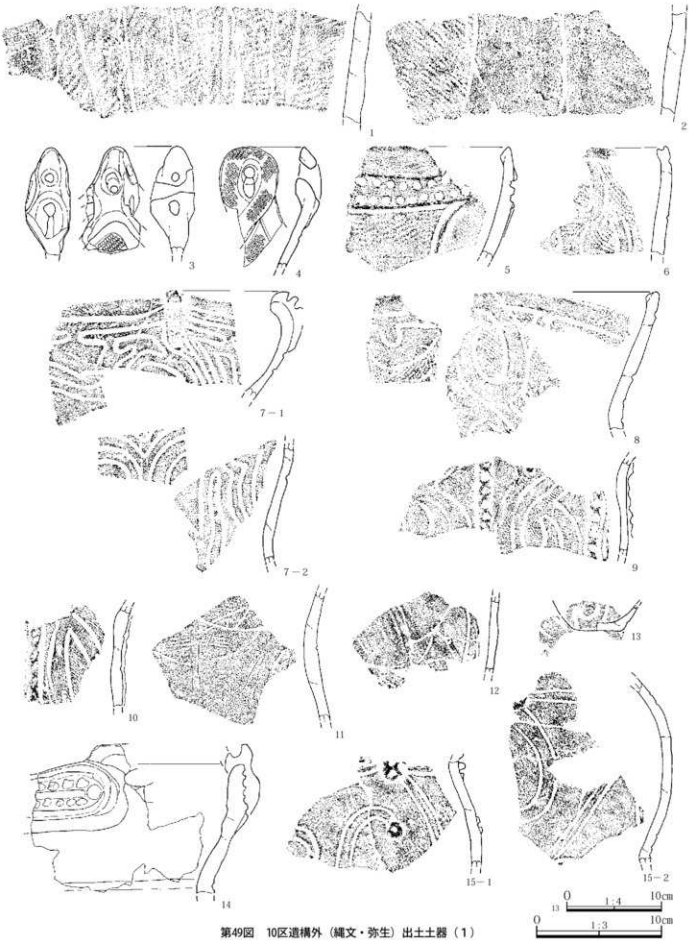
11区：土坑のみの調査となった地区だが、土坑出土遺物は無く、遺構外出土土器の提示となった。縄文時代資料では中期初頭に比定される口縁部破片（51図１）と中期中葉の越後系の体部破片（２）、晩期注口土器の体部破片（４）を見る。その他は弥生時代前期～中期の土器である（３・５～12）。11区で調査された土坑もあるいは弥生時代に比定され得るかもしれない。

20区：平成18年度調査で得られた資料を中心としたため、量は少ない。縄文中期後葉の個体（51図１・２）、中葉に比定される深鉢口縁部突起（３・４）、後期前葉の口縁部破片（５）を図示した。横壁中村遺跡における20区は遺構密度が高い地区であり、特に中期・後期の住居跡等の集落資料が集中する。本書で掲載する20区や10区資料は集落の外縁部あたる地点であり、遺構外資料も当該期を反映している。また、今回は遺構外ながら弥生時代の土器片も抽出し得た（６～10）。

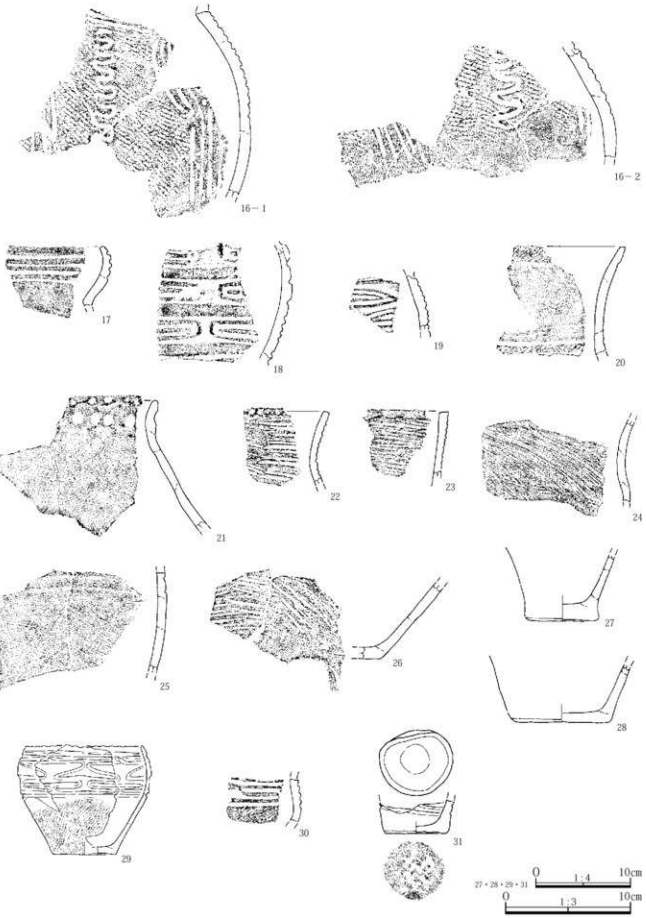
石器：出土量は多く、特徴的な石器を抽出した。晩期に特徴的な石鏃（52図１）の他、中期～後期に比定される大型石匙（２・３）、黒曜石製のスクレイパー（４・５）や石棒（６･10）磨製石斧（７･９）､薄手の石製品（８）、打製石斧（11～14）である。このうち８は、弥生時代の所産と捉えられる。石棒10は中位のみの残存で、上半、下半部は意図的な欠損が施されたと位置付けられている。



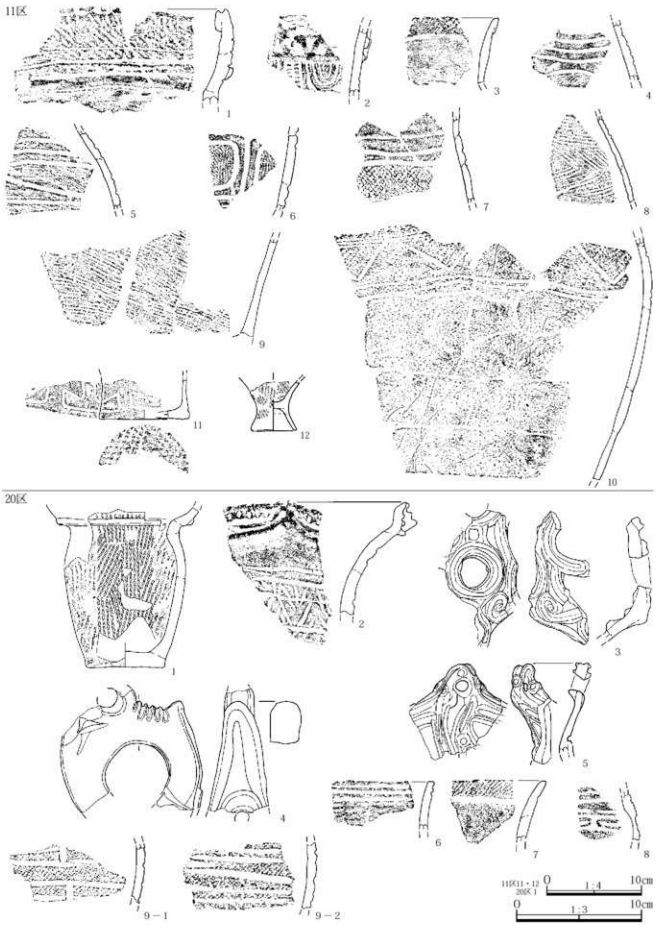
第48図　９区遺構外（縄文・弥生）出土土器



第49図　10区遺構外（縄文・弥生）出土土器（1）



第50図　10区遺構外（縄文・弥生）出土土器（２）



第51図　11・20区遺構外（縄文・弥生）出土土器

第52図　遺構外（縄文・弥生）出土石器

第４節　古代・中世・近世の遺構と出土遺物

ここでは、平成12年度、平成17・18年度に調査された古代（平安時代）と中世～近世に比定された遺構・遺物を報告する。前にも述べたように、土坑に関しては時代・時期の判断が難しい例もあり、本節で扱う土坑の一部には、前節で扱うべき土坑が混在してしまった可能性もある。ご容赦願いたい。

平安時代の遺構としては、住居跡10軒、土坑２基が相当しよう。住居跡は９区・10区・20区にまたがり散発的に分布する。いずれも９世紀後半段階に時期が求められる住居跡だが、10区９号住居跡は良好な焼失家屋である。

中世遺構としては、10区で検出された１～３号建物跡や掘立柱建物跡群があたる。既報告の館跡の存在もあり、横壁中村遺跡における中世遺構群は当地域でも傑出しており、注目しなければならない遺構群である。また墓壙も多く検出されており、中世～近世に時期が求められよう。

近世遺構としては、掘立柱建物跡・石垣遺構・溝・畑跡など多岐にわたる。なかでも観音堂区とした10区から20区にかけての一角は、江戸時代前期に建立時期が求められる観音堂跡を調査している。併せて当地区より礫石経が多量に出土しており、当地域の特徴ある宗教遺物として特筆されよう。

１　住居跡

９区で３軒、10区で６軒、20区で１軒が調査されている。平安時代の所産で出土遺物から９世紀代に時期が求められる。

９区２号住居跡（第53･54図/PL ７）

調査年度：平成17年度

位　置：９区K・L－17・18グリッド

経過等：９区調査区北東側で調査された。遺跡を横断する現道によって、住居跡北半が破壊されていた。

南半のみの現存のため全容は把握できないが、主軸を東に向け、軸長4.4mを測る。深さは58cmで壁の立ち上がりもしっかりしていた。おそらく中規模の方形を呈する住居跡と判断できよう。

重　複：重複遺構はなく単独の検出となった。南西に19mの距離を置いて３号住居跡が見られる。

床　面：ほぼ平坦面を築く。暗褐色～黒褐色土による貼り床がなされる。強い硬化面は見られなかった。また、西側に小範囲であるが焼土が集まる。

柱　穴：床下調査においても、柱穴に相当するピットは検出されなかった。

カマド：東壁に設けられる。全長約1.8mで煙道長約1.0m、焚き口幅約0.8mを測る。焚き口部や煙道部にかけて自然石が散乱することから、構築材と思われる。焼土は使用面に顕著だった。

遺　物：カマド内及びその周辺、さらに南壁周辺に出土分布が偏る傾向がある。埋土中位より床面にかけて出土している。須恵器坏・椀類や土師器甕類が主である。坏（54図２）はカマド南西で床直出土である。椀（５）はカマド内から、土師器甕類（７～13）もカマド内からの出土が多い。ロクロ甕も12がカマド内から、18がカマド西で埋土下位より出土している。

所　見：北半を失う住居跡であるが、規模・出土遺物から９世紀後半段階の所産と考える。

９区３号住居跡（第55～57図/PL ７）

調査年度：平成17年度

位　置：９区O・P－14・15グリッド

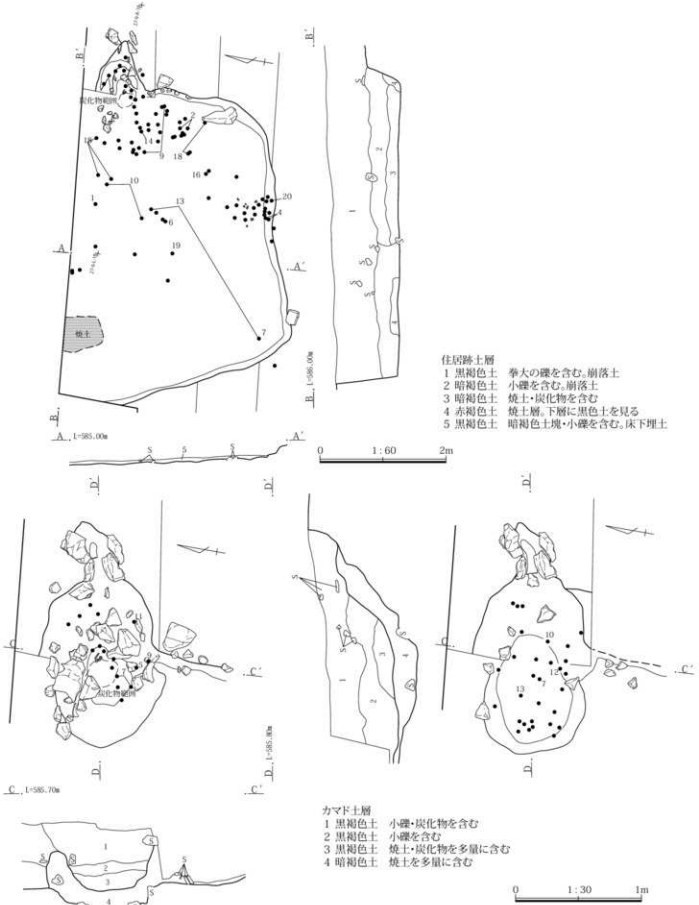
経過等：９区調査区の中央で調査された。周辺は北側への傾斜で、そのため住居跡北側の壁は逸失していた。しかしながた北西隅が僅かながら確認されたため、住居跡規模は把握できた。主軸を北東に向けた正方形を呈する平面形で、規模は長軸長4.8×短軸長4.4m、深さは30～40cmを測る。

重　複：単独の検出となったが、西９mに近接して４号住居跡がある。

壁　材：東壁と南壁は大型の自然礫で補強されていた。周辺地形である北側への傾斜に伴う壁補強と考えられる。石垣のような規則性は見られなかったが、堅牢な印象を得る住居跡である。

床　面：緩やかに北に傾斜するが、ほぼ平坦地形を築く。黒褐色土を床下埋土とし、貼り床がなされていた。硬化面は床面中央と南西隅壁際に見ることができた。

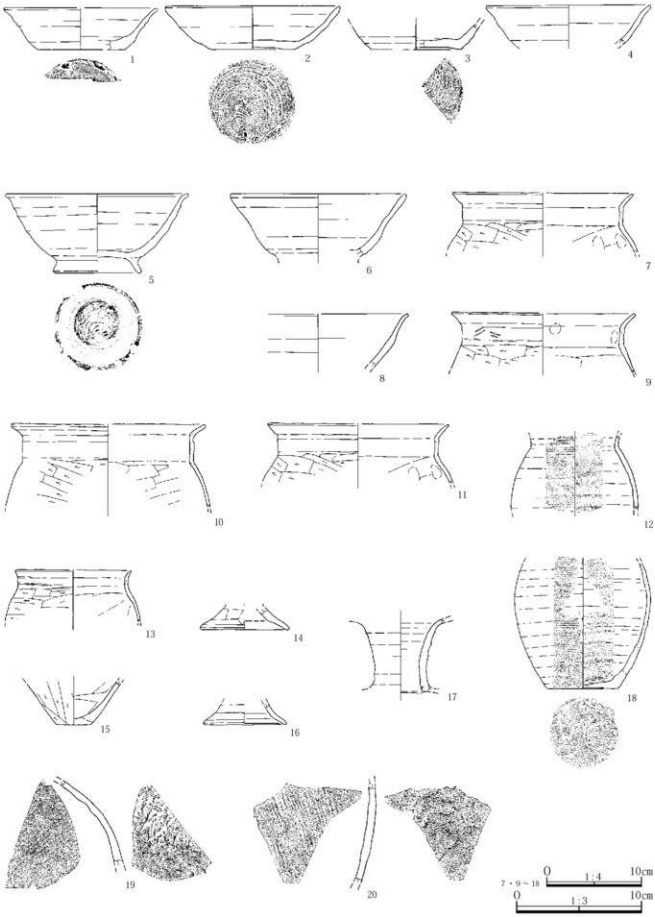
柱　穴：床面北側に２基の柱穴を検出した。いずれも径



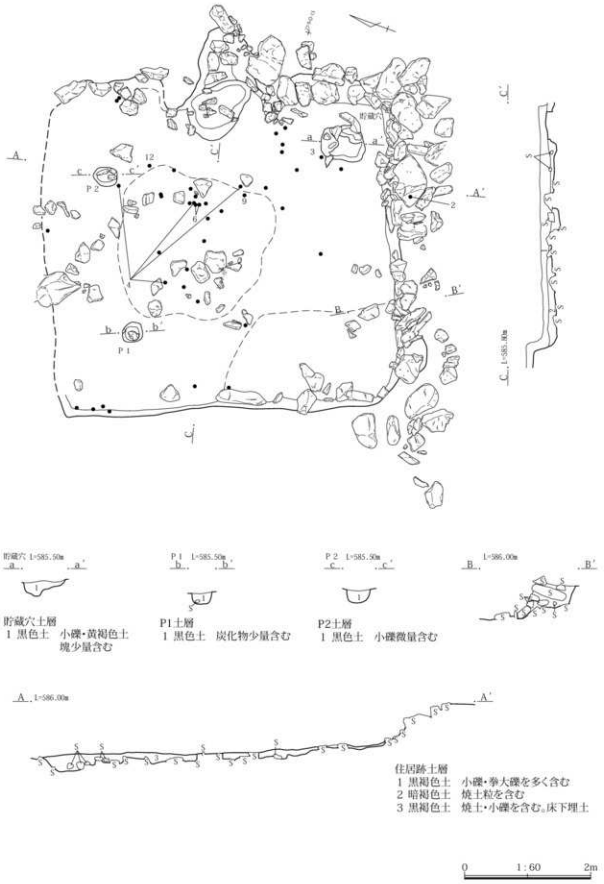
住居跡土層
1 黒褐色土　拳大の礫を含む。崩落土
2 暗褐色土　小礫を含む。崩落土
3 暗褐色土　焼土・炭化物を含む
4 赤褐色土　焼土層。下層に黒色土を見る
5 黒褐色土　暗褐色土塊・小礫を含む。床下埋土

カマド土層
1 黒褐色土　小礫・炭化物を含む
2 黒褐色土　小礫を含む
3 黒褐色土　焼土・炭化物を多量に含む
4 暗褐色土　焼土を多量に含む

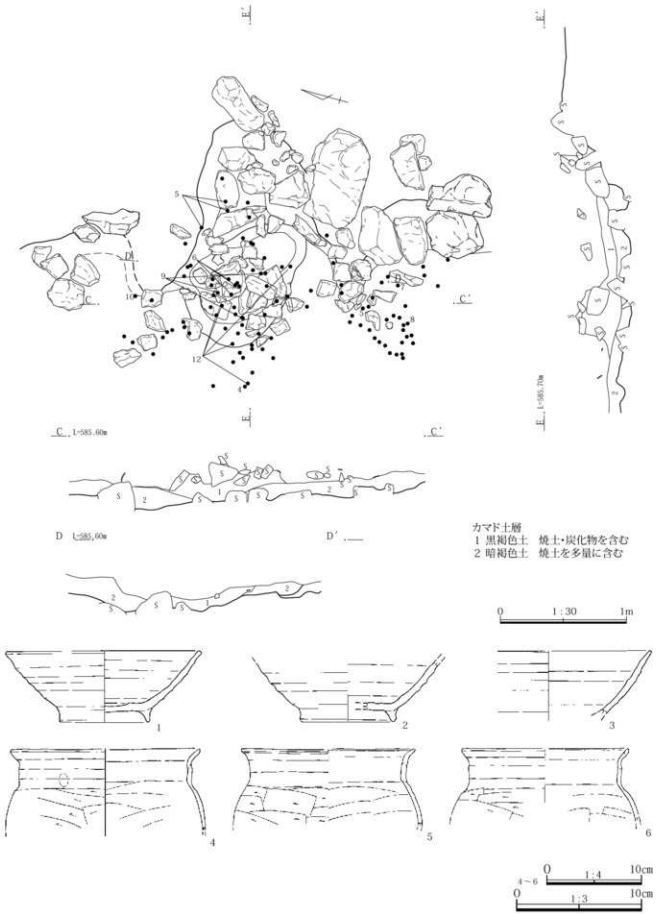
第53図　９区２号住居跡



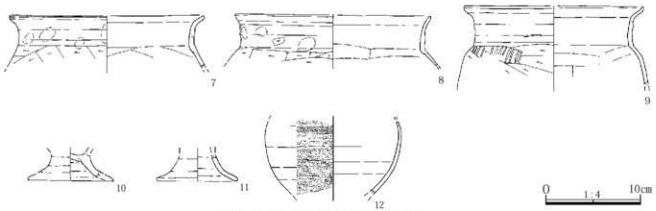
第54図　９区２号住居跡出土遺物



第55図　９区３号住居跡（１）



第56図　９区３号住居跡（２）・出土遺物（１）



第57図　９区３号住居跡出土遺物（２）

30cm、深さは20cm前後の小規模な例だが、配置からも柱穴と判断した。

カマド：東壁ほぼ中央に設けられる。全長約1.4m、煙道長約0.63m、焚き口幅約1.4mを測る。構築材である大型自然石が焚き口部から煙道部にかけて出土する。原位置は外れていたが、東壁を補強する自然石と一体化する様相を示す。

遺　物：やや少量の出土だが住居跡中央からカマドにかけて集中する。カマド内と周辺は土師器甕類（56図５～57図10）、ロクロ甕（12）が集中する。須恵器埦（１～３）は埋土中の出土である。

所　見：出土量は少ないが、出土遺物から９世紀後半と捉えられよう。特に南壁・東壁の壁補強礫は状態も良く当地域の９世紀代住居跡の普遍的な様相として、良好な資料となろう。

９区４号住居跡（第58･59図/PL ７）

調査年度：平成17年度

位　置：９区Q・R－13・14グリッド

経過等：９区調査区中央ややや西よりで調査した。主軸を北東に持つ不整長方形の平面形を呈す。規模は、長軸長約4.0×短軸長3.7m、深さは約50cmを測るように、小型で住居本体の遺存度は良好である。北東隅が大きく湾曲する形態が不整方形としての平面形判断である。

重　複：単独の検出であるが、東に３号住居跡が近接する。また、南西隅で11号土坑が接する。

床　面：暗褐色土を貼り床土とし、ほぼ平坦面を築く。硬化面は特に顕著ではないが、全面的に安定した印象を得る。床面下の調査に於いて、カマド南に小型の不整楕円状の貯蔵穴を検出した。掘り込みも浅いが、配置から貯蔵穴と捉えた。

柱　穴：検出に努めたが、確認できなかった。

カマド：東壁ほぼ中央に設けられる。全長約1.5m、煙道長約１m、焚き口幅約0.6mで煙道部が強く突出する形態である。自然礫を構築材とする。袖材や側壁材・底面石などが設けられ、しっかりした作りといえよう。埋土は焼土粒を含む黒褐色・暗褐色土で構成される。

遺　物：住居跡中央付近で埋土下位から少量の土器片が出土する。カマド内及び周辺からの出土も見るが完形の出土は見ない。６点の土器を図示した。須恵器坏（59図１）は南壁際で床面からやや浮いた状態で、２は貯蔵穴及び埋土下位より出土する。土師器甕（３）はカマド内から出土している。９世紀後半段階と考えた。

所　見：小型の住居跡ながら、全貌を把握できる資料である。出土遺物は少ないが、時期を９世紀後半と考え、９区で調査された２号住居跡と３号住居跡との関連も踏まえ、小規模ながら住居群を形成しているといえよう。

10区５号住居跡（第60･61図/PL ８）

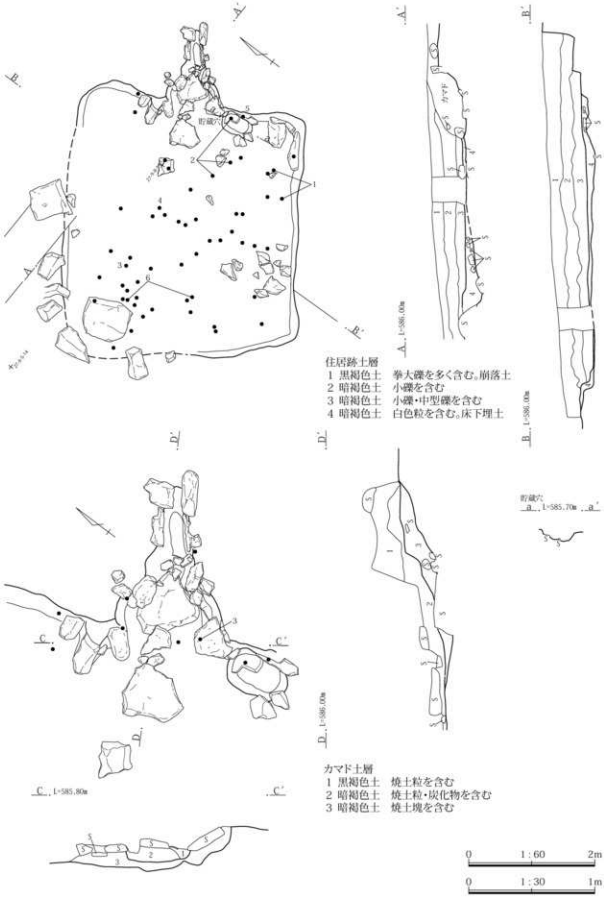
調査年度：平成17年度

位　置：10区Q・R－13・14グリッド

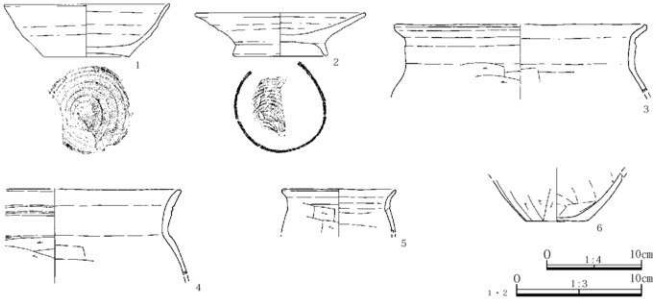
経過等：10区調査区南西隅で調査された。傾斜の強い地点ながら、壁の逸失は見られず良好な検出状況だった。東に14m離れて６・７号住居跡があるが、距離を置くといえよう。主軸を北東に設け、長軸長約3.7×短軸長約3.2mを測る長方形を平面形とし、深さは約60cmで良好な遺存状態を示していた。

重　複：北西隅で158号土坑が接する以外、重複遺構は見られない。単独の検出といえよう。

床　面：斜面地形にありながら、ほぼ平坦面を築く。黒



第58図　９区４号住居跡



第59図　９区４号住居跡出土遺物

褐色土～暗褐色土を貼り床構成土としていた。硬化面は顕著ではなかった。また、床面中央床直上に炭化材が出土している。少量の出土ながら、焼失住居跡の可能性もある。

柱　穴：床下調査で２基の小ピット（P1・P2）が得られた。P1は南西隅で検出され、径約30cm、深さ約42cmを測る。P2は北東隅カマド寄りに位置し、径約29×25cm、深さ約22cmを測る。P2が小規模だが、配置的にP1・P2を柱穴と考えたい。南東隅や北西隅のピットは検出に努めたが、確認できなかった。貯蔵穴等の検出は果たせなかった。

カマド：東壁やや南寄りに設けられる。大型の自然石と焼土塊が散乱しており、住居廃棄時の破壊と捉えられた。規模は全長約67cm、焚き口幅約50cmと小型で煙道の立ち上がりも弱いことからも、屋外への突出も短いと捉えられた。使用面下の調査で、焚き口部奥から煙道部にかけて小ピットを確認したが、支脚坑とは位置付けられないだろう。

遺　物：良好な遺存度の割に、出土遺物は貧弱である。埋土中より数点の土器片の出土を見るのみで、カマド西の床直上出土の須恵器坏（61図１）とカマド内埋土出土の土師器甕底部（２）を図示したのみである。

所　見：小型の住居跡で遺存度も良好である。焼失住居跡として考えておきたい。現段階では、横壁中村遺跡平安時代住居跡では最南端に占地する状況である。出土遺物が少なく、確定性にやや欠けるが、９世紀中頃～後半段階に時期を求めたい。

10区６・７号住居跡（第62図/PL ８）

調査年度：平成17年度

位　置：６号住居跡＝Ⅳ・0－13・14グリッド

　　７号住居跡＝Ⅳ～0－13グリッド

経過等：10区調査区のほぼ中央で調査された。周辺は土地改良によって強い掘削を受けた箇所であり、そのため本住居跡北半は逸失しており、カマドなどの痕跡も見られなかった。確認できた南壁と西壁も極めて残存状態は悪く、20cm前後の深さである。

２軒が重複する。北側が６号住居跡、南側が７号住居跡として住居名を付した。いずれも南西側のみの残存である。南側壁の軸方位が一致しており、両住居の親近性は窺えよう。ただし両住居跡の新旧は不明である。

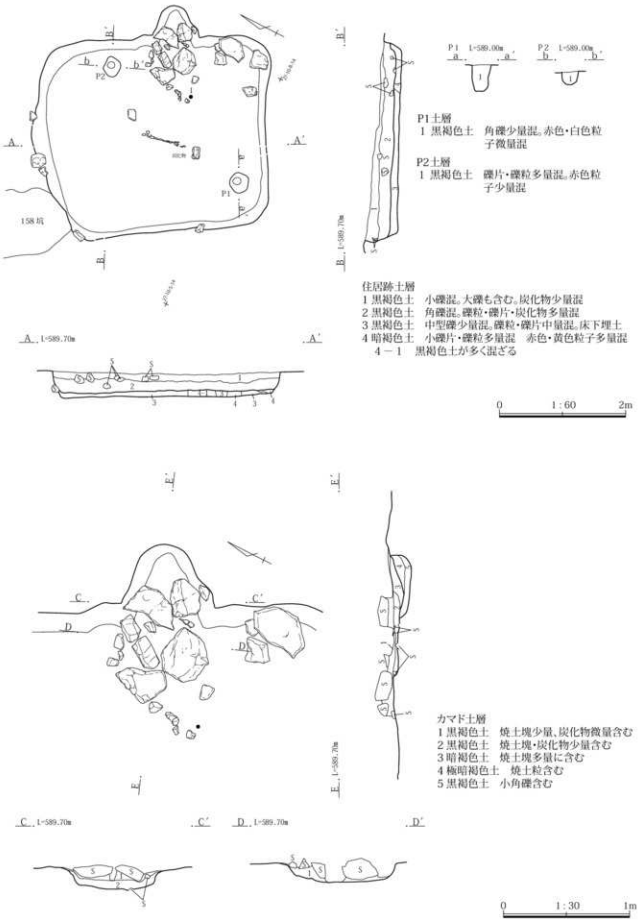
重　複：403号土坑が６号住北西で重なる。また１号溝が南西に近接する。

床　面：床面そのものが削平を受けた可能性があり、判然としない。床下底面では僅かな凹凸を見るが、ほぼ平坦といえよう。

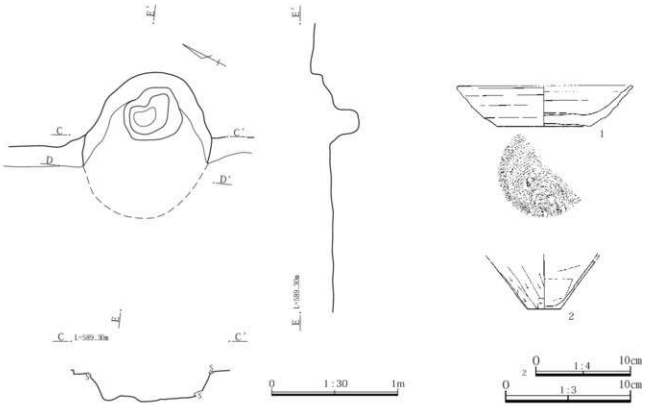
柱　穴：床面上及び住居跡周辺より16基のピットを確認し、柱穴の検出に努めたが、配置的に組み合う例を見出せなかった。ただ、柱穴規模としては妥当性がある。

カマド：確認できなかった。

遺　物：小破片が少量出土した。各住居跡に帰属し得る出土状態ではなく、詳細な時期把握はできない。須恵器



第60図　10区５号住居跡（１）



第61図　10区５号住居跡（２）・出土遺物

坏・埦類、甕口縁部破片を図示したが残存度も悪い。

所　見：２軒の重複住居跡だが、北側の段差によって全容は把握できない。出土遺物からは９世紀代と考えるが、判然としない。

10区８号住居跡（第63～67図/PL ８）

調査年度：平成17年度

位　置：M～O－18～20グリッド

経過等：10区調査区北側で検出された。比較的大型の住居跡である。周辺の平安時代住居跡としては、北西約9.6mに9号住居跡、東約19.5mに12号住居跡が見られるが、いずれも距離を置いた占地といえよう。規模は、約6.4×6.2mの正方形を呈する。北壁辺長と南壁辺長に差が見られるため、東壁が西壁に平行せず、そのためやや歪な平面形を呈している。また周辺は、基盤礫の露出が著しく、そのため東壁北半と西壁北半の壁検出が大型礫のため判然としない。平面図では破線で示しているが、不確定な線ではなく、調査で確定した壁である。

深さは約80cmを測り、極めて良好な遺存度を誇る。主軸方位を北東に向ける。

重　複：重複する遺構はなかった。単独の検出である。

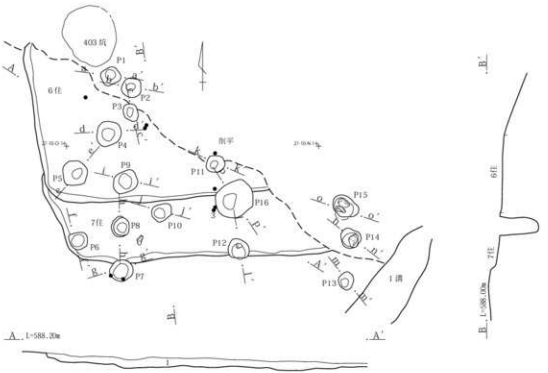
床　面：緩やかに北東に傾くが、ほぼ平坦面といえよう。礫混じりの黒褐色土を貼り床とするが、前述したように基盤礫が露出するため、一部が床面上に突出する様相となる。

貯蔵穴：床下調査において、東南隅で貯蔵穴を検出した。規模は約120×100cmの楕円状を呈し、深さは約20cmで浅い皿状の断面形を示す。自然礫が周辺及び内部から出土し、土器片の出土も上層に多く見られた。

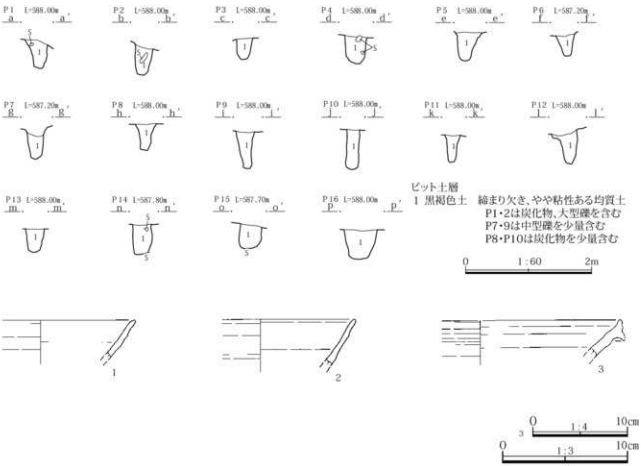
柱　穴：P1～P3を柱穴として判断した。径約30～38cm、深さは９～21cmと小規模な例であるが、位置的に柱穴としての可能性が高い。南西隅においても柱穴の検出に努めたが、確認できなかった。

カマド：東壁やや南寄りに設けられる。全長約140cm、焚き口幅約30cm、煙道長50cmを測る。両袖部分を大型自然礫で補強していた。埋土及び床下埋土にも焼土塊を多量に見ることができた。天井部の構築材を自然礫とせず、粘質土を充てていたのかもしれない。廃棄時の大きな破壊は見られなかった。

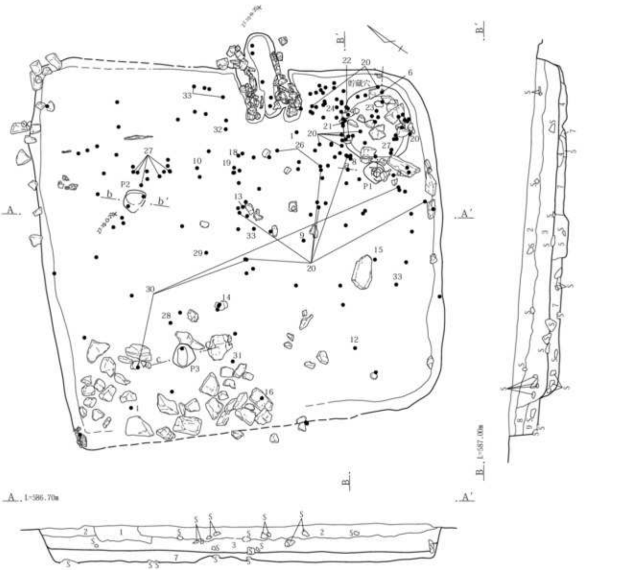
床下土坑：２基の床下土坑を調査した。いずれも不整楕円状を呈し、浅く黒褐色土を埋土としていた。１基からは土器片の出土が集中する。



住居跡土層
1 黒褐色土　地山褐色土塊を均質に少量含む



第62図　10区６・７号住居跡・６号住居跡出土遺物



１黒褐色土　礫片・礫粒多量混。粘性弱いが硬くしまる
２黒色土　中型角礫少量混、礫片・礫粒多量混。白色粒子多い
３黒褐色土　中・大型礫を混、礫粒・礫片多量混。炭化物少量含む
４黒褐色土　礫片・礫粒多量混。焼土塊を多量に含む。炭化物少量含む。土器片多い
５黒褐色土　礫片・礫粒焼土粒。下位に焼土粒子・炭化物多く含む。土器片多く出土
６黒褐色土　礫片・礫粒多量混。焼土粒子微量含む
７黒褐色土　小型礫多量混。大型角礫が混ざる
８黒褐色土　２・３層に比べると均質。礫片・礫粒少量混。地山と判断した
９黒色土　礫片・礫粒はやや少ない。中型角礫少量混。地山と判断した

第63図　10区８号住居跡（１）

遺　物：埋土～床面中に多くの出土遺物を見る。住居跡全域から出土する。須恵器坏（66図１）はカマド西の床直と北西隅の埋土下位から、埦（２）はカマド内煙道部より出土している。貯蔵穴内および周辺からは、土師器甕類の破片出土が目立つ（20 ～ 67図24・27）。また床下土坑からは、20と21が出土する。カマド内の出土土器は土師器甕口縁部破片（25・26）が見られる。27は在地的な土師器甕であるが、床面中央北東寄りでほぼ床直で出土する。須恵器突帯付四耳壺（33）は、住居跡全域埋土中位からの出土である。その他、土錘（31）、鉄鏃（32）の出土を見る。

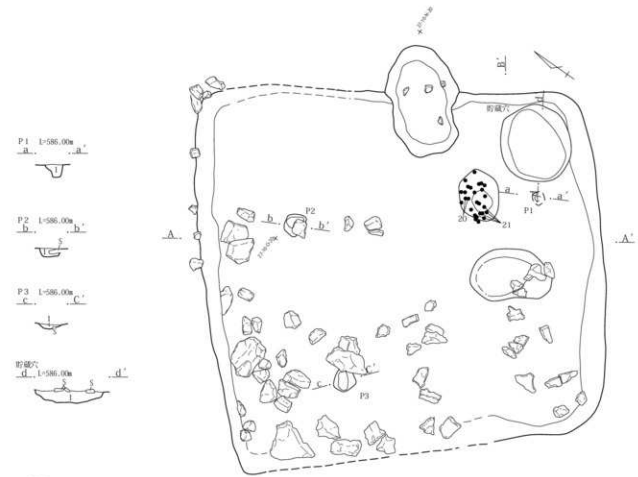
所　見：横壁中村遺跡平安時代住居跡では大型の部類に入る。当地域ではさらに大型の例があるが、本住居跡の規模も遜色ない規模と考える。出土遺物から９世紀後半代に比定されよう。突帯付四耳壺は搬入品であろうか。

10区９号住居跡（第68 ～ 73図/PL ９・10）

調査年度：平成17年度

位　置：10区P・Q－20 ～ 22グリッド

経過等：10区調査区北西隅で調査された焼失住居跡であ



P１土層
１黒褐色土　礫片・礫粒少量混。炭化物・褐色粒子極微量含む

P２土層
１黒褐色土　大型礫含む

P3土層
１暗褐色土　礫片・礫粒少量混。砂質土混

貯蔵穴土層
１黒褐色土　礫片・礫粒多量混　焼土塊・粒子多量に含む。炭化物少量含む。土器片多く出土

0　1:60　2m

第64図　10区８号住居跡（２）

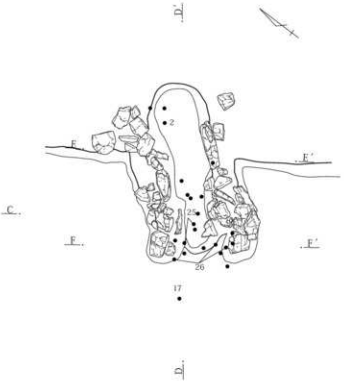
る。先にも述べた8号住居跡と同様に主軸を北東に向け近接する。規模は、約5.7×4.6mで横長の整った長方形を呈する。深さは60cmを測り、良好な遺存度といえよう。調査着手時より炭化物・炭化材が多量に出土し、埋土中位あたりからまとまった炭化材の出土を見た。炭化材の記録は２面に分けて、平面図を取り、炭化材にも取り上げ番号を付した。

床面における炭化材の様相は、板材状のまとまりを北壁から北東隅に見た。調査では「板の間」の証左として位置付けている。また周辺からカマド前の大型板材の縁辺には杭状の炭化材が検出されている。浅く打ち込まれているが、「板の間」やカマド西の大型板材を止める小杭の可能性は高い。

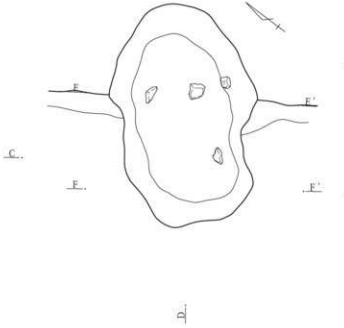
なお、「板の間」とした北東隅の板状炭化材だが、炭化様相は上面が炭化していることから、床面上ではなく、棚のように上位に懸架されていた構築材とする解釈も成り立つ。しかしながら、上面の炭化は火力の強い熾火のような現象で炭化したものと考えている。

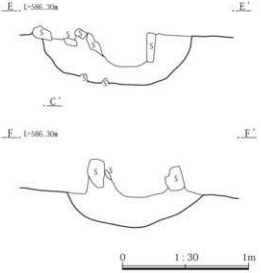
重　複：住居跡の重複はなく、西壁に613号土坑、626号土坑が重複する。

床　面：多量の炭化材を見る事ができる。床面自体はほぼ平坦面を築き、暗褐色土を貼り床とし、床面中央部に硬化面が広がる。一方、カマド西及び北西隅は特に硬くはなく、軟質な印象を得た。北西隅の軟質床面は「板の間」の影響であろう。カマド西はも大型板材が出土している。床面に伴う板材とすれば、作業台としての性格が

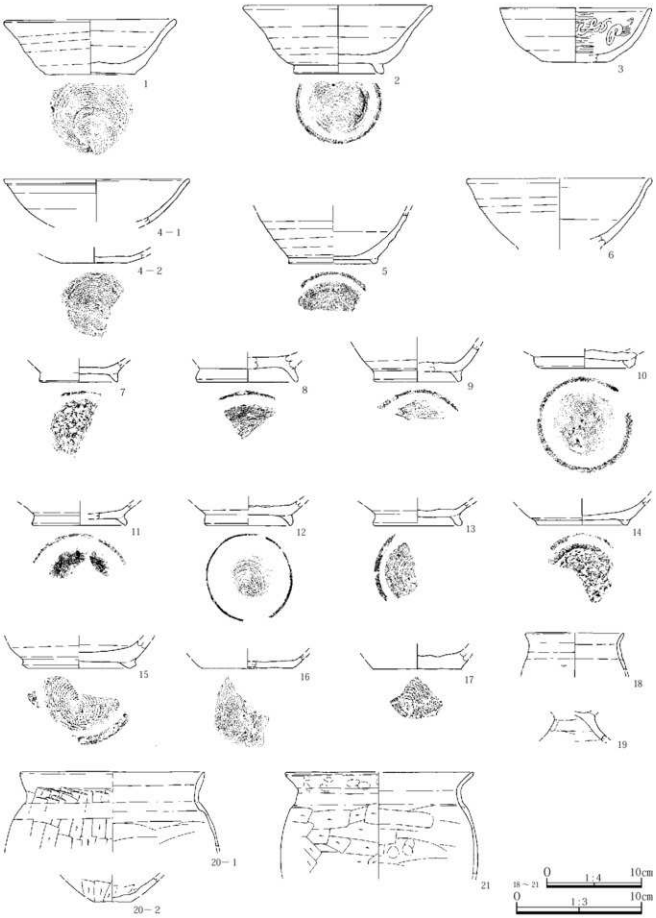


カマド土層
1 黒褐色土　焼土を塊状に含む。炭化物多い
2 黒褐色土　焼土塊を多量に含む。灰も多い
3 黒色土　少量の角礫、微量の焼土粒含む
4 黒褐色土　焼土粒・炭化物を含む
5 黒褐色土　焼土塊・灰を多く含む
6 黒褐色土　焼土粒を多く含む
7 暗褐色土　多量の焼土塊を含む。炭化物微量
8 暗赤褐色土　焼土塊を主体とする
9 暗褐色土　中型角礫を多く含む
10 暗褐色土　焼土粒を少量含む
11 黒褐色土　焼土粒を微量含む

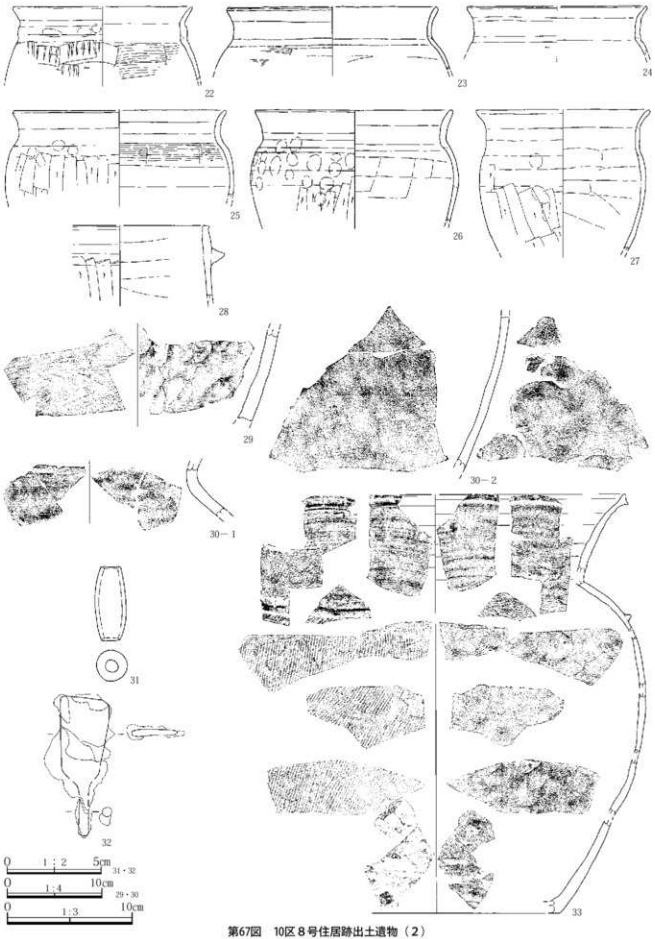




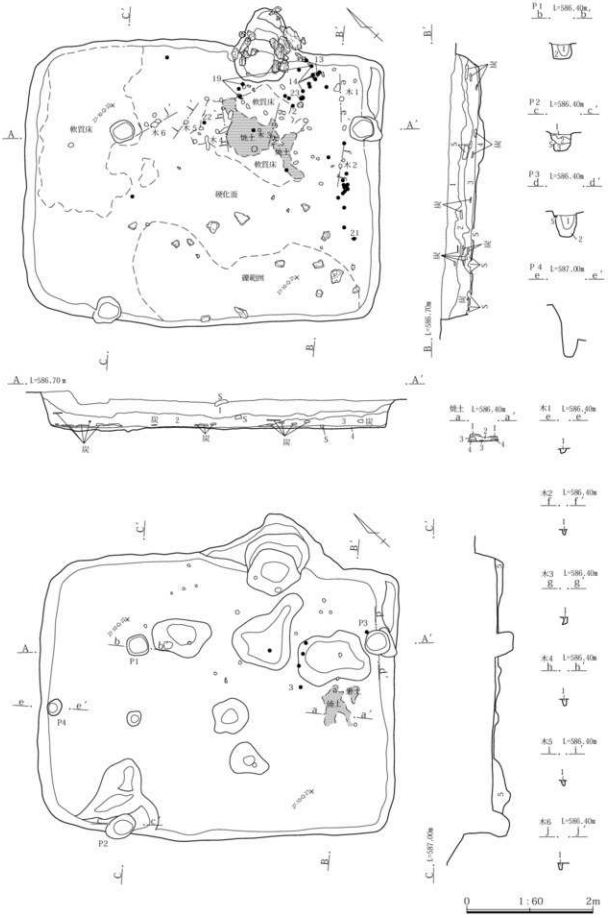
第65図　10区８号住居跡（３）



第66図　10区８号住居跡出土遺物（１）



第67図　10区８号住居跡出土遺物（２）



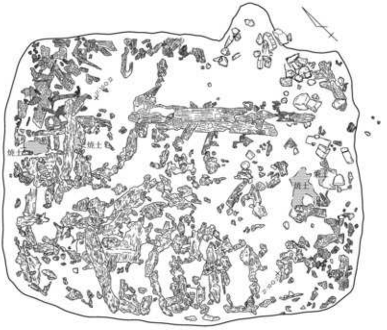
第68図　10区９号住居跡（１）

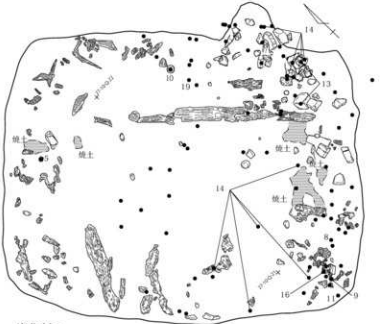
住居跡土層
1 黒褐色土　礫片･礫粒多量混｡炭化物少量含む
2 黒褐色土　礫片･礫粒少量混｡炭化物多く含む｡焼土粒少量含む
3 黒褐色土　炭化材･焼土塊を多量に含む｡締まり弱い
4 黒褐色土　炭化物少量含む｡焼土粒は点在する
5 暗褐色土　小型礫を多く含む｡床下埋土

焼土土層
1 明褐色土　焼土層｡締まり弱い
2 黒褐色土　焼土塊含む｡炭化物多く含む
3 黒褐色土　焼土粒･炭化物少量含む
4 炭化材

P1～P3土層
1 黒褐色土　礫片･礫粒微量混｡炭化物多く含む
2 暗褐色土　小型礫少量混
3 黒褐色土　炭化物微量含む

木痕土層
1 黒褐色土　礫片･礫粒少量混｡焼土粒多く含む

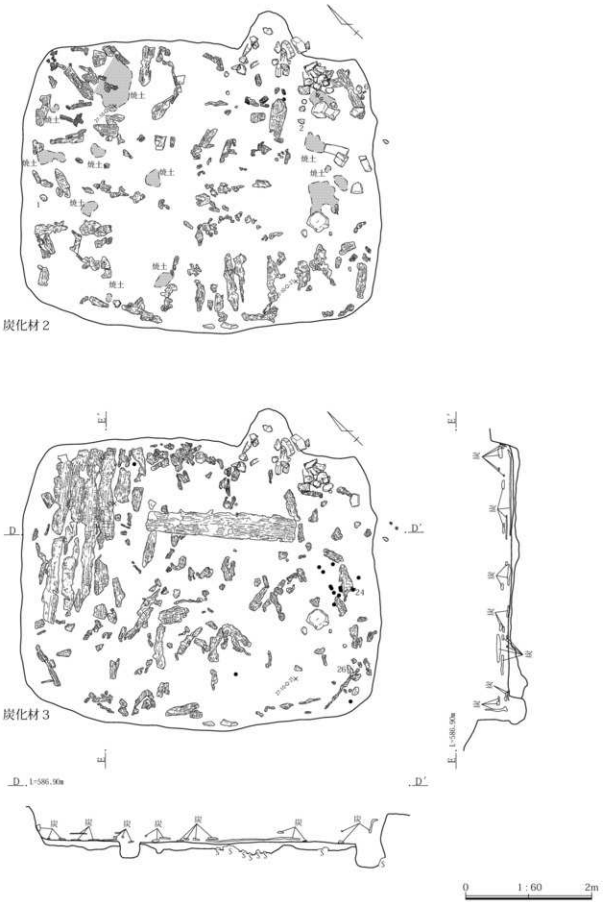




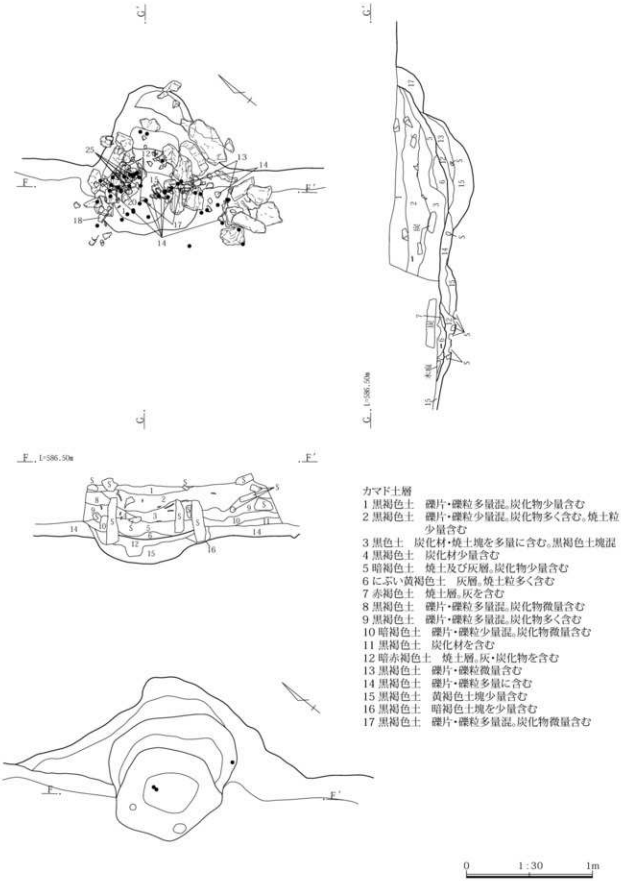
炭化材１

0　1:60　2m

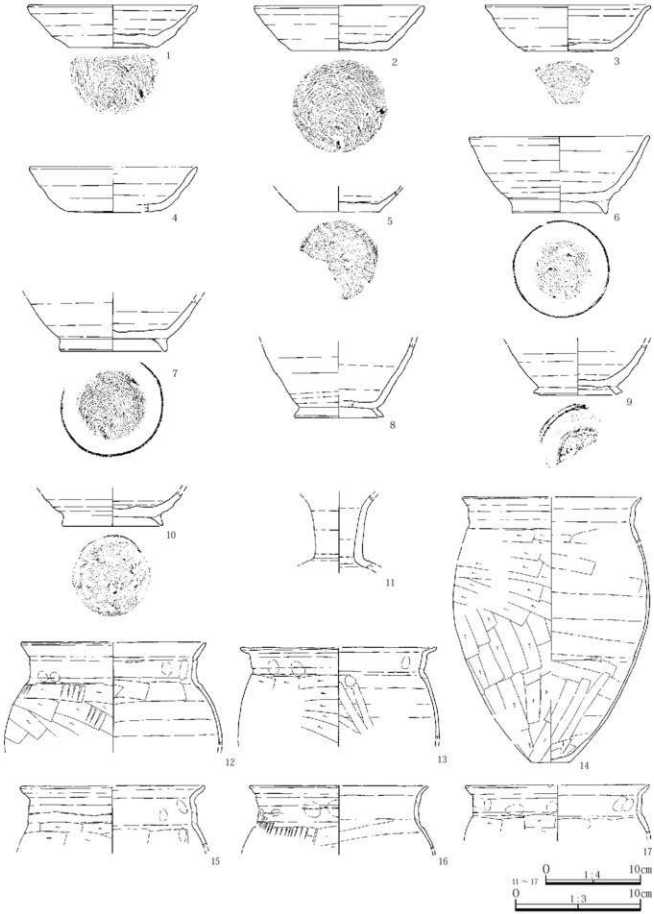
第69図　10区９号住居跡（２）



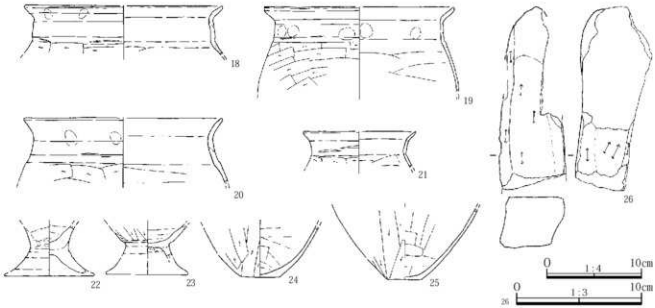
第70図　10区９号住居跡（３）



第71図　10区９号住居跡（４）



第72図　10区９号住居跡出土遺物（１）



第73図　10区９号住居跡出土遺物（２）

想定される。発掘調査及び自然科学分析では棚あるいは梁材としての用途を想定している。また西壁寄りは小型礫の混在が著しく、床面を硬く締める結果となっていた。

柱　穴：P1 ～ P3が規模・配置から柱穴と考えた。P1は径約33㎝、深さ24㎝、P2は径約34 ～ 48㎝、深さ28㎝、P3は径約39㎝、深さ41㎝を測る。また、床下調査で北壁際からP4が検出されており、これも柱穴として可能性が高い。径約25㎝前後、深さ28㎝程である。さらに床下調査では、P1とP2の間に小ピットを得ている。深さは浅く、屋根材を支える柱穴としての性格は充てられないが、「板の間」補助柱穴の可能性がある。

カマド：東壁南寄りに設けられる。全長約120㎝、焚き口幅約47㎝、煙道長約60㎝を測る。使用面には焼土・灰が顕著に堆積していた。天井部を構築する自然礫を見ないことから、粘質土による構築と考えられる。袖芯材として大型の自然石が用いられ、焚き口部両脇はしっかりとした袖石が出土している。なお土層断面に焚き口部北寄りに僅かな凹みを確認している。あるいは支脚坑の痕跡かもしれない。

床下土坑：床下調査では不整形で浅い土坑を数基調査した。土坑の性格は不明だが、カマド周辺に連続する特徴を有する。

遺　物：多量の出土遺物を見る。須恵器坏・埦類、土師器甕類が主であるが、床直遺物も多く、焼失原因が意図的な放火ではなく、失火によるものと類推できる。須恵器坏（72図１）はカマド内及び北壁際から、２はカマド西で床直、３は床下から出土している。須恵器埦（６）は床面南東隅から、８・９は南西隅、10はカマド北西部で、炭化材に混在して出土する状況を示していた。カマドからは土師器甕（12 ～ 15・17・73図25）がまとまる。砥石は被熱痕跡があり、南西隅で出土した。失火による焼失住居跡と想定すれば、一括性に富む遺物と捉えられよう。大方の土器は９世紀中頃から後半に時期が求められよう。

所　見：良好な焼失住居跡である。その中で「板の間」に相当する板材のまとまった出土は類を見ない。カマド西の南北を向く板材は、軟質な床面の状態から、作業台とも考えたが、柱穴間にも位置する様相から梁材や棚としても可能性は高い。

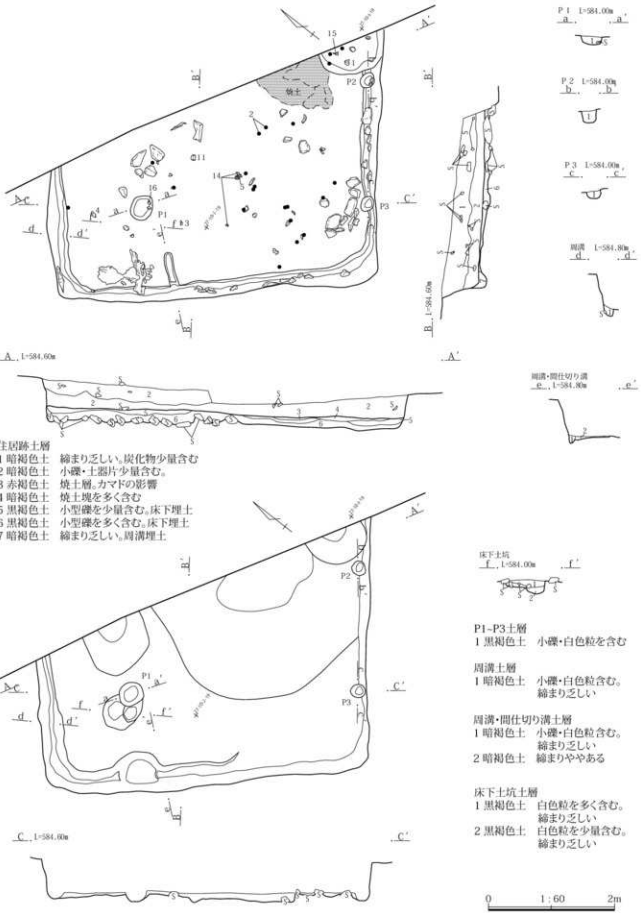
出土遺物も豊富で、一括性に富む良好な土器群と評価したい。住居の帰属時期は９世紀中葉～後葉の所産と考えて良いだろう。なお、出土炭化材の樹種同定は第４章で扱っている。参考にしていただきたい。

10区12号住居跡（第74 ～ 75図上/PL10）

調査年度：平成17年度

位　置：10区Ⅱ～Ｊ－18・19グリッド

経過等：10区調査区で縄文時代住居跡である11号住居跡を切る状態で調査された。遺跡を横断する現道のため北半を大きく破壊されていた。調査されたのは西壁と南壁及び北壁の一部である。主軸長を北東に向けた方形の住居跡である。規模は南北軸長で約5.2mを測るやや大型



住居跡土層
1 暗褐色土　締まりゞしい。炭化物少量含む
2 暗褐色土　小礫・土器片少量含む。
3 赤褐色土　焼土層。カマドの影響
4 暗褐色土　焼土塊を多く含む
5 黒褐色土　小型礫を少量含む。床下埋土
6 黒褐色土　小型礫を多く含む。床下埋土
7 暗褐色土　締まりゞしい。周溝埋土

P1-P3土層
1 黒褐色土　小礫・白色粒を含む

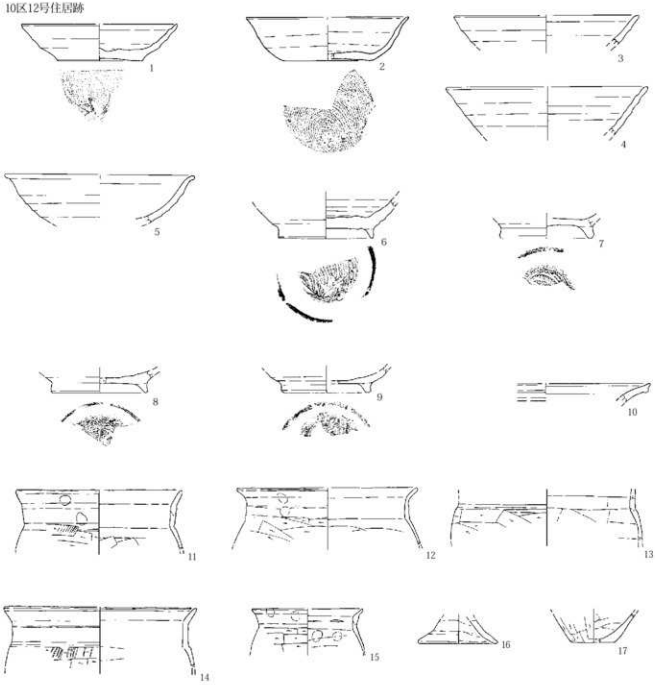
周溝土層
1 暗褐色土　小礫・白色粒含む。締まりゞしい

周溝・間仕切り溝土層
1 暗褐色土　小礫・白色粒含む。締まりゞしい
2 暗褐色土　締まりややある

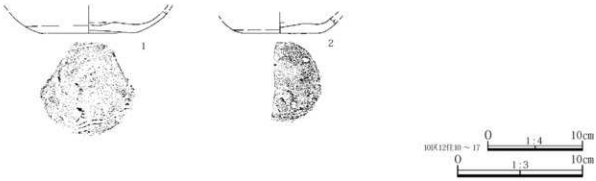
床下土坑土層
1 黒褐色土　白色粒を多く含む。締まりゞしい
2 黒褐色土　白色粒を少量含む。締まりゞしい

第74図　10区12号住居跡

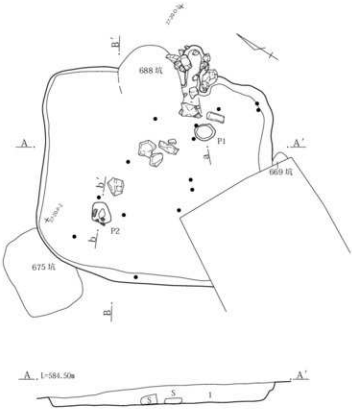
10区12号住居跡

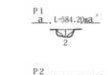


20区123号住居跡



第75図　10区12号・20区123号住居跡出土遺物

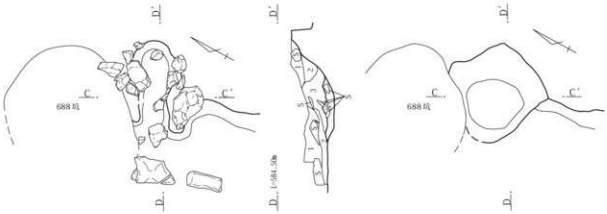




P1・P2土層
1 黒褐色土　焼土粒・炭化物含む
2 黒褐色土　粘性強い均質土

0　1:60　2m

住居跡土層
1 黒褐色土　小礫・角礫混。炭化物少量含む
2 暗褐色土　黄褐色土塊を主体とする
3 黒褐色土　粘性強い均質土



C, L=584.70m

カマド土層
1 黒褐色土　小礫・角礫混。炭化物・焼土粒少量含む
2 暗褐色土　小型の焼土塊を少量含む。やや締まり強い
3 黒褐色土　小型の焼土塊・炭化物を多く含む。しまりは弱い
4 暗褐色土　小礫を多く混じる。焼土粒を少量含む
5 赤褐色土　焼土塊主体。暗褐色土塊を含む
6 黒褐色土　焼土粒・炭化物を多く含む。締まり弱い
7 黒褐色土　小礫・炭化物を少量含む
8 黒褐色土　大型礫・小型の焼土塊を含む

0　1:30　1m

第76図　20区123号住居跡

の規模と推定された。深さは約66cmで遺存度は良好である。

本遺跡の平安時代住居跡の中で本住居跡の特徴の一つとして、壁周溝を付帯する特徴である。検出された壁下全てで周溝が確認されており、おそらく東壁にも延長するものと想定できた。さらに、西壁の一部からは間仕切り溝が突出していた。

重　複：11号住居跡を切る重複以外に、623・624号土坑が西壁で重なる。

床　面：北東側へやや傾斜する。小礫を混在する黒褐色土を貼り床土としていた。硬化面は顕著ではなかった。また、床面南東部に焼土の集中を見た。おそらく東壁に設けられたカマドの影響と判断できた。また、西壁際に炭化材の出土を見た。焼失住居跡であろう。

カマド：確認されなかったが、南東部の焼土の広がりが東壁カマドの存在を示唆する。

遺　物：埋土下位から床面にかけて比較的多くの出土遺物を得た。75図１の須恵器坏は貯蔵穴から、２は床面中央南東寄りに見る。15の小型甕口縁部破片も貯蔵穴出土である。土師器甕（14）は床面中央でまとまる。９世紀中葉～後葉の所産と捉えた。

所　見：北東半を逸失するが、壁周溝と間仕切り溝を持つ、掘り込みのしっかりした住居跡である。方形の輪郭が他の住居跡と比して明瞭で強い印象を得る。出土土器は他の住居跡と差は見られないが、住居跡本体はやや古手の様相と捉えた。

20区123号住居跡（第75図下・76図/PL10）

調査年度：平成18年度

位　置：20区0・P－1・2グリッド

経過等：観音堂区（20区）で調査された。観音堂区で検出された墓壙や石垣など一連の中・近世遺構の調査後に確認された。主軸長約3.4×南北軸長約3.6mを測るやや横長方形を呈す。深さは28cm程度でやや浅い。

重　複：688号土坑がカマド北側を切る。また675号土坑が北西隅で重複する。さらに南西隅を現代攪乱坑によって大きく破壊される。

床　面：北東に僅かに傾斜するが、ほぼ平坦面を築く。貼り床は確認されず、砂礫混じりの暗褐色土を地床としている。

柱　穴：P1・P2に柱穴の可能性を考えた。2基とも浅く確定性に乏しいが、配置から柱穴としたい。

カマド：東壁中央やや南寄りに設けられる。北側を688坑に切られるが、煙道・焚き口部、袖石が残存していた。規模は全長約90cm、焚き口幅約23cmとやや小型だが、煙道部は壁外に突出していた。

遺　物：埋土中より土器片が出土しているが、居住に伴う出土ではなく、廃棄時に伴う流入と思われる。小破片の例が多く、辛うじて須恵器坏底部破片２点(75図１・２）を図示した。

所　見：出土遺物が少なく、また住居跡規模や様相からも、帰属時期の確定材料には乏しい。９世紀代と考えておきたい。

２　10区　建物跡・掘立柱建物跡

ここでは、10区調査区の中央から南端で調査された建物跡３棟と掘立柱建物跡８棟を報告する。10区ではこの他に後述する観音堂区とした地点に２棟の掘立柱建物跡（９号・10号掘立柱建物跡）が調査されている。この２棟は「観音堂」に密接に関わる建物跡として、本項で述べる掘立柱建物跡とは別個のものとして、観音堂区の項目で述べることにする。

なお、建物跡と掘立柱建物跡の分別は調査段階に付されており、溝などの囲繞する施設を付帯する例を建物跡、柱穴・ピットのみで構成される施設を掘立柱建物跡とした。

10区１号建物跡（第78図/PL11）

調査年度：平成17年度

位　置：10区L～N－5・6グリッド

規　模：10区調査区南端で調査された。西側に溝を付帯する建物跡である。西側の溝は北北西に走行し、南端で緩やかに屈曲する形態を見せることから、何らかの囲繞意図が捉えられる。長軸長は約13mである。北側に小範囲ながら焼土の散布を見ることができる。

柱　穴：溝東側にピットが群集する。規則性を持たず、柱穴としての位置付けは不確定である。

遺　物：内耳土器片や縄文土器片などが混在して出土しているが、小片であり、１号建物跡として取り上げられた遺物は無い。

10区２号建物跡（第79図/PL11）

調査年度：平成17年度

位　置：10区M・N－7～9グリッド

規　模：１号建物跡北側で調査された、浅い土坑状の掘り込みを有する施設である。長軸方位を北北東に向け、長軸長約9.2m、短軸長約2.4mを測る。掘り込みの深さは約20cm程で皿状の断面形を呈し、壁の立ち上がりも緩やかである。平面形は不整楕円状を呈し、北東部で僅かに屈曲する。

重　複：３号建物跡を構成する埋土が２号建物跡上層に堆積する。３号建物を新しく判断する根拠の一つとなっている。

柱　穴：掘り込みの東西壁に沿って小ピットが東西に対応する形態で並ぶ。東西のピットの間隔は約1.8×2.0mで、北側の屈曲後の間隔は1.2m程である。幅狭の施設が想定されよう。ただ、各ピットの規模は統一性が無く、小ピットが主であることから、堅牢な建物は位置付けられない。

遺　物：本建物跡に帰属し得る出土状態は見られなかった。

10区３号建物跡（第80～82図/PL11）

調査年度：平成17年度

位　置：10区N・O－8・9グリッド

規　模：２号建物跡西側に接する。段差と自然石による囲繞施設（１号竪穴状遺構）が付帯する建物跡である。主軸方位を北北東に向け、軸長約4.4～4.5mの正方形を呈する。段差と自然石の囲繞は東側には設けられず、東側にある2号建物跡や１～４号掘立柱建物跡との開放性が窺われる。

重　複：東側で２号建物跡との重複を見る。１号石組が上層に乗るという調査所見がある。

柱　穴：段差と囲繞礫に近接して良好な柱穴を調査した。囲繞礫が柱穴上に被るが、おそらく建物跡廃棄後礫の崩落によるものと思われる。２×２間の８基の柱穴を得ている。四隅の規模は約3.5×3.4mで各柱穴間の距離も約1.6～1.8m程で規則性に富む配置である。

遺　物：２点の内耳鍋の破片を図示しているが、調査においては１～３号建物跡を包括して遺物を挙げている。概ね、３号建物跡を中心とした出土であり、青磁碗、内耳鍋などの土器片類の他、茶臼片、銭貨の出土を見る（81・82図）。生活什器類に偏りが見られ、居住に伴う施設と位置付けられよう。その中で、青磁片(81図１)や茶臼(２)の出土は特筆されよう。なお、茶臼は１号やっくら出土の破片と接合しており、本建物跡に帰属させた。

所　見：１～３号建物跡は各々時間幅が予想される施設ではあるが、中世に比定される施設として位置付けられよう。その中で、３号建物跡は柱穴配置、出土遺物の集中から、居住あるいは積極的な活動痕跡の所産としての位置付けができる。３号建物跡は、段差と囲繞礫、良好な柱穴配置から、良好な中世の竪穴状施設として評価したい。

反面、１号建物跡と２号建物跡は柱穴配置を以てしても、建物跡としての確証を持てない。３号建物跡や後述する１～４号掘立柱建物跡に付帯する何らかの施設が想定できるが、建物跡という遺構正確には相応しくない。本書では、発掘調査された遺構と調査所見を重視し、報告に至ったが、今後検討を要する。

10区１号掘立柱建物跡（第83図/PL12）

調査年度：平成17年度

位　置：10区L・M－7～9グリッド

規　模：主軸方位を北北東に向けた１×４間の掘立柱建物跡である。１～４号掘立柱建物跡が重なるが、最も小規模な掘立柱建物跡である。規模は約9.4×4.8mで、やや歪な長方形を呈する。

重　複：２～３号掘立柱建物跡が重なる。

柱　穴：10基の小ピットからなる。東西辺に配されたピットは各々対応する配置だが、P1とP2の間が4.9m、北端のP6とP7の間が4.5mと差がありそのため全体に歪な長方形となっている。深さは18～48cmと幅があり、統一性は無い。

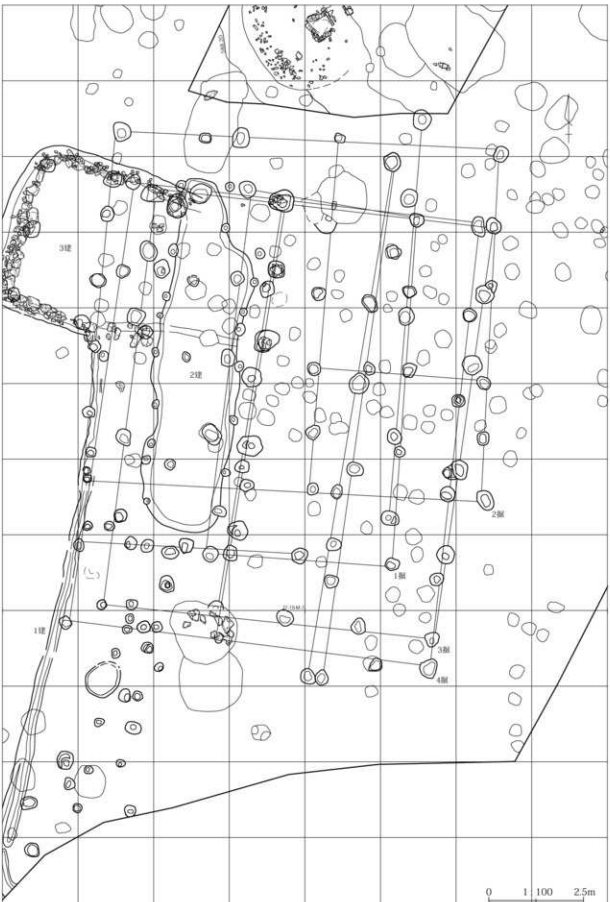
遺　物：P9より小片ながら内耳鍋底部破片（83図１)が出土している。

10区２号掘立柱建物跡（第84・85図/PL12）

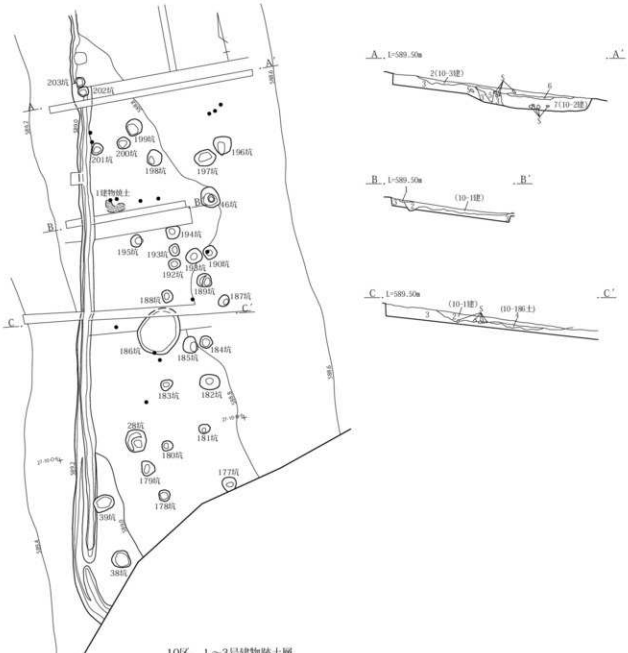
調査年度：平成17年度

位　置：10区K～N－7～10グリッド

規　模：主軸方位を北に向ける大型の掘立柱建物跡である。規模は約10.9×10.4mである。１～４号建物跡の重



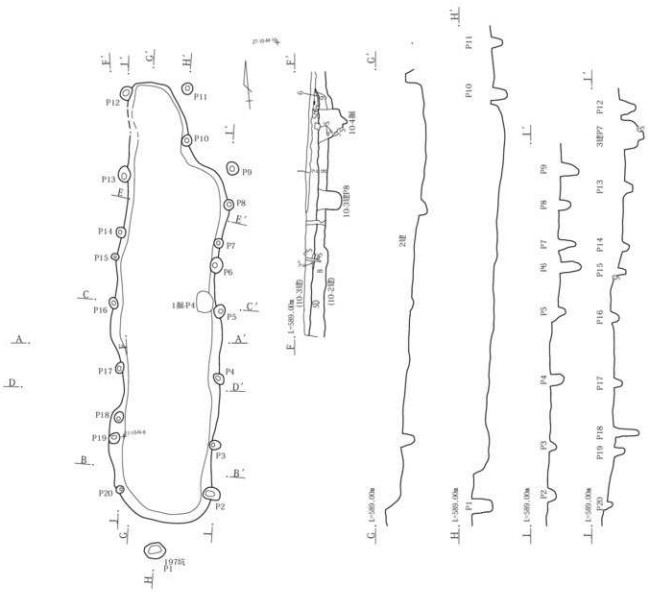
第77図　10区１～３号建物跡・１～４号掘立柱建物跡配置図

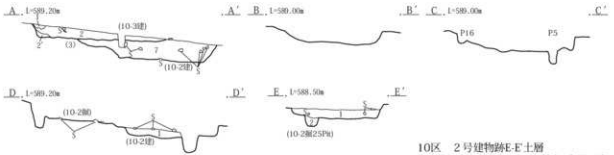


10区　１～3号建物跡土層
１黒褐色土　２層よりもややゆるまりあり、白色軽石が多く含まれ不均質
２黒褐色土　やや粘性強く、炭化物を３％程度全体に含んでいる
２'黒褐色土　地山砂礫層を30％程度不均質に含む
２"黒褐色土　２層のうち特に締まり強く均質
３黄褐色土　やや締まり弱い地山砂礫層。３～５cm大の礫を５％含む
３'黄褐色土　地山の崩落土を主体とする
４黒褐色土　全体に炭化物（１cm大）が多く、締まり弱い。３～５cm大の礫が20％程度入る
５黒褐色土　均質な粘質土。礫を含まない
６にぶい黄褐色土　地山ブロックを水平に含む不均質土。炭化粒を３％程度含む
７黒褐色土　やや締まり欠き、粘性ある不均質土。炭化粒、３～５cm大の亜角礫を疎らに含む
８黒褐色土　７層に比べ黄褐色ブロックを部分的に10％程度不均質に含む
９黒褐色土　５～10cm大の礫を含み、８層に比べて締まり強い
ａ黒褐色土　やや粘性強く、３～10cm大の地山礫を50％程度含み締まり欠き不均質（石積みの裏込）

0　1:80　2m

第78図　10区１号建物跡



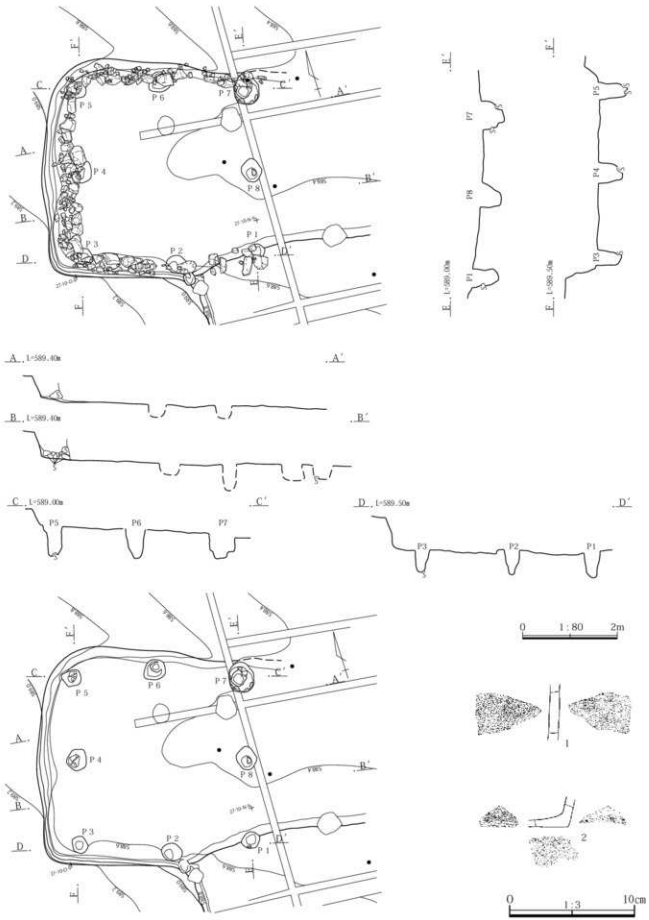


10区　２号建物跡D-D'土層
１褐色土　大型礫・黒褐色土塊を多く含む

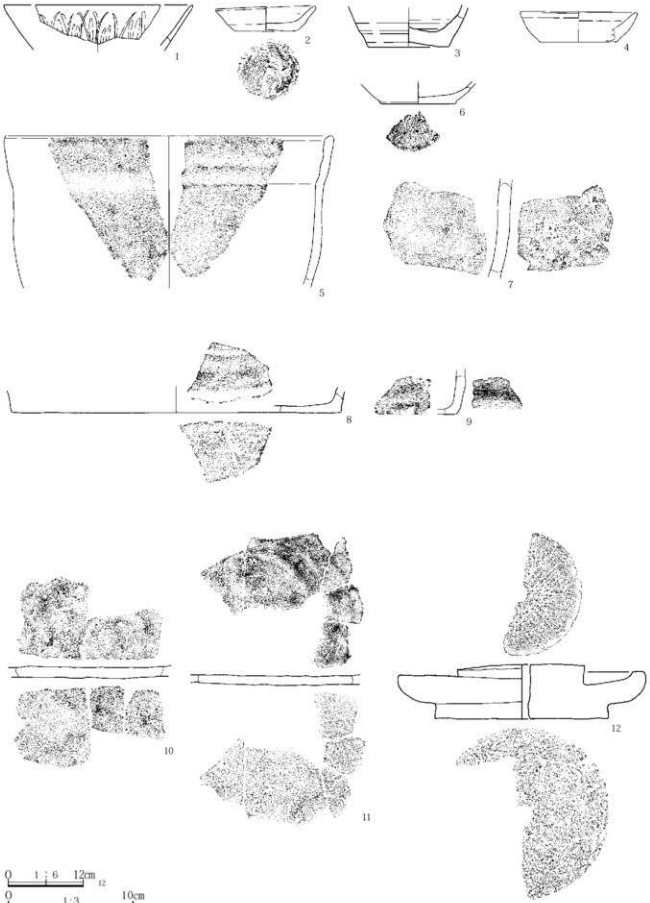
10区　２号建物跡E-E'土層
1黒褐色土　粘性ある不均質土、少量の炭化粒、亜角礫を含む
2褐色土　褐色土塊・炭化物を含む

0　1:80　2m

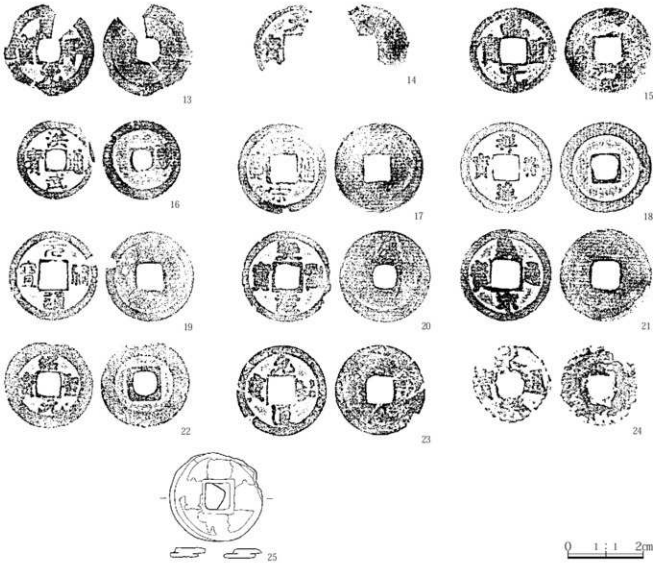
第79図　10区２号建物跡



第80図　10区３号建物跡・出土遺物



第81図　10区１～３号建物跡出土遺物（１）



第82図　10区１～３号建物跡出土遺物（２）

なりで西に偏る配置を見せる。

重　複：１～３号建物跡、１・３・４号掘立柱建物跡と重複する。

柱　穴：35基の小ピットからなる。配置から東西２群の区画が想定され、西区画の南には３基のピット（P27～29）が庇状に張り出す配置を見せる。東区画はやや長方形の形態で、中位に１列のピット列が並ぶ。ピット列南北端は掘立柱建物跡外郭から突出し棟持ち柱状の在り方を示す。

遺　物：P10埋土から内耳鍋口縁部破片（85図１が出土している。

10区３号掘立柱建物跡（第86・87図/PL12）

調査年度：平成17年度

位　置：10区K～N－6～9グリッド

規　模：北北東に主軸方位を向ける。平面規模は約11.1×9.1m測る、大型の長方形を呈する掘立柱建物跡である。

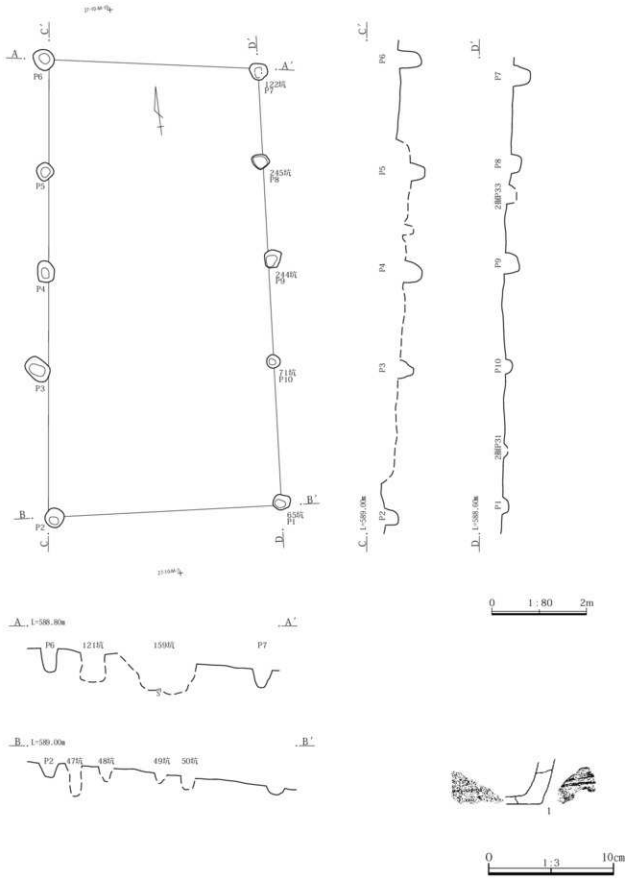
重　複：１～３号建物跡、１・２・４号掘立柱建物跡と重なる。

柱　穴：31基の小ピットからなる。配置から東西に区画され、西区画は２号掘立柱建物跡に比してやや小規模である。東区画は２号掘立柱建物跡と同様に、中位にピット列があり棟持ち状のピットが突出する平面配置である。P9～P11は底面に礫を置くが地業石の可能性もある。

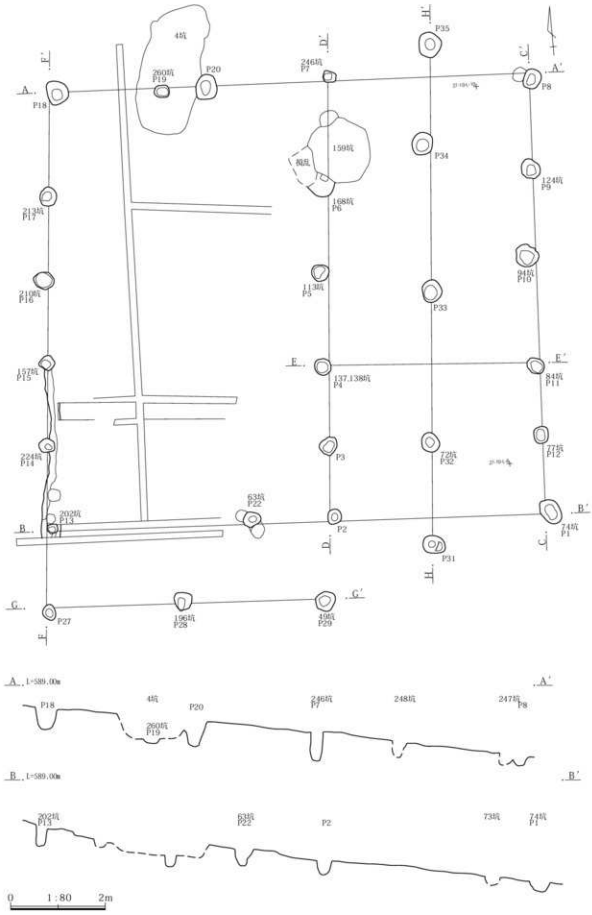
遺　物：P9・11・20より内耳鍋破片（87図１～３）が出土している。

10区４号掘立柱建物跡（第88・89図/PL12）

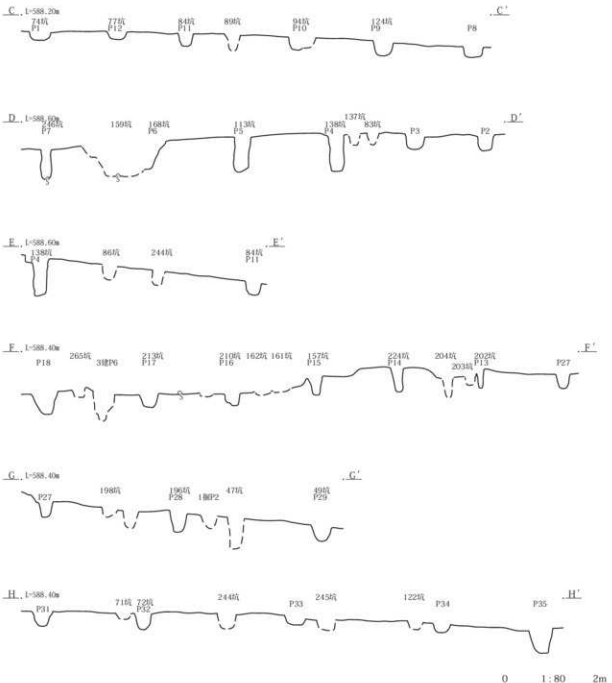
調査年度：平成17年度



第83図　10区１号掘立柱建物跡・出土遺物

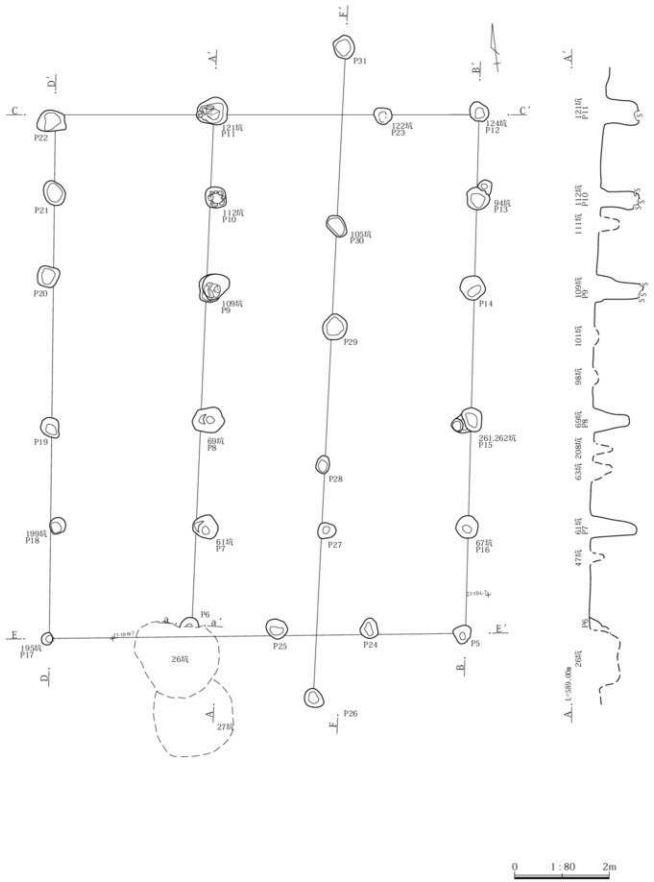


第84図　10区２号掘立柱建物跡（１）

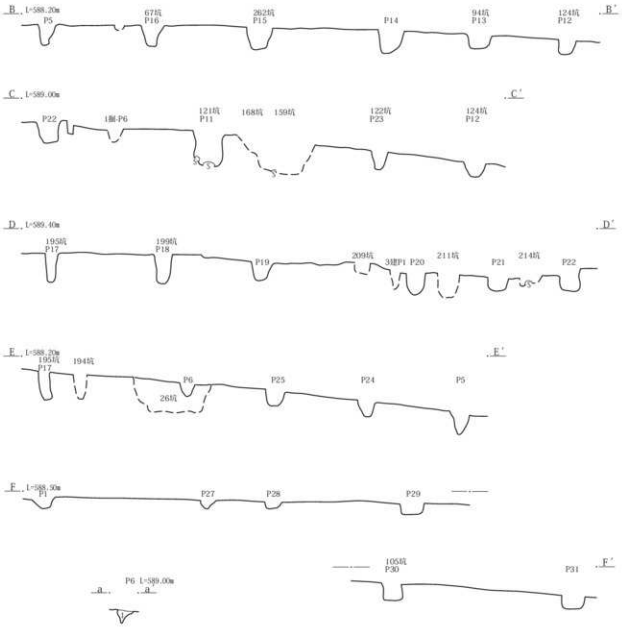


0 1:3 10cm

第85図　10区２号掘立柱建物跡（２）・出土遺物

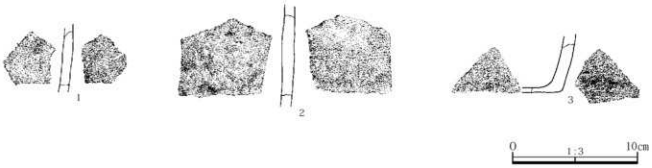


第86図　10区３号掘立柱建物跡（１）

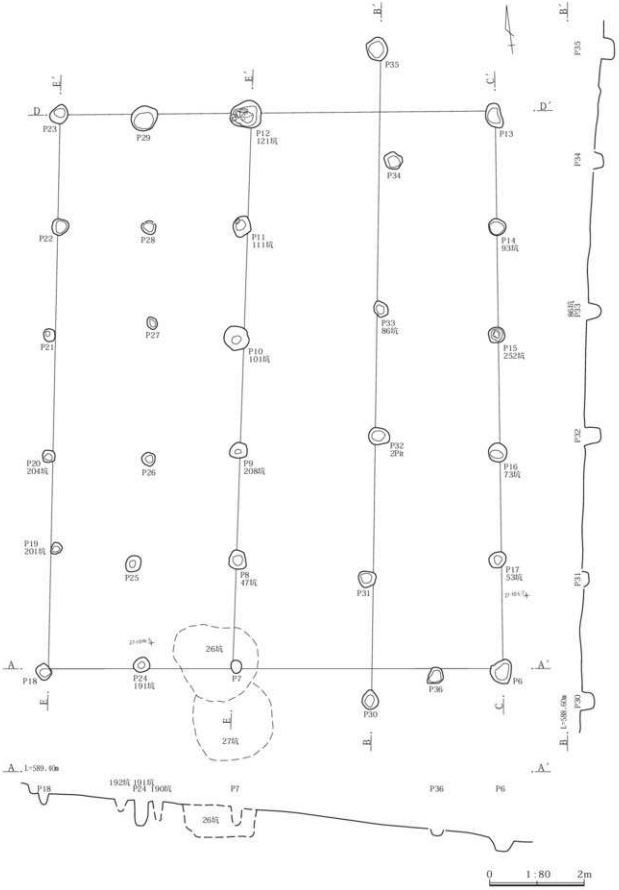


10区　３掘立P6土層
1 黒褐色土　小礫を少量含む。締まり弱い

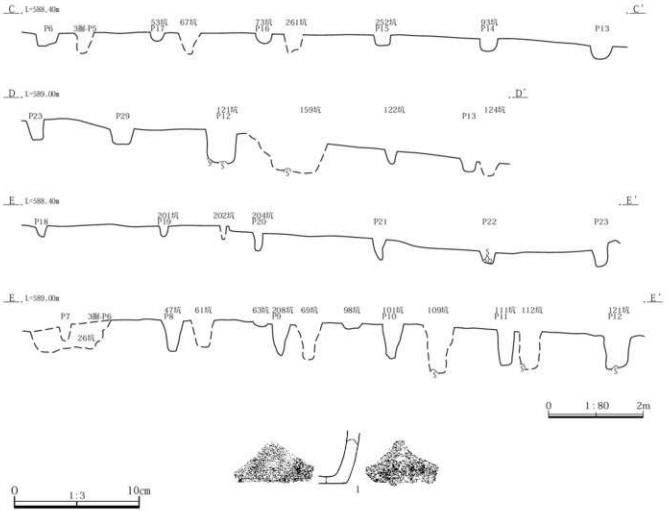
0　1:80　2m



第87図　10区３号掘立柱建物跡（２）・出土遺物



第88図　10区４号掘立柱建物跡（１）



第89図　10区４号掘立柱建物跡（２）・出土遺物

位　置：10区K～N－6～9グリッド

規　模：大型の掘立柱建物跡で約11.9×9.2mを測る長方形を平面形とする。３号掘立柱建物跡とほぼ重なる位置にあるが、本掘立柱建物跡はやや西にずれる。

重　複：１～３号建物跡、１～３号掘立柱建物跡と重なる。また、本掘立柱建物跡のP12は３号掘立柱建物跡のP11と同一とする。その意味でも３号・４号掘立柱建物跡の関連性は深いものと考えられよう。

柱　穴：35基の小ピットからなる。２号・３号掘立柱建物跡と同様に東西の区画に分かれ、東側には棟持ち状ピットが配されている。

遺　物:P16より内耳鍋底部破片(89図1)が出土している。

所　見：１～３号建物跡と１～４号掘立柱建物跡は10区中央から南端にかけての中世施設群と捉えられよう。各遺構の重複が著しくそのため、新旧関係や個々の施設の性格など不明な点がある。その中で３号建物跡は、段差と囲繞礫によって画された堅牢な建物として位置付けられよう。

発掘調査では、確認面の新旧で各建物跡の新旧を推定されており、詳細な所見を加えている。整理作業においては大変参考になったが、確認面は生活面ではないので、厳密な新旧にはなり得ないと考え、本項では敢えて各遺構の新旧関係は述べていない。

調査段階の新旧は、

④10－1石組

③10－３建物／ 10－1掘立

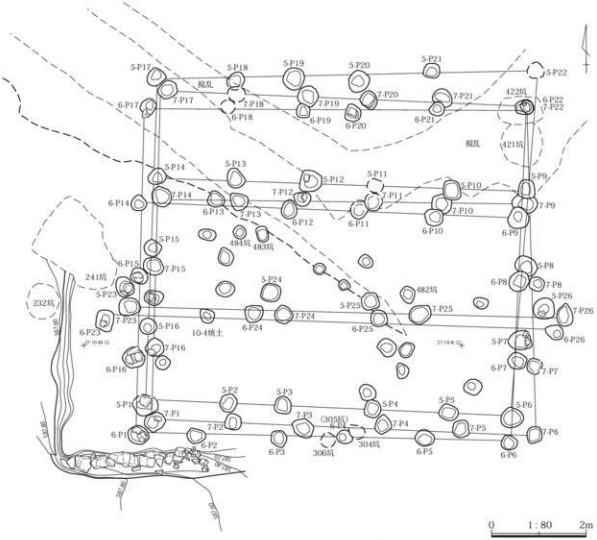
②10－２建物＋10－２掘立

①10－３掘立・10－４掘立 古

とされている。建物跡と掘立柱建物跡の変遷を捉える上で参考にしていただきたい。

10区５～７号掘立柱建物跡（第90～93図/PL12）

５～７号掘立柱建物跡は、１～３号建物跡・１～４号建物跡の北側で調査された掘立柱建物跡群である。掘立



第90図　10区５～７号掘立柱建物跡

柱建物跡３棟の重複で、ほぼ同一規模である。また西南隅に平成12年度に調査された１号竪穴状遺構（３号土坑）があり、おそらく掘立柱建物跡群に付帯する施設として位置付けられよう。同一規模でもあるため、一括して記載する。

調査年度：平成12年度・17年度

位　置：Ｊ～Ｍ－11～13グリッド

規　模：５号掘立柱建物跡　7.3×6.9m

　　６号掘立柱建物跡　7.8×7.0m

　　７号掘立柱建物跡　8.1×7.1m

いずれも、東西に主軸を持ち、長方形の平面形を呈す。南半と北半に分かれ、南半の建物に棟持ち柱を持たせる。整然とした例は６号掘立柱建物跡が良好である。

重　複：241号土坑、421号土坑などと重複する。4号焼土を見るが、本建物跡に伴う例ではない。

柱　穴：各々26基からなる。比較的浅いピットで構成される。

遺　物：本掘立柱建物跡群に伴う遺物は見られなかった。なお、南西隅に付帯する1号竪穴状遺構からは内耳鍋破片２点（97図上）の出土を見る。

所　見：おそらく中世に比定される掘立柱建物跡と考えられる。３号建物跡などと近接し、主軸方位も近く、二つの中世施設群は同時併存していた可能性もある。

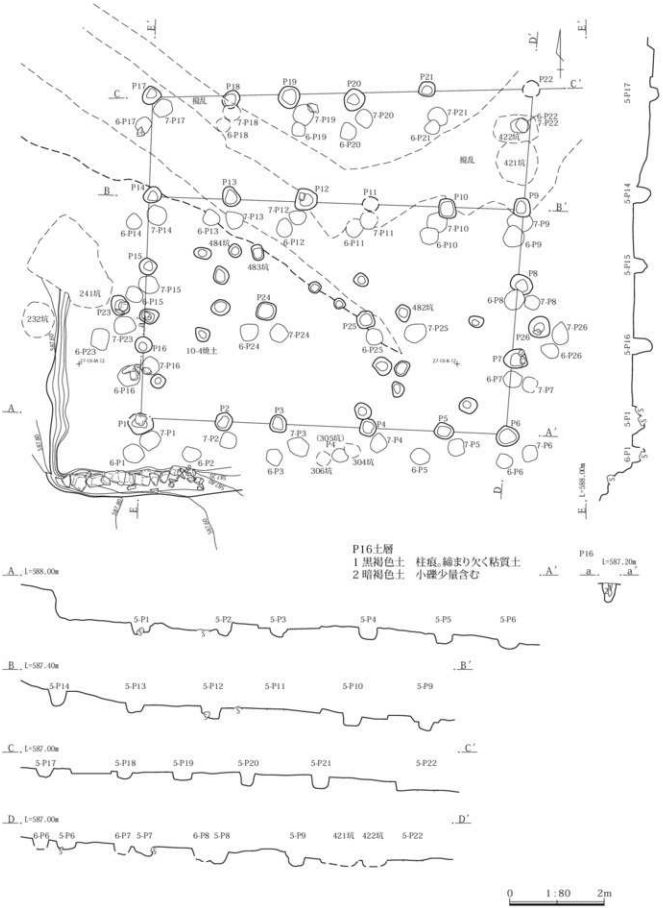
横壁中村遺跡における中世遺構の濃密さを裏付ける資料となろう。

10区８号掘立柱建物跡（第94図/PL13）

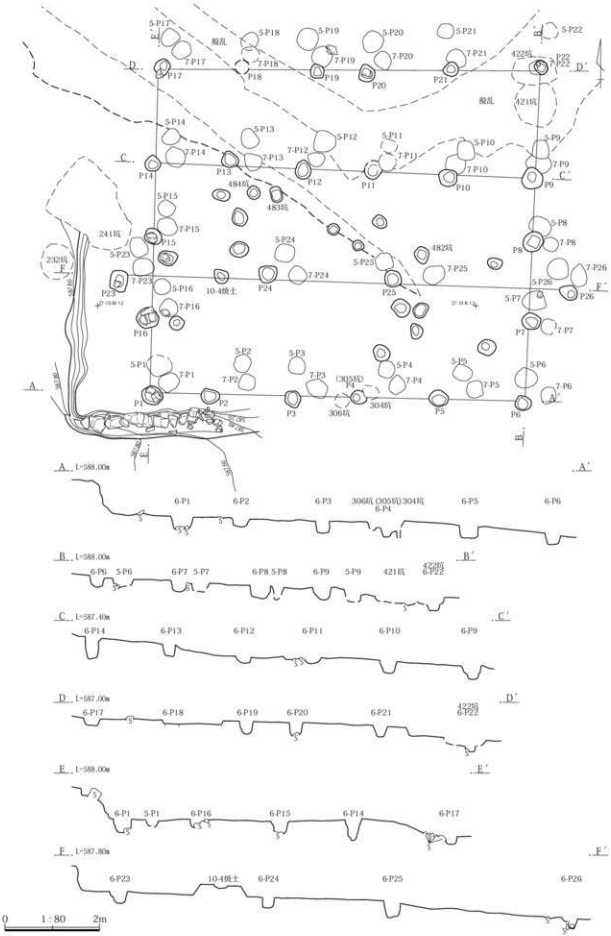
調査年度：平成17年度

位　置：10区L・M－16・18グリッド

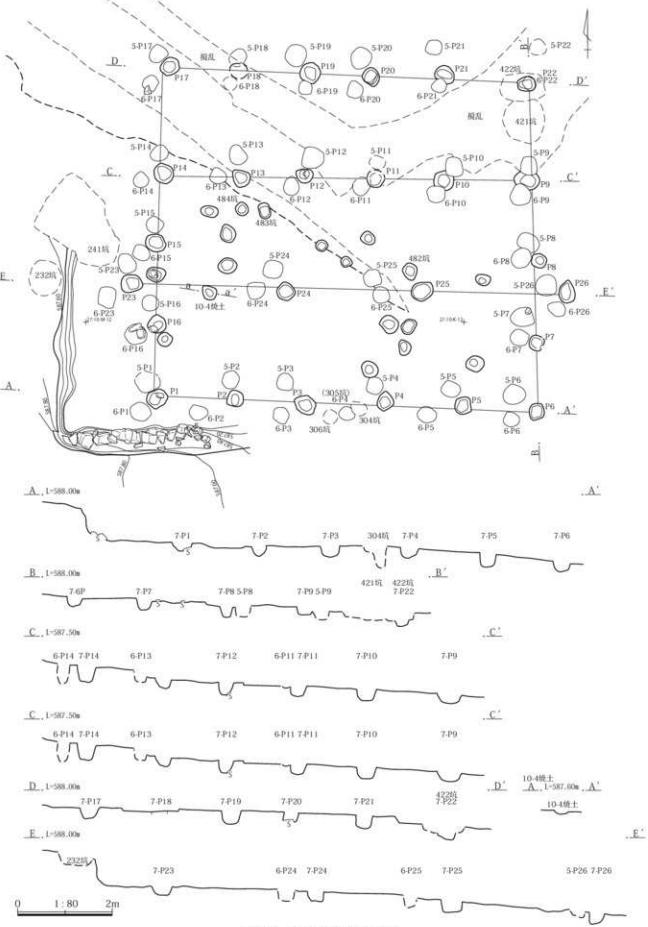
規　模：東西に長軸を持つ長方形を平面形とし、6.3×4.1mを測る。北側に3.2×2.3mの張出し施設を付帯する。主体となる建物跡は整然とした形態である。



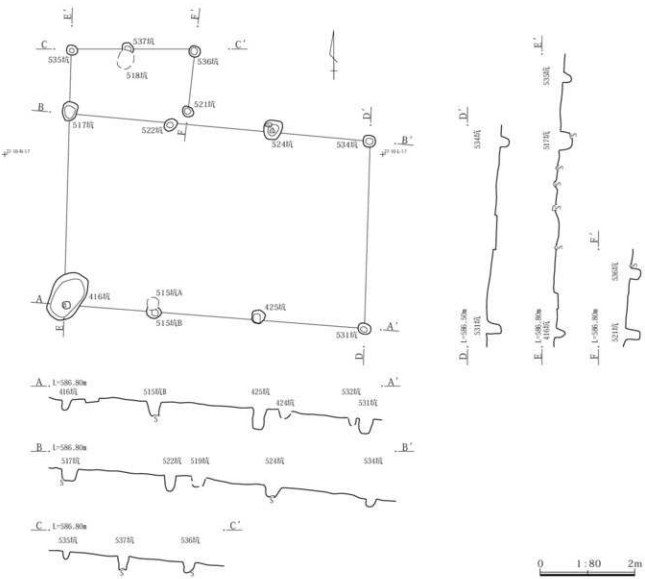
第91図　10区５号掘立柱建物跡



第92図　10区６号掘立柱建物跡



第93図　10区７号掘立柱建物跡



第94図　10区８号掘立柱建物跡

重　複：南西隅に416号土坑が重複する。土坑底面に小ピットがあり、これが本掘立柱建物跡の南西隅の柱穴痕跡と判断した。

柱　穴：11基の小ピットからなる。南北辺長に４基ずつ配される１×３間の小規模な施設である。また北西隅の張出し状の施設はやや軸がずれ、ピットも小規模なため簡素な造りが想定されよう。

遺　物：出土していない。

所　見：時期は不明である。あるいは近世の所産か。

３　石組・竪穴状遺構

ここでは、前述の３号建物跡と５～７号掘立柱建物跡に関連あるいは付帯する石組施設を報告する。

10区１号石組（第95図上/PL14）

調査年度：平成17年度

位　置：10区N・0－8～10グリッド

規　模：主軸方位を北北東に向ける長方形を平面形とする。規模は約4.6×2.5m、深さ約60cmを測る。底面近くに小範囲ながら炭化物の集中が見られた。

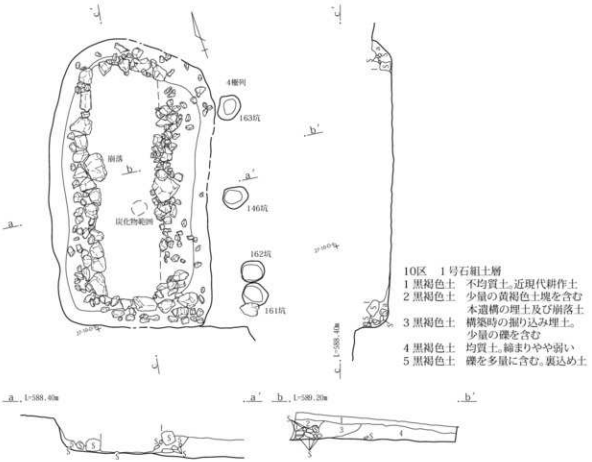
重　複：３号建物跡と重なる。西側の石組みは３号建物跡西辺の石組を再利用したものとの調査所見がある。

遺　物：本遺構に帰属する出土遺物は見られなかった。

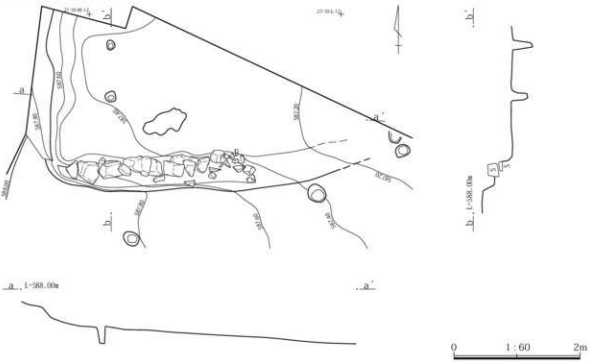
所　見：３号建物跡などとの新旧では、本遺構が最も新しいとの調査所見がある。３号建物西側の自然礫との一致は、本遺構の再利用とする判断である。

10区１号竪穴状遺構（３号土坑）（第95図下/PL13）

10区1号石組

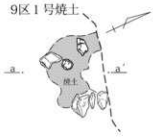


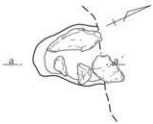
10区1号竪穴状遺構



第95図　10区１号石組・１号竪穴状遺構（３号坑）

9区１号焼土

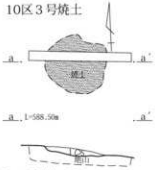




９区　１号焼土土層
１赤褐色土　焼土層。灰・炭化物を含む
２黒褐色土　焼土粒多く含む。炭化物微量含む
３黒褐色土　焼土粒少量含む

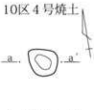
10区２号焼土

10区３号焼土



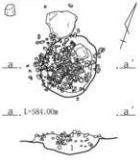
10区　３号焼土土層
１黒褐色土　焼土粒・炭化物少量含む

10区４号焼土



10区　４号焼土土層
１暗褐色土　焼土粒を含む

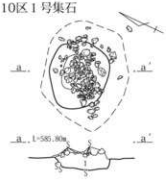
9区１号集石



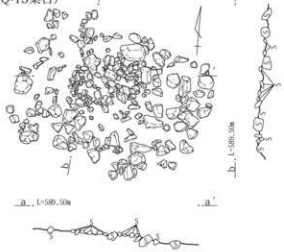
9区　１号集石土層
１黒褐色土　小礫を集中する。炭化物を含む

10区　１号集石土層
１黒褐色土　上層に小礫を集中する。黄色粒多い

10区１号集石



10区２号集石
(Q-13集石)

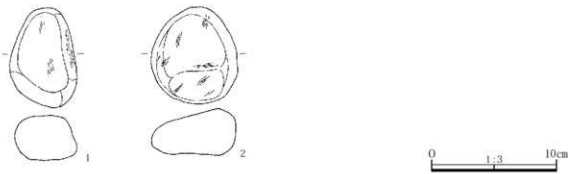


0　1:40　1m

第96図　９・10区焼土・集石

10区１号竪穴

9区１号焼土



第97図　10区１号竪穴状遺構・９区１号焼土出土遺物

バンザマスト（気象用観測マスト）建設に伴い平成12年度に調査された。調査時は３号土坑として記録化したが、後の整理作業で、１号竪穴状遺構と名称を変更している。

調査年度：平成12年度・平成17年度

位　置：10区L・M－11・12グリッド

規　模：現存規模で約4.8×2.9㎝、深さ56㎝を測る。北側と西側を開放する段差と石組遺構からなる。段差・石組みが向く方位は５～７号掘立柱建物跡と近く、掘立柱建物跡に付帯する施設と考える。

重　複：顕著な重複遺構は無い。

遺　物：埋土中より内耳鍋破片（97図上）が出土する。

所　見：５～７号掘立柱建物跡との深い関連から、土坑としての報告ではなく、竪穴状遺構として位置付け、掘立柱建物跡群の南西隅を画する施設と捉えた。５～７号掘立柱建物跡南西隅を画する施設と捉えたい。時期は中世であろう。

4　焼土・集石遺構（第96・97図/PL14・20）

焼土遺構に関しては、既に10区１号焼土を弥生時代の所産として前章で報告している。ここでは、縄文・弥生時代以降と思われ、時期不明の焼土・集石遺構をまとめて報告する。出土遺物も殆どなく、時期の判別に苦慮した遺構である。そのため、あるいは縄文時代の所産とも捉えられる遺構も混在する。ご容赦願いたい。

9区１号焼土

調査年度：平成17年度

位　置：９区T－18グリッド

規　模：約（70）×65㎝、深さ25㎝を測る不整楕円状と思われる平面形を示す。断面形は浅い皿状を呈する。北側を現道で破壊される。

重　複：重複遺構は無い。

遺　物：磨石２点を見るが、縄文時代の所産ではなく、磨滅痕も金属製品が対象と思われる強いものである。

所　見：時期は不明であるが、中世～近世の所産と考える。

10区２号焼土

調査年度：平成17年度

位　置：10区M－9グリッド

規　模：10区１～４号掘立柱建物跡内で調査されているが、掘立柱建物跡に伴わない遺構と判断している。約43×33㎝を測る不整円形の平面形を呈す。掘り込みは無く焼土の広がりを見るのみである。

重　複：重複遺構は無い。

遺　物：出土遺物は見られない。

所　見：出土遺物は無いが、中世施設群の中にあること

から、中世～近世の所産としたい。

10区３号焼土

調査年度：平成17年度

位　置：10区L－9グリッド

規　模：２号焼土と同様に、10区１～４号掘立柱建物跡内で見られた。調査当初は、４号住居跡に伴う焼土と捉えられていたが、住居跡ではなく４号住居跡は欠番となった。そのため、焼土単独の報告となる。規模は約65×62cm、深さ11cmを測り、不整円形を平面形とし、断面系は浅い皿状である。

重　複：重複遺構は無い。

遺　物：出土遺物は見られなかった。

所　見：２号焼土と同様に中世～近世の所産か。

10区４号焼土

調査年度：平成17年度

位　置：10区L－10グリッド

規　模：平面規模は、30×35cmで不整楕円形を示す。深さは約11cmと浅い。焼土粒の散布は極めて薄く、面としては捉えきれなかった。

重　複：５～７号掘立柱建物跡内で検出したが、単独の検出である。

遺　物：出土遺物は無い。

所　見：５～７号掘立柱建物跡に伴う焼土の可能性を探ったが、出土遺物も無く、別個の遺構と判断した。中世～近世の所産か。

９区１号集石

調査年度：平成17年度

位　置：９区U－16グリッド

規　模：９区調査区の北西側で調査した。不整楕円形の平面形を呈し、平面規模は約66×56cmで、深さは26cmを測る。

重　複：単独の検出である。

遺　物:上層から中層にかけて、小型の角礫が集中する。礫は被熱の痕跡は見出せなかった。炭化物を含む黒褐色土を埋土とする。出土土器は細片で縄文土器片を見る

所　見：９区調査区には主たる縄文時代遺構が見られないため、出土遺物に縄文土器を見ても、時期を特定できなかった。ただし、時期は不明であり縄文時代とする可能性もある。

10区１号集石

調査年度：平成17年度

位　置：10区L・M－19グリッド

規　模：10区調査区北側で調査された。平面形は不整円形を呈し、径約120×94cmで、深さは23cmを測る。

重　複：縄文時代後期住居跡である10号住居跡西側と重複する。新旧は判然としないが、10号住が本集石を破壊していないことから、10号住より新しいものと判断した。

遺　物：出土遺物は埋土上層の小礫以外には無い。礫は被熱の痕跡も少ない。

所　見：時期は不明であり、確定性に乏しい。ここでは縄文時代後期以降の所産としたい。

10区２号集石（Q-13集石）

調査年度：平成17年度

位　置：10区Q－12・13グリッド

規　模：10区調査区南西側で平安時代住居跡である５号住居跡の南東約５mに位置する。平面形は長軸を西北西にもつ長方形で、規模は約210×180cmである。掘り込みを持たない。

重　複：重複する遺構は無い。

遺　物：出土遺物として小礫以外は見られなかった。礫の被熱痕跡も認められない。

所　見：集石は外縁を大型礫、中心部分に小型礫が配される。時期・性格は不明だが、外縁を大型礫で囲む様相は特徴的である。出土土器も無く、礫の中に多孔石や石皿などが見られないため、縄文時代の配石・集石とは位置付けていない。

５　柵列・溝（第98・99図/PL13）

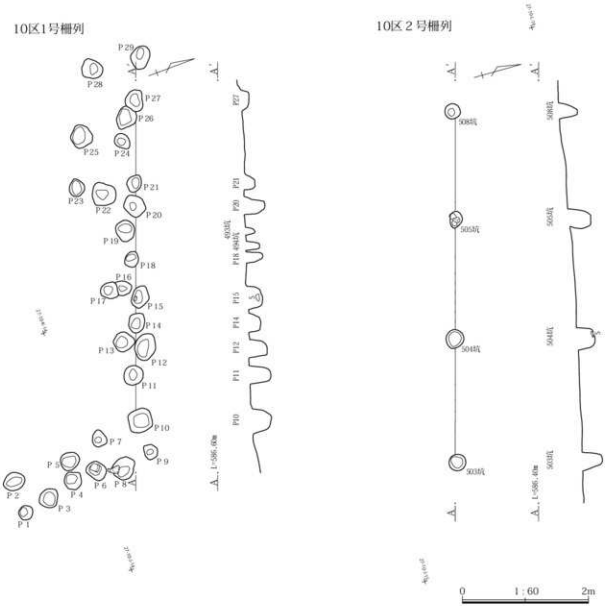
10区１号柵列

調査年度：平成17年度

位　置：10区J・K－13・14グリッド

規　模：調査区中央やや東寄りで調査した。走行は西北西に向き、約8.6mの間に29基のピットが群在する。

重　複：遺構の重複はない。しかしながら、１号石垣が



第98図　10区１・２号柵列

北に近接して平行する。また２号溝は南に、さらに２号柵列も北約２ｍで走行を同じにして検出されている。

遺　物：出土遺物は見られない。

所　見：周辺には走行を同様にする石垣・溝・柵列が併存する様相である。おそらく本柵列も周辺遺構と同様の時期と思われ、近世の所産と考えたい。

10区２号柵列

調査年度：平成17年度

位　置：10区J・K―15グリッド

規　模：1号柵列と同様に走行を西北西に向ける。規模は約5.8mの間に４基の柱穴が並ぶ。調査における503～505･508土坑からなる。柱穴間の距離は、約1.8mで、ほぼ等間隔といえよう。柱穴の規模も径20～30cm、深さ30～60cmの間に収まる。

重　複：重複遺構は無いが、１号柵列と１号石垣を挟んで平行する。無論２号溝も南にやや離れて平行した走行を見せる。

遺　物：出土遺物は無い。

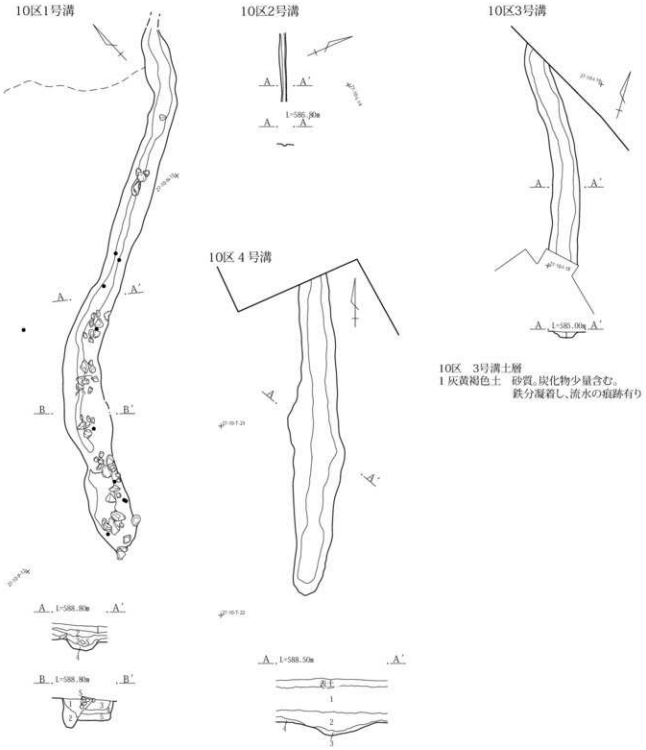
所　見：１号柵列と同様に近世の所産として位置付けられよう。

10区１号溝

調査年度：平成17年度

位　置：10区M～0―11～13グリッド

規　模：10区調査区ほぼ中央で調査した。南から北への



10区　3号溝土層
1 灰黄褐色土　砂質。炭化物少量含む。
　　鉄分凝着し、流水の痕跡有り

10区　1号溝土層
1 黒褐色土　表土　小礫・褐色土粒混。耕作土
2 黒褐色土　小礫、褐色土粒混。やや砂質
3 黒色土　礫粒混。やや粗い
4 黒褐色土　褐色土粒混
5 褐色土　褐色土塊主体。地山近似

10区　4号溝土層
1 黒褐色土　表土　小礫・褐色土粒混。耕作土
2 黒褐色土　小礫、褐色土粒混。やや砂質
3 暗褐色土　小礫粒多く含む。
4 黒褐色土　やや砂質。小型礫・褐色土塊混

0　1:80　2m

第99図　１～４号溝

急斜面地形にあって、地形に沿って北東へ流れる走行を示していた。緩やかな湾曲を見せる平面形である。調査区中央の土地改良による段差によって、途切れる。全長約1090㎝、幅約100㎝、深さ約60㎝を測る。

重　複：主な遺構との重複は無い。

遺　物：縄文土器片などの出土を見るが、本遺構に伴う例ではない。埋土及び溝底面から大型自然礫が出土するが、人為的な所産ではなく流入である。

所　見：傾斜地形に沿うこと、砂質土を埋土としていることから、水利に供された溝と考えられるが、時期は不明である。中・近世の所産としたい。

10区２号溝

調査年度：平成17年度

位　置：10区K-13グリッド

規　模：１号石垣や１号柵列の南で走行を同じに調査された。僅かな検出で東西端が途切れる。全長約1.6m、幅約0.2m、深さ約40㎝と小規模な溝である。東西に直線的な走行を示し、断面形は皿状である。

重　複：遺構との重複は無い。

遺　物：出土遺物は見られなかった。

所　見：１号石垣などと同様な走行を示すことから、近世の所産と考える。性格は不明である。

10区３号溝

調査年度：平成17年度

位　置：10区H・I－18・19グリッド

規　模：10区調査区北東際で調査された。北側は現道で破壊される。全長約4.7m、幅約0.6m、深さ約14㎝の浅い小規模な溝である。緩やかな湾曲を呈し、南から北へ傾斜する。

重　複：北西で12号住居跡上層を切る。

遺　物：出土遺物は見られなかった。

所　見：時期は不明であるが４号やっくらを避けるような走行を示すため、近世以降の所産であろうか。

10区4号溝

調査年度：平成17年度

位　置：10区S－22・23グリッド

規　模：10区調査区北西端で調査された。調査では13号土坑とされていたが、整理段階で４号溝として名称を変更した。全長約6.7m、幅約1.1m、深さ28㎝を測る。

重　複：主な遺構との重複は無い。

遺　物：縄文土器細片の出土を見たが、本遺構に伴う例ではない。

所　見：時期は不明である。近世～近代の所産か

6　やっくら（第100 ～ 101図/PL13･14）

10区１号やっくら

調査年度：平成17年度

位　置：10区E ～ H－3・4グリッド

規　模：東西に検出され、約13.4×0.4mの規模で大型自然礫が集まる。礫は1.5m程の厚さで堆積する。

重　複：重複遺構はなかった。

遺　物:内耳鍋底部破片の出土を見る。１点を図示した。

所　見：集礫は著しく、小型礫が多い。内耳鍋破片の出土は流入とも捉えられるが、本遺構の初現の示唆を考慮して図示した。

10区２号やっくら

調査年度：平成17年度

位　置：10区H－11 ～ 13グリッド

規　模：10区調査区東端で３号やっくらと近接して調査した。東側を調査区域外に伸ばすため全容は不明だが、北東を軸にした集礫帯である。全長約6.4m、厚さ約50㎝を測る。

重　複：南に３号やっくらが近接する

遺　物：陶磁器などの小破片資料を得たが、図示し得る資料の出土は見られなかった。

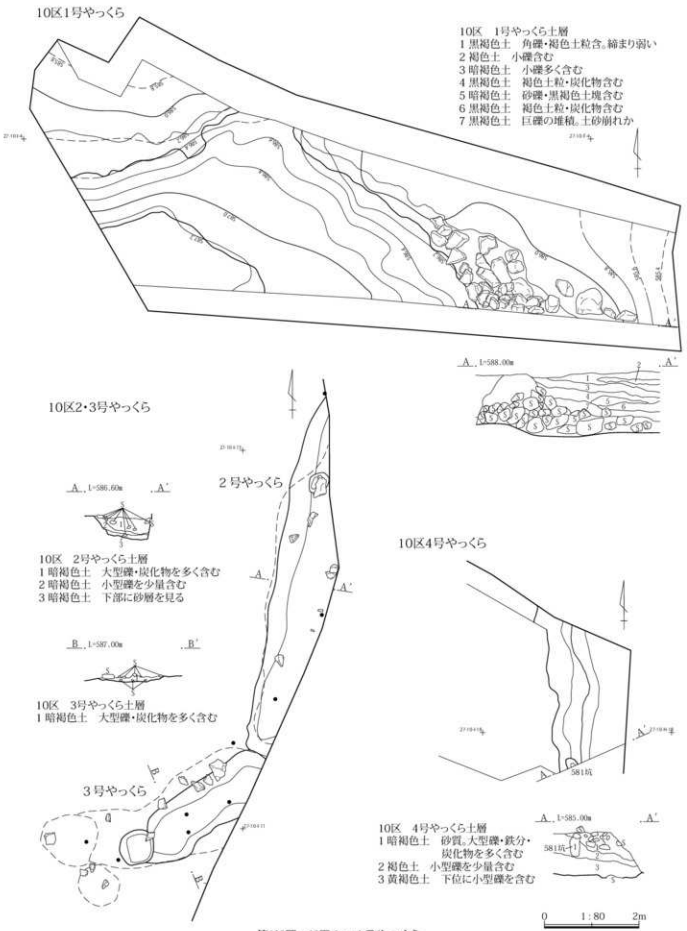
所　見：３号やっくらと連続する様相は、周辺の耕作地の存在が想定できよう。時期は近世段階であろうか。

10区３号やっくら

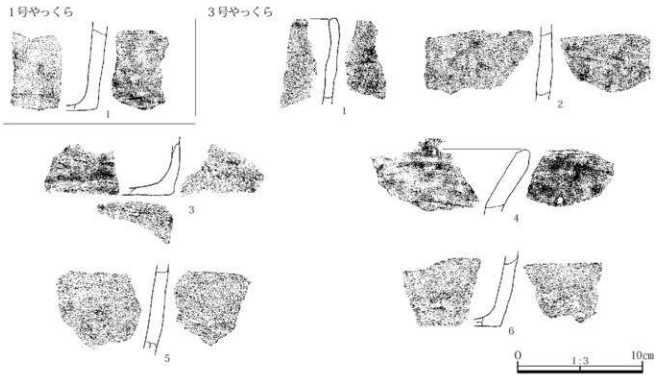
調査年度：平成17年度

位　置：10区H・I－10・11グリッド

規　模：２号やっくらの南側に近接する。同様に東側を調査区域外に伸ばすため、全容は不明である。全長５m以上、幅約1.8mで20㎝ほどの厚みをもって自然礫が集まる。



第100図　10区１～４号やっくら



第101図　10区１・３号やっくら出土遺物

重　複：２号やっくらが北に近接する。

遺　物：内耳鍋破片や陶器鉢口縁部破片など数点が出土した。

所　見：２号やっくらと同様にやや小規模な集礫帯を構成する。図示した中世土器は、１号やっくらと同様に、本遺構の帰属時期を表していない。流入の可能性もある。時期は近世段階か。

10区４号やっくら

調査年度：平成17年度

位　置：10区H－17・18グリッド

規　模：10区調査区北東隅で調査した。北側・東側は調査区域外になるため、全容は把握できない。約3.0×1.6ｍの範囲で、厚さ１ｍに及ぶ自然礫の集礫を見た。

重　複：主な遺構との重複・近接は無い。

遺　物：出土遺物は見られなかった。

所　見：比較的大型礫が集まる。全容は不明だが、２・３号やっくらと同様に調査区東側に偏る傾向は、西側が畑などの耕作地として位置付けられよう。時期は近世段階か。

7　石垣（第102～109図/PL14･15）

9区１号石垣

調査年度：平成17年度

位　置：９区N・0－13・14グリッド

規　模：平安時代住居跡である３号住居跡南に近接して調査された。南側を調査区域外に伸ばすため全容は把握できないが、北西に走行を見せる６ｍ程の石列を確認した。上部は削平され、そのため下部の石列のみの把握となった。

重　複：主たる遺構との重複は無い。

遺　物：出土遺物は見られなかった。

所　見：おそらく近世以降の所産であろう。

9区２号石垣

調査年度：平成17年度

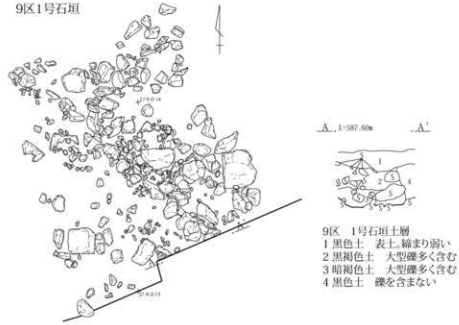
位　置：９区E・F－19・20グリッド

規　模：石垣遺構の一部の調査となった。屈曲部にあたり、5.5m四方に石積みを確認した。高さは90cm余りである。

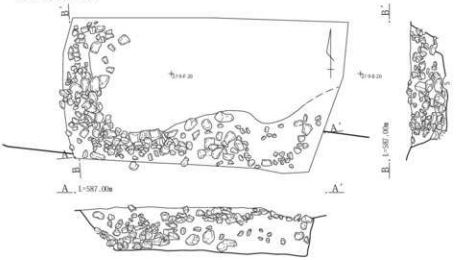
重　複：重複遺構は無い。

遺　物：石垣の一部に五輪塔を主とした石造物を転用していた。おそらく近隣の中世～近世墓地からの転用と思われる。五輪塔は石垣北側にも数多く散乱していた。石垣の崩落ではなく、石垣構築の際の余剰石材の廃棄行為

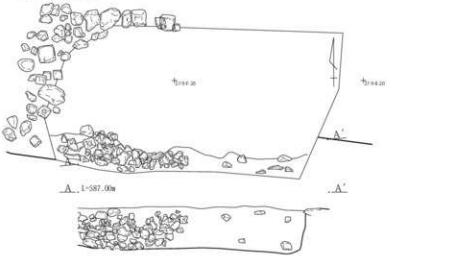
9区1号石垣



9区2号石垣1面

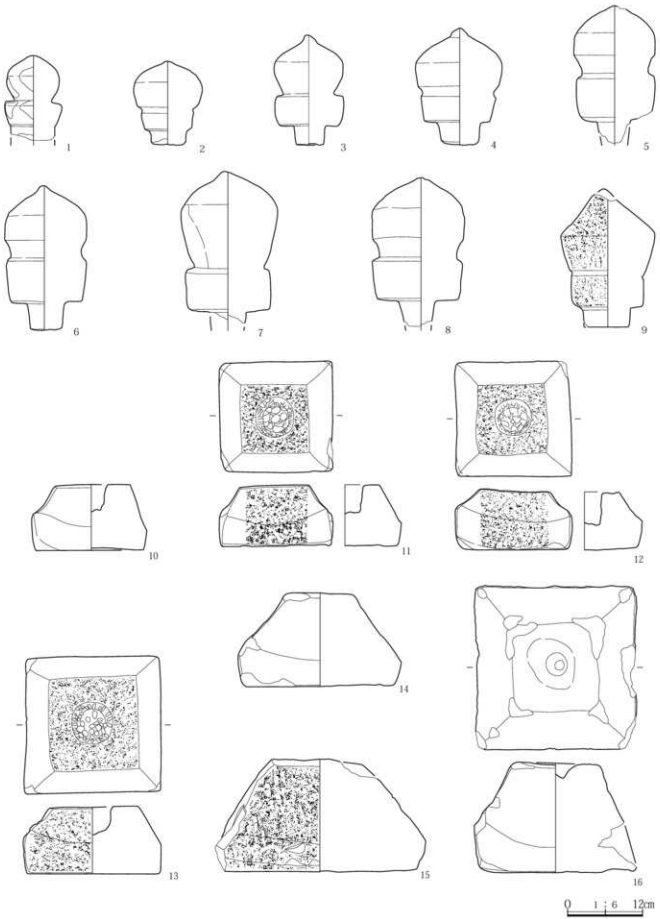


9区2号石垣2面

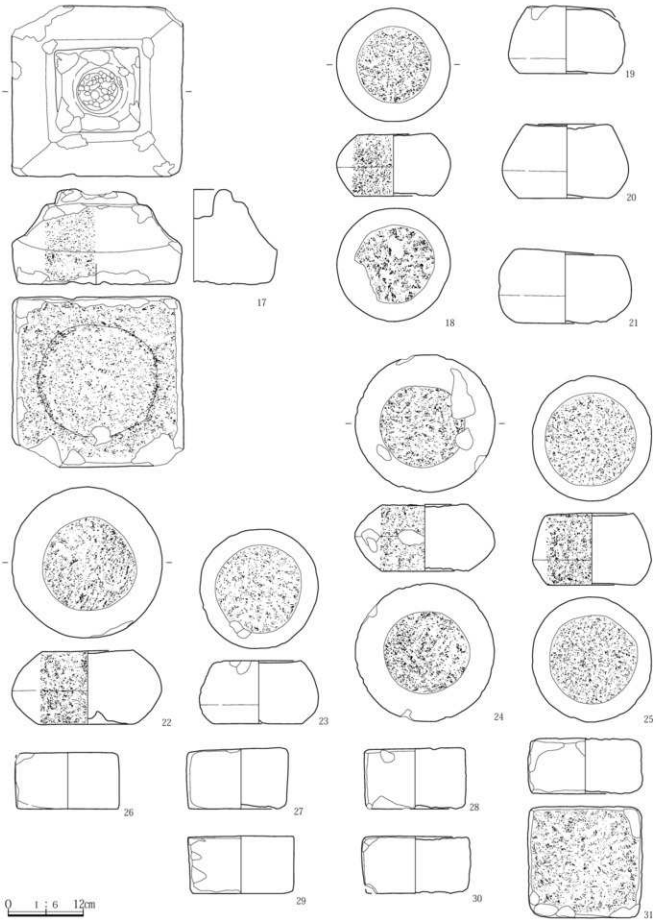


0　1:80　2m

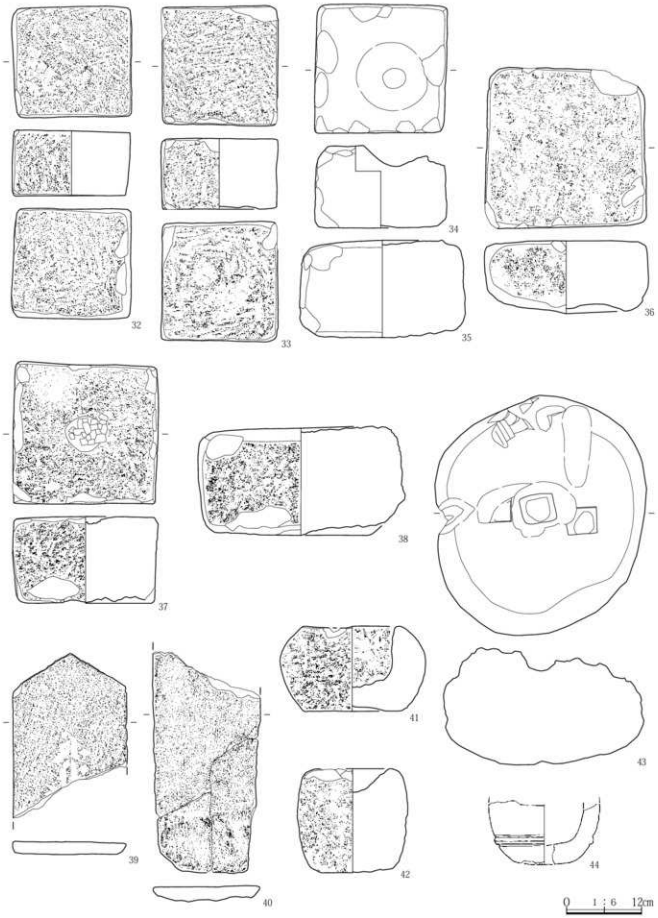
第102図　９区石垣（１）



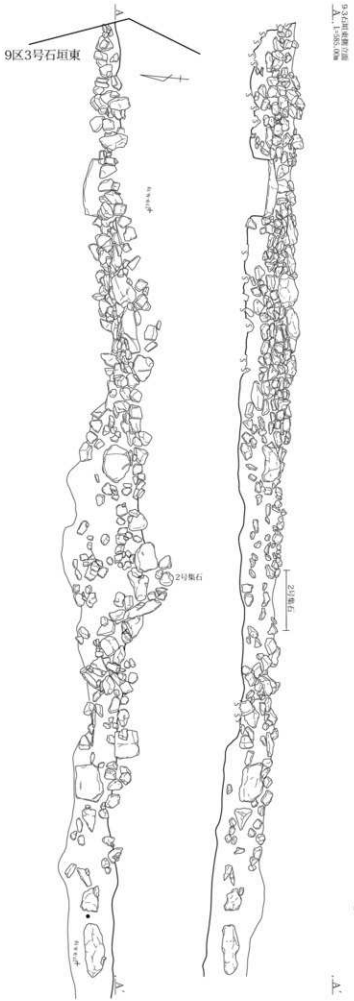
第103図　９区２号石垣出土石造物（１）

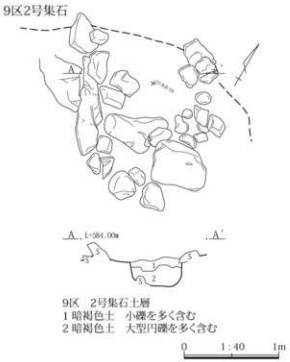


第104図　９区２号石垣出土石造物（２）

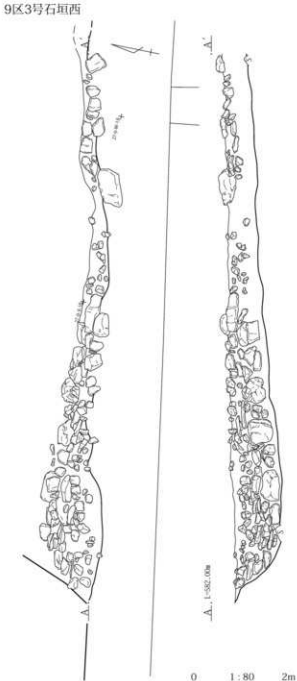


第105図　９区２号石垣出土石造物（３）





第106図　９区石垣（２）・２号集石



第107図　9区石垣（3）

と考える。

所　見：五輪塔の転用は当地の宗教観の変化であろうか。時期は近世であろう。なお､103図～105図に五輪塔･石造物の実測図を掲載したが、2号石垣出土以外の五輪塔・石造物も合わせて掲載した。詳細は巻末の観察表を参照していただきたい。

9区３号石垣

調査年度：平成17年度

位　置：M～R・V～Y－17～19グリッド

規　模：全長50m以上を測る石垣である。中央部分が調査区域外になり、西調査区で延長を調査した。高さは１m前後あり、自然石を４～５段積み上げていた。

重　複：２号集石遺構が重複している。２号集石が切る形態になるが、何らかの付帯施設の可能性もあるため、掲載を同じにした。

遺　物:時期が特定される遺物の出土は見られなかった。

所　見：堅牢な造りの石垣である。２号集石は、本石垣の大型礫を再利用し、小型礫を集積したものである。性格は不明である。

10区１号石垣

調査年度：平成17年度

位　置：10区J・K－14・15グリッド

規　模：10区２号溝や１号柵列に平行する。上部の大半は逸失しており､基盤の根石である石列のみを調査した。走行を東西に向け、全長約6.0mを測る。

重　複：西側に現代の攪乱坑で破壊される

遺　物：出土遺物は無い。

所　見：１号柵列や２号溝との並列は注意したい。近世の所産と考える

10区３号石垣

調査年度：平成17年度

位　置：10区B～F－15～18グリッド

規　模：全長約19m、高さ約1.9mに及ぶ堅牢な石垣である。

重　複：重複遺構は無い。

遺　物：本遺構に伴う遺物は見られなかった。

所　見：５段に及ぶ積み石がなされ、天端石までを確認できた。積み方も整然としている。近世～近代の所産か。

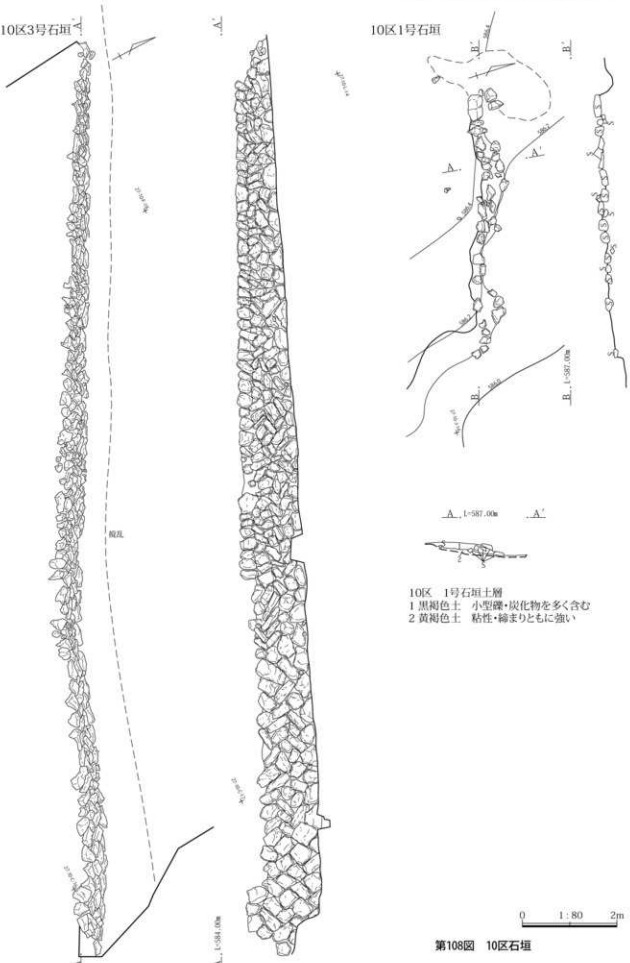
20区18号石垣

調査年度：平成17年度

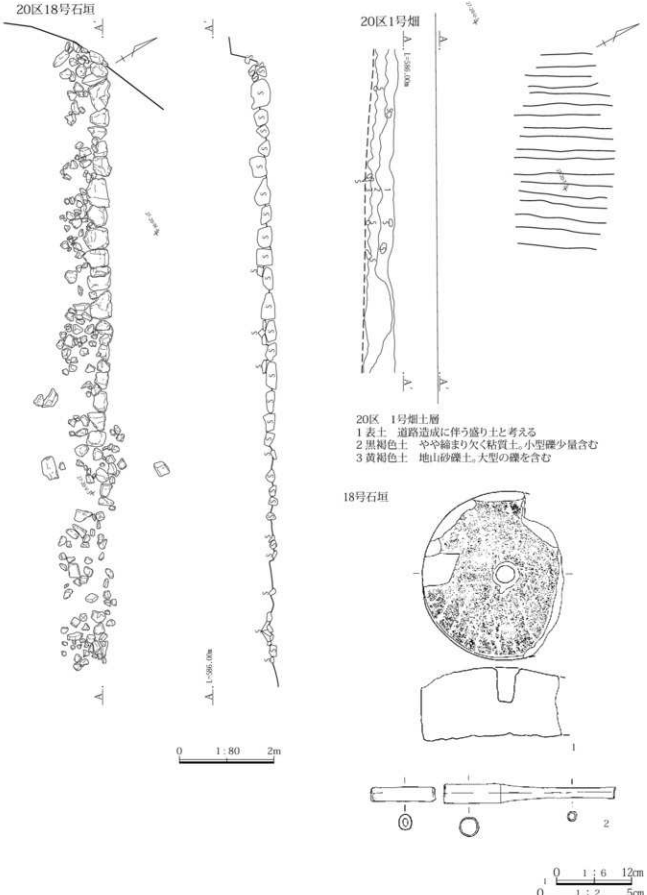
位　置：20区U～X－2～4グリッド

規　模：全長約17mを調査した。西北西を向き、高さは70cm程である。上半部が逸失し、下半部１・２段のみの調査となった。

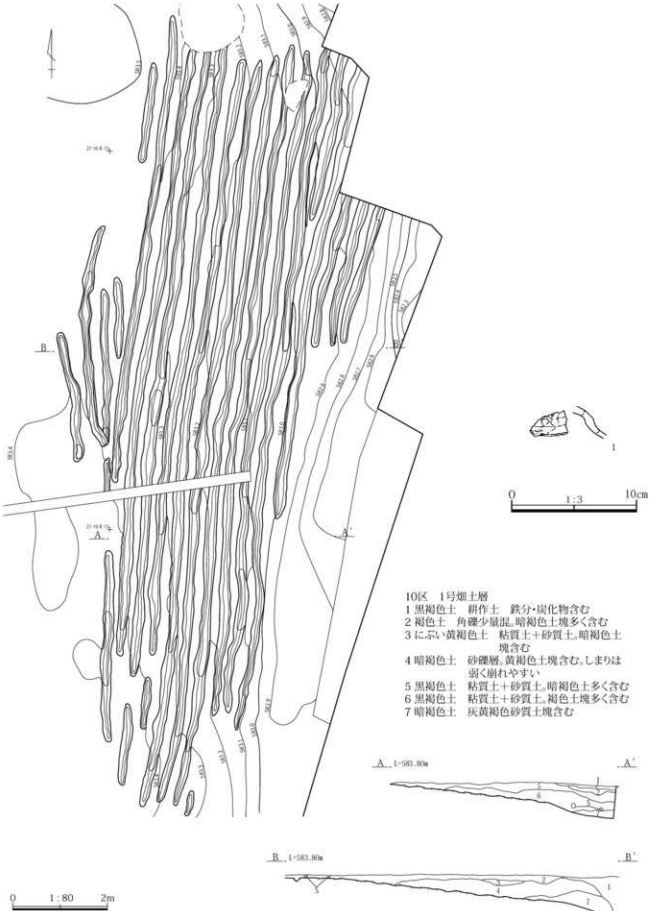
重　複：重複遺構は無い。


10区3号石垣
10区1号石垣
A
A'
B
B'
R
R'
A L=587.00m A'
R L=587.00m
10区　1号石垣土層
1 黒褐色土　小型礫・炭化物を多く含む
2 黄褐色土　粘性・締まりともに強い
0 1:80 2m

第108図　10区石垣



第109図　20区石垣・畑跡・出土遺物



第110図　10区畑跡・出土遺物

遺　物:石垣の一部に供された粉挽き臼が出土している。
所　見：現道基盤下で調査した石垣である。時期は近世～近代と考える。

8　畑（第109・110図/PL15）

10区1号畑

調査年度：平成17年度
位　置：10区C ～ E－11 ～ 15グリッド
規　模：全長約16.6m、幅7.2mの間に20条程の畑サクが北北東に長軸を向けて並ぶ。サク間の距離は40cm前後でやや間隔の狭い印象を得る。
重　複：主な遺構との重複は無い。
遺　物：遺構に伴う出土遺物は見られなかった。
所　見：栽培植物の特定には至っていない。時期も不確定だが、中世～近世の所産であろう。

20区１号畑

調査年度：平成18年度
位　置：20区S・T－２・３グリッド
規　模：約4.3×2.4mの範囲で僅かなサクの痕跡が見出せた。畑跡として調査を行った。
重　複：重複遺構は無い。
遺　物：出土遺物も本遺構に伴う例は無い。
所　見：残存度の悪い畑跡である。時期・栽培作物など不明点が多い。

9　10区墓壙（第111･112図/PL16）

ここでは、明瞭に人骨が出土した土坑を対象にし、主に、10区で調査された墓壙を報告する。なお、次項で、９～ 11区・20区で確認された古代～近世土坑を掲載するが、この中にも、墓壙と考えられる例もあり、10区144号土坑と145号土坑は、人骨－歯片が出土しており、墓壙である。また、観音堂区（10区・20区）でも墓壙が調査されているが、これらは後述することにする。出土人骨の詳細に関しては、４章を参考にしていただきたい。

10区242号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区M－12グリッド
規　模：長軸長約1.9×短軸長約1.0mの長方形を平面形とし、深さは約80cmを測る。断面形は箱形で直立気味の壁がしっかりしている。主軸方位は北北東を向く。
重　複：１号溝の東側で229号坑と接して調査された。周辺にはピット状の土坑が群在する。
人　骨：底面からやや浮いた状態で頭部を北北東に向け、伸展葬で埋葬されていた。一体分であろう。頭骨・顎骨・歯・四肢骨等を見る。
遺　物：人骨以外の出土遺物は無かった。
所　見：伴出遺物を見ないため、時期の特定には至らない。おそらく中世～近世の所産と考える。

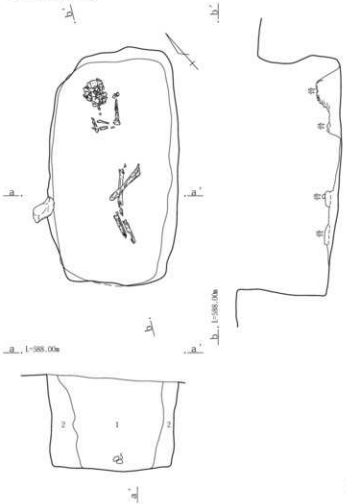
10区243号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区N-13グリッド
規　模：長軸長約1.0×短軸長約0.6mの不整長方形を平面形とする。深さは約40cmを測る。やや小型の土坑である。掘り込みはしっかりしていた。上層から中層にかけて中型礫の出土が目立った。主軸方位は北北東を向く。
重　複：７号住居跡と１号溝の間で調査された。周辺には395号土坑や396号土坑が近接する。243号土坑は3.3m南東に位置する。
人　骨：底面より浮いた状態で、中層より出土している。頭骨・四肢骨の一部が出土し、やや遺存状態は悪い。屈葬による埋葬か。
遺　物：人骨以外の出土遺物は見られなかった。
所　見：伴出遺物を見ないため、時期の特定には至らない。おそらく中世～近世か。

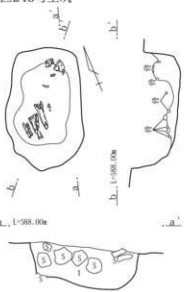
10区420号土坑

調査年度：平成17年度
位　置：10区L－14グリッド
規　模：長軸長約1.6×短軸長1.3m、深さ約30cmを測る浅い長方形土坑である。主軸方位を北東に向ける。
重　複：472 ～ 476号土坑など周辺にはピット状の土坑が群在する。242号土坑は南西に約7.6mの位置にある。
人　骨：大型礫が上層に集中し、中層から下層にかけて、１体分の人骨が出土している。頭部を北東に向ける。頭骨片・歯・四肢骨片を見るが、遺存状態は悪い。
遺　物：古銭１枚を出土する。中層で上肢骨に接して出

10区242号土坑



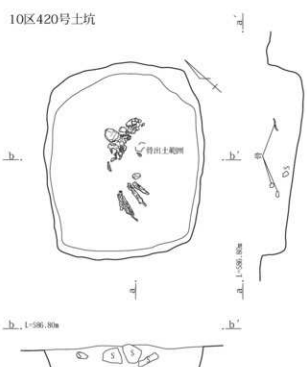
10区243号土坑



10区　243号土坑土層
1 黒褐色土　にぶい黄褐色土塊と小礫を含む。
少量の炭化物を含む

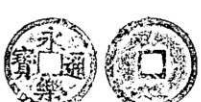
10区　242号土坑土層
1 黒褐色土　にぶい黄褐色土塊と小礫を含む。締まり弱い
2 にぶい黄褐色土　粘性の強い黄褐色土塊と黒色土塊を含む

10区420号土坑



10区　420号土坑土層
1 黒褐色土　大型礫を多量に含む。褐色土塊少量含む。
締まりやや強い

420坑

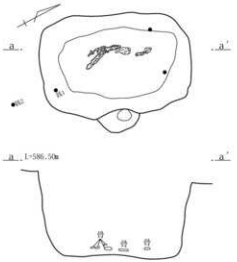


0　1:1　2cm

0　1:30　1m

第111図　10区墓壙・出土遺物（1）

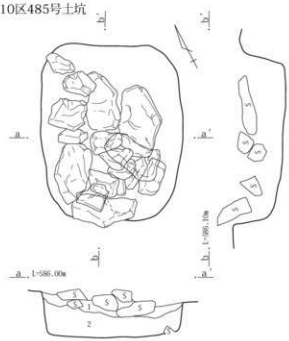
10区432号土坑



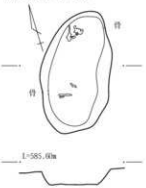
432坑

0　1：1　2cm

10区485号土坑



10区541号土坑



10区　485号土坑土層
1 黒褐色土　大型礫を多量に含む。炭化物も多く含む。締まり弱い
2 暗褐色土　粘性強い。鉄分・白色粒含む

0　1：30　1m

第112図　10区墓壙・出土遺物（２）